

平成18年度

学校経営サポート事業 報告書

平成19年 3月

三重県教育委員会事務局研修分野

はじめに

全国的に教育基本法の改正や学力調査など様々な教育改革を受けて、学校教育に対する興味や関心が高まっています。なかでも、学校教育の質の向上のために、教職員による自己評価や子ども保護者・地域による学校評価など、様々な意見に耳を傾けながら学校が改善・改革に取り組み、説明責任を果たすことが強く求められてきました。また、文部科学省は、平成18年3月に「学校評価のガイドライン」を出して、小中学校のビジョンを明らかにして第三者の評価を受けることで、学校教育の刷新を図ろうとしています。三重県では、すでに平成14年度から段階的に「学校経営品質」の活動として、学校が子どもたちのために継続的な改善活動をP-D-C-Aサイクルにより実施してきました。

このような流れの中で、研修分野では引き続き、「学校経営サポート事業」を継続して実施してきました。年々この事業の有効性が多くの学校に理解され、本年度は予定数をはるかに上回る申し込みがあり、地域的な分散や研究の継続年数等の観点で、13校を選出し、事業を実施しました。

本事業では、学校のめざす姿を具体化するための改革・改善の取組や、授業の見直しを全職員で行うことで子どもたちが主体的に活動する学校づくりを目指した取組等、個々の課題について専門家による新たな視点での助言等をいただくことにより、各学校がかかえる課題に対する支援を行うことができたと思います。それぞれ学校に関わっていただいたアドバイザーの皆様はそれぞれの分野で国内屈指の研究者であり、学校の取組を第三者の研究者としての目で見ても適切なご指導をいただきましたことは、学校にとって非常に有効であったと思います。

今回ここに、事業のまとめとして報告書を作成し、ホームページ上に掲載することといたしました。多くの皆様に本報告書をご覧いただき、各学校における課題解決の一助になれば幸いです。

なお、最後になりましたが、応募いただき熱心に取組をいただきました研究実施校関係者の皆様感謝するとともに、精力的に協力校を訪問し、熱く教育を語り、それぞれの学校の課題の解決に真摯に取り組んでいただいたアドバイザーの方々ならびに研究協力者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成19年3月

三重県教育委員会事務局研修分野
総括室長 上島 均

目 次

I	研究協力校・アドバイザー・協力者一覧	1
II	事業経過概要	2
III	各研究協力校における実践	
①	県立桑名北高等学校	6
②	県立四日市西高等学校	1 7
③	県立名張桔梗丘高等学校	2 7
④	県立名張高等学校	3 6
⑤	県立龔学校	4 4
⑥	松阪市立久保中学校	5 7
⑦	松阪市立殿町中学校	6 2
⑧	東員町立神田小学校	6 7
⑨	津市立棕本小学校	7 5
⑩	玉城町立外城田小学校	8 3
⑪	伊賀市立青山小学校	9 0
⑫	名張市立つつじが丘小学校	9 6
⑬	名張市立梅が丘小学校	1 0 5

I 研究協力校・アドバイザー・協力者一覧

【研究協力校】

県立桑名北高等学校
県立四日市西高等学校
県立名張高等学校
県立名張桔梗丘高等学校
県立聾学校
松阪市立殿町中学校
松阪市立久保中学校
東員町立神田小学校
津市立棕本小学校
玉城町立外城田小学校
伊賀市立青山小学校
名張市立つつじが丘小学校
名張市立梅が丘小学校

【アドバイザー】

国立教育政策研究所	教育政策・評価研究部長	小松郁夫
名城大学大学院	教授	木岡一明
名城大学	教授	池田輝政
中京大学	教授	杉江修治
三重大学	教授（教育実践総合センター長）	佐藤廣和
三重大学	教授	森脇健夫
大阪教育大学	名誉教授	中野陸夫
宮城教育大学	元教授	坂本 幸
名古屋大学大学院	助教授	南部初世
広島大学	助教授	曾余田浩史
株式会社組織開発総合研究所	代表取締役社長（日本経営品質賞主任審査員）	谷口 洋
米国CTI認定資格CPCCP	プロ・コーチ	曾余田順子
国立教育政策研究所	研究員	植田みどり
東海国語教育を学ぶ会		石井順治
富士「学び」の会		佐藤雅彰

【研究協力者】

名古屋大学大学院生 小出禎子

II 事業経過概要

①桑名北高等学校	アドバイザー	名城大学大学院 教授 名古屋大学大学院 助教授		木岡一明 南部初世	
	研究協力者	名古屋大学大学院生		小出禎子	
	訪問回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
	訪問日時	7 月 20 日 (木)	10 月 10 日 (火)	11 月 9 日 (木)	2 月 26 日 (月)
	概 要	研究協議 ・目指す学校像、ビジョンについて ・ビジョンや目標の抽象化について ・授業力向上の進め方について ・授業研究について ・研修の具体的手法について	研究協議 ・目指す方向について ・S 層とその特徴・対応 ・授業について ・その他	研究協議 ・授業の心得について ・授業力向上のための対策について ・授業参観した意見・感想及び課題について	研究協議 ・3年間の総括 ・本年殿の総括
②四日市西高等学校	アドバイザー	名城大学 教授		池田 輝政	
	訪問回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
	訪問日時	7 月 6 日 (木)	10 月 6 日 (金)	12 月 13 日 (水)	1 月 27 日 (金)
	概 要	課題の確認 ・本校の現状と把握 ・昨年度のキャリア教育推進事業の成果と課題 ・本校の抱える課題	研究協議 ・本校の教育課題について	講演協議 ・学校生活における課題について	研究協議 ・今年度の協議の流れと実績の振り返り
③名張桔梗丘高等学校	アドバイザー	国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部長 国立教育政策研究所 研究員		小松郁夫 植田みどり	
	訪問回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回
	訪問日時	9 月 1 日 (金)	9 月 28 日 (水)	11 月 17 日 (金)	2 月 14 日 (水)
	概 要	研究協議 ・授業改善に向けた取組の進捗状況と授業公開の日程 ・授業公開の考え方と持ち方 ・生徒による授業評価の観点と具体的質問項目 ・校時検討グループからの提案 ・単位制改善グループ進捗状況	研究協議 ・校時の改正について ・部活動の時間確保 ・単位制の改善 ・保護者、地域へのアンケートについて	研究協議 ・今年度の課題と今後の方向性 ・授業評価シートの観点、分析方法 ・生徒、教職員へのアンケートの質問項目について	研究協議 ・教育改革の動向 ・名張桔梗丘高校の現状と課題 ・改革の方向性

④名張高等学校	アドバイザー	広島大学 助教授 プロ・コーチ		曾余田 浩史 曾余田 順子		
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
	訪問日時	7月6日(木)	9月7日(木)	9月28日(木)	11月2日(木)	11月30日(木)
	概要	・コーチングを通じたマネジメント研修 ・コーチング自身をやる	・コアメンバーによるコーチング研修 ワークショップ フォローアップセッション	・コアメンバーによるコーチング研修 ワークショップ フォローアップセッション	・コーチング的コミュニケーションのあり方	・今後の名張高校のあり方について マッピングの手法を通じて
	アドバイザー	宮城教育大学 元教授		坂本 幸		
⑤県立豊学校	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	
	訪問日時	6月20日(火)	10月24日(火)	1月16日(火)	2月20日(火)	
	概要	研究授業参観 研究協議 ・日本語習得の充実を図る指導 ・支援のあり方について	研究授業参観 研究協議 ・生きる力を育てる指導・支援のあり方について	研究授業参観 講義 研究協議 ・朝の学習と授業研究 ・演題「助詞と動作語」	研究授業参観 研究協議 本年度のまとめ	
	アドバイザー	富士「学び」の会		佐藤 雅彰		
	⑥松阪市立久保中学校	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回
訪問日時		6月9日(金)	10月18日(水)	11月17日(金)	1月11日(木)	
概要		研究授業 協議 ・小集団活動について ・各教科の現在の取組について	研究授業 協議 ・視点生徒の様子について ・視点生徒以外の生徒について ・小集団活動を使う場面について	研究授業 協議 事後検討会	研究授業 講演「小中の連携について」	
アドバイザー		大阪教育大学 名誉教授		中野 陸夫		
⑦松阪市立殿町中学校		訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回
	訪問日時	6月21日(水)	8月9日(水)	11月16日(木)	2月20日(火)	
	概要	研究の概要説明 ・研修計画及び人権同和教育計画 ・今後の日程及び内容	研究協議 ・学年別人権学習の交流 講話 人権同和教育	授業公開 学年別研究協議	研究授業	

⑧東員町立神田小学校	アドバイザー	三重大学 教授 佐藤 廣和				
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	
	訪問日時	6月30日(金)	9月15日(金)	10月13日(金)	10月17日(金)	
	概要	授業参観 研究協議 ・「学びの共同体」を目指して ・授業や自動の様子を見て	授業参観 研究協議 ・研究授業について ・職員の日頃の課題について	授業参観 研究協議 講義 「学びの共同体の意義について」	授業参観 研究協議 講義 「神田小学校の学びの共同体に期待すること」	
⑨津市立椋本小学校	アドバイザー	(株)組織開発総合研究所代表取締役社長(日本経営品質賞主任審査員) 谷口 洋				
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	
	訪問日時	6月14日(水)	7月21日(金)	12月13日(水)	12月7日(水)	
	概要	講演 「学校経営品質の基本的な考え方について」	研究協議 ・全教職員による合議	研究協議 ・学校評価と学校経営品質の関連について ・今後の学校の進む方向について	研究協議 ・学校経営品質のまとめ	
⑩玉城町立外城田小学校	アドバイザー	東海国語教育を学ぶ会 石井 順治				
	訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回
	訪問日時	6月28日(水)	10月24日(火)	11月22日(水)	12月6日(水)	1月26日(金)
	概要	授業参観 研究授業 反省会 個別指導	授業参観 研究授業 反省会 個別指導	授業参観 研究授業 反省会 個別指導	授業参観 研究授業 反省会 個別指導	授業参観 研究授業 反省会 個別指導
	⑪伊賀市立青山小学校	アドバイザー	三重大学 教授 森脇 健夫			
訪問回数	第1回	第2回	第3回	第4回		
訪問日時	6月27日(水)	10月27日(金)	10月31日(火)	2月28日(水)		
概要	児童の実態報告 研究授業 事後研究	研究授業 青山小中交流会	研究授業 授業参観	講演 「学力・感性と授業」－言葉と体験をつなぐ－		

⑫ 名張市立 つつしが丘 小学校	アドバイザー	中京大学 教授				杉江 修治	
	訪問回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回	
	訪問日時	6月15日 (木)	7月6日 (木)	10月19日 (木)	11月16日 (木)	2月18日 (木)	
	概 要	授業参観 研究協議 ・研究授業について	授業参観 研究協議 ・研究授業について	授業参観 研究協議 ・研究授業について	授業参観 研究協議 ・研究授業について	授業参観 研究協議 ・研究授業について	
	⑬ 名張市立 梅が丘小 学 校	アドバイザー	東海国語教育を学ぶ会			石井 順治	
訪問回数	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回			
訪問日時	5月25日 (木)	10月31日 (火)	11月30日 (木)	1月18日 (木)			
概 要	公開授業 授業参観 指導・助言	公開授業 授業参観 指導・助言	公開授業 授業参観 指導・助言	公開授業 授業参観 指導・助言			

Ⅲ 各研究協力校における実践

① 県立桑名北高等学校

所在地	桑名市下深谷部字山王 2 5 2 7
交通機関等	近鉄 養老線下深谷駅下車徒歩 1 0 分
電話番号	0 5 9 4 - 2 9 - 3 6 1 0
FAX番号	0 5 9 4 - 2 9 - 3 6 2 0
教職員数	7 4 名
生徒数	5 6 1 名

1 学校の概要

本校は昭和 55 年 4 月に開校され、周辺に名古屋地区のベットタウンとして開発された団地を抱えている。開校以来 28 年が経過したが、途中、桑員学区協定（準小学区制）の廃止・いなべ総合学園の新設等があり、本校への受検希望者が減少した。桑員地区においては少子化の影響はそれほどなく、むしろ中学生にとって本校の魅力がなくなっているといえる。

そこで、平成 16 年度より 3 年間、学校経営アドバイザー事業・学校経営サポート事業のご支援をいただきながら、本校の新たな進むべき道を模索してきた。

2 学校、地域、児童の現状

普通科の単科高校として開校された本校は、大学・短大、専門学校、就職希望者が混在する進路多様な学校である。創立当初 8～10 クラス規模の学校であったが、平成 15 年度推薦・一般入試（1 次）より 7 クラス募集でも定員割れを起し、平成 16 年度は、定員の 0.6 倍にも満たない状態にあった。平成 18 年度入試において 5 クラス募集としてやっと定員ぎりぎりとなった。

定員割れに伴い生徒の質も変わり、授業にまじめに取り組むことのできない生徒が増加した。また授業中、校門にバイク少年が押しかけるなど、地域での評判も悪化した。平成 15 年度は、緊急課題で「2 学期以降の生徒への対応」を話し合った。また平成 16 年度から実践した「授業規律の取り組み」の成果により校内も少し落ち着きを取り戻し、次の一手が望まれる状況となってきた。

3 アドバイスを希望する課題

平成 16・17 年度の 2 年間、学校経営アドバイザー事業・学校経営サポート事業のご支援をいただき、本校の現状の把握や、将来に向けた方向性について議論を重ねてきた。そこで本年度（平成 18 年度）は、引き続き学校経営サポート事業のご協力を得て、改革の中核をなす内容「授業力の向上」に向けて検討を行っていきたいと考えている。まず初めに、自らの授業を見つめ直し、本校の生徒にとってより有効な授業研究・実践を行い、さらに、進路多様な生徒のニーズに応えた授業をどのように考え実施していくかを、シラバスや授業計画案を検討することにより実現していきたい。そのための授業評価の方法や基本的な考え方等をご指導いただきたい。本校の学校改革が定着し、生徒は自信を持ち、保護者は安心し、さらに地域からは信頼される学校へ進化するよう、ご指導とご支援を期待している。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時：平成18年7月20日（木） 14：30～16：00

イ 場 所：桑名北高校校長室

ウ 参加者：木岡一明〔名城大学大学院大学・学校づくり研究科教授〕

南部初世〔名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授〕

小出禎子〔名古屋大学大学院生〕

浅尾正男学校長 大山真穂教頭 大西健之教頭 飯田賢一教諭 西塚 享教諭

西村雅彦教諭 桃澤秀樹教諭 森 健人教諭

エ 内 容

① 活動内容

木岡アドバイザーから「学校集団のよさを生かした授業力の向上のあり方—学校を元気にする組織開発の展開」というテーマでプレゼンテーションが行われ、その後、管理職、教務委員、アドバイザーにより、18年度の学校改革のテーマ「授業力向上」について協議された。特に、プレゼンテーションを受けての質疑応答を中心に、今後の進め方などについて話し合いが行なわれた。

② 協議内容

主な協議内容は以下のとおりである。

(1) 目指す学校像、ビジョンについて

これまで本校に求められていたのは、授業をきちんと成立させることであった。現在は学校が落ち着き、授業が成立するようになったため、新たに進学や就職を目指そうという目標も出てきた。教師が考えている目標がそれぞれ異なってきたため、目指す学校像が見えにくくなっている。そのような状況では、教師が学校の目標やビジョンを共有することは非常に困難なことではないのか。

⇒ 目指す学校とは、こんな学校にしたいというビジョンが十分共有され、そのビジョンの下で異なった目標や方向性を持つ教師が自由に動き、ぶつかり合うことで試行錯誤や実験が起こり、さらに新しい動きを目指していくことができる学校と捉えられる。

ビジョンの共有化がなされなければ、改革はできない。一部の教師が中心となって動かそうとするのではなく、やる気のある人をいかに巻き込むかであり、ビジョンの共有化のためには納得しやすいストーリーを作ることである。

(2) ビジョンや目標の抽象化について

ビジョンや目標を共有するためには、ある程度抽象的な表現にならざるを得ない。推進していくためには、具体的な目標を数値化し、集団として取り組みやすく、わかり易くすることが必要となるのではないのか。

⇒ ビジョンは最終的には抽象的な表現にならざるを得ないが、例えば「促進」や「向上」の内

容について具体的な目標設定が前提となる。そのためには、授業を担当している教師が考えていることを出し合うことが共有を進める一つの手順である。これまでやってきたことの持つ意味や意義を教師同士がまずお互いに語り合うことからはじめ、定義づけを行うことが大切である。

(3) 授業力向上の進め方について

達成感がないと前進しにくいと、最初は小さな目標から始めたい。例えばカレッジクラスの充実を図るために、模試の点数を上げるということも考えられる。授業力向上のためにはどこから着手すればよいのか。

⇒ 教師のキャリアの違いによって授業や学習の捉え方が違うが、そこはこれまで議論されてこなかった。そこで、子ども達の現状をもう少し丁寧に診断し、子どもにあった授業ができていないのか検討することが必要である。この学校の生徒が今何を学ぶべきか、それが学べているのか否か、学べていないとするとどのようにすれば学ぶことができるのかという見通しを、生徒の学力や進路希望によってある程度のグループに分けて分析することである。

具体的には、個々の授業の中で教師は生徒一人ひとりを診断しているので、同じクラスを担当している教師同士が具体的固有名詞をあげながら話し合うことが重要である。

(4) 授業研究について

どのような視点で見て助言すればよいのか。現在コミュニケーションや進学用のカリキュラムを並列しており、カリキュラム上問題がないとすれば、生徒にどう授業をするのがこれからの議論となる。

⇒ 授業を行っている先生が気づかないこと、知らないことを言うことが基本である。例えば、自分であればこうするという視点である。自分と比較することで違いを知り、他の教師が授業や学習についてどのように考えているのかを認識することが大切である。

また、授業の感想を付箋に書いて貼るようなコーナーを作るなど、簡単にできる方法を提案することも良い。

(5) 研修の具体的手法について

アドバイザーより、全体研修等で行う内容として、文科省のホームページに記載されている「持ち味分析」「授業観」に関する演習の方法が紹介された。

以上が主な協議内容であるが、今後の学校経営サポート協議会において、授業に関する議論をする場合は他の教員にも広く参加を呼びかけ、授業改革が必要であると感じている教員も参加できるよう工夫することとなった。

オ アドバイザーより

学校改革として授業力向上という方向性はよい。これまで本校では一部のメンバーによってコース制導入という改革が進められ、周りの教員は共有できていないという組織の問題があっ

た。それを解消するためには、改革推進メンバーだけでなく、これまで関わってきたメンバーややる気のある教員をさらに巻き込んでいくことが必要である。

また、昨年度までコース制の検討をしつつも、目指す学校像の共有化がなされないまま議論が進められてきた。そこで、授業や学習について意見交換をすることから始め、学校全体で目指すビジョンの共有化を図ることが必要である。具体的には、授業を担当している教師が生徒の現状を見て、学力や進路希望などいくつかの要因でグループに分け、グループごとにどんな力をどれまでにつけさせたいのかを話し合うことである。授業力を高めるというのは、個々人が今の授業のレベルを上げるというより、集団的な教育力を高めるという意味で理解すべきである。

全体として注意を払うべき点は、学校改革の軸として設定してきたコース制導入が実現困難な見通しとなったために、教師の中に徒労感が募り、授業改革への意義が見出されないということである。そのため、まずは具体的な授業や学習について教師同士がお互いに話し合い、自分と他人の授業論や学習論に対する意識や考えの違いを認識し、授業の課題が見つけれられるような機会を設けることが必要である。

(2) 第2回

ア 日時：平成18年10月10日（火） 11:30～15:00

イ 場所：桑名北高校校長室

ウ 参加者：木岡一明〔名城大学大学院大学・学校づくり研究科教授〕

南部初世〔名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授〕

小出禎子〔名古屋大学大学院生〕

浅尾正男学校長 大山真穂教頭 大西健之教頭 安藤友頼事務長 飯田賢一教諭

佐藤嘉晃教諭 西塚 享教諭 西村雅彦教諭 桃澤秀樹教諭 森 健人教諭

エ 内容

① 活動内容

管理職、教務委員、アドバイザーにより、「授業力向上」というテーマのもと、校内協議会から示された資料を基に「分析と目指す方向及び対策」について話し合いが行われ、続いて教頭、アドバイザーにより校内見学と管理職も交えた今後の対応について打ち合わせが行われた。

② 協議内容

主な協議内容は以下のようなものである。

(1) 目指す方向について

これまで本校は就職中心のキャリア教育の充実を図ることに重点が置かれていたが、今年度から進学を目指したカレッジクラスが設置されたこともあり、カレッジクラスの充実と平行しながら進学を意識した指導にも力を入れることが提案された。特に、「進学で頑張らせたい生徒層」（以下、「S層」と呼ぶ）への対応策を拡充させつつ、生徒全体の学力向上を目指し、結果として他の生徒の学力も高め、生徒全体に変化が生じるような対策を検討し、保護者や地域、生徒の信頼を獲得する方向性が打ち出された。

(2) S層とその特徴

S層の生徒は、カレッジクラス以外に1クラス4、5人で5クラス30人ぐらい存在すると考えられる。その層の生徒は、学習をせずに試験である程度点数が獲得できるため、特徴として特に「(ケ) 家庭学習習慣が全くなく、または失ってしまい、テスト直前でも勉強しない生徒が多い」「(コ) 入学してから、交友関係やバイト、または進路に対する意識の希薄化によって、崩れていっている」となる傾向（校内協議会でまとめられた本校の生徒の分析から）がある。

(3) 1年生のS層への対応

S層の生徒の特徴から個別に指導計画を立て、生徒指導、生活指導、学習指導を長期的に図っていくことが必要である。具体的には次のような対策が出された。

- ・早期のオリエンテーションについて

卒業生で大学生になった子ども達を呼んで講演会や合宿を行い、進路意識を持たせる。

- ・自習室の運営について

生徒の学ぶ場を保障するために自習室を設置する。

- ・保護者への対応について

保護者への啓蒙活動として2者懇談会を設け、個人面談を徹底して行う。面談ができない場合は、手紙や連絡帳を用いる等何らかの方法をとる。

- ・「課外」について

進学における3年間の流れを明確化し、「課外」をその中に位置づける。現在1年生の「課外」は週2回設定されているが、これまでの反省として各教科の連携を持たない取り組みであったことがあげられるため、系統立てて行うことを検討する。

- ・担任以外のチューターについて

各クラスにS層の生徒が分散しているので、担任以外に生徒への対応ができるチューターを設ける。

(4) 2年生・3年生のS層への対応

2年生については、S層の生徒の把握に努め、1年生と同様の対応を行っていく。3年生については、進路希望が明確で「課外」に出席している生徒をS層の生徒と捉え対応する。

(5) 授業について

これからは、生徒の進学への意欲や潜在能力をどう引き出すかに焦点を当てた授業づくりを目指す。そのため、生徒の潜在能力を否定する教師の生徒観を変えるアプローチを検討する。具体的な対策として、研究授業や授業公開による教員同士の意見交換、授業を撮影し自分の教え方を見て反省材料とする、テストを有効利用して授業分析をする、授業観について演習を行う等が提案された。

(6) その他

生徒のつまずきを明確化・共有化するため、英数国理社の科目ごとに「北高テスト」を作成し、年度当初に実施して生徒の状況を把握し、「個人カルテ」を作成する。さらにつまずいた点について特別授業を録画したDVDライブラリを作成し、生徒が自主的に利用できるようにすることが提案された。

ベンチマーキングについては、これまで視察に行った学校の事例をもう一度整理し、本校の潜在的なS層のために、エンカレッジ校のきめ細かい取り組みのノウハウを学ぶ。

以上のように様々な提案とそれに対する意見が出されたが、現在カレッジクラスのシラバスや対策が検討されていない中で、潜在能力を持つ生徒をS層として認識し、どう対応するのかという議論が一方で進んでいる。また、その対応も来年か今年かという時期や学年等が明確ではないため、議論が混乱する場面もあった。そこで、S層に関してはもう一度整理をし、学年、実施する時期を分けて、校内協議会で再検討することとなった。

オ アドバイザーから

校内協議会から提案されたものは、授業分析のように的確に分析されている部分もあるが、対策が具体的ではない。学年や時期を分け、長期的取り組みと短期的取り組みを明確にしなければならない。今年度の結果が次に影響するので、特に3月までの取り組みを考えることが重要である。

協議の中でも指摘したように、S層の把握と、具体的な対応策が焦点となる。

今後の校内協議会の活動として必要なのは、提案された生徒分析について相互の関連付けを行い、どこを解決の糸口にするか検討すること、メンバーで授業観についての演習を行うこと、続いて「教員の授業心得10か条づくり」をすることである。

(3) 第3回

ア 日 時：平成18年11月9日（木） 10：30～17：00

イ 場 所：桑名北高校校長室

ウ 参加者：木岡一明〔名城大学大学院大学・学校づくり研究科教授〕

南部初世〔名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授〕

小出禎子〔名古屋大学大学院生〕

浅尾正男学校長 大山真穂教頭 大西健之教頭 安藤友頼事務長 西塚 享教諭

エ 内 容：

①活動内容

管理職、アドバイザーにより、校内協議会から示された「授業力向上」のための具体的な対策について話し合いが行われた。また、公開授業を参観し、職員研修会の全体会ではアドバイザーより公開授業の講評がなされた。その後、管理職、教務委員、アドバイザーにより、参観した授業に対する課題も含め、「授業力向上」に対する今後の対応について打ち合わせが行われた。

②協議内容

校内協議会より提案された授業心得と授業力向上のための対策、公開授業に対する意見・感想及び課題について、それぞれ以下のように話し合いがなされた。

(1) 授業心得について

前回の協議会で課題となっていた「授業心得10か条」について、校内協議会で検討した結果、これまで本校で実施してきた授業規律をもう一度全教員が生徒に守らせるように指導することとなった。指導内容は、授業開始時に机の上に用具がきちんと配置されているか等をチェックし、生徒の授業態勢をつくるものである。現在は、指導している教員としていない教員がいるため、最低限授業規律の指導を徹底させることが提案された。

しかし、この授業規律は、生徒に守らせるというものであり、必要なことは、教員が授業を行うに当って何を心得とし、そのために教師が最低限何をすべきか具体的な項目をあげることである。そこで、再度、校内協議会で、生徒に授業規律を守らせるために、教員が何を行うのかについて検討することとなった。

(2) 授業力向上のための対策について

校内協議会からは、授業力向上のための対策として、自習室の設置、生徒・保護者への意識の誘導、「北校テスト」作成、「勉強 (or 進学) の手引き」の作成、DVDライブラリー制作、課外、宿題、授業力向上委員会の設置、進路指導年間計画の作成が提案された。

これらの対策は、「進学で頑張らせたい生徒層」(以下「S層」と呼ぶ)とそれ以外の層では内容が異なってくるため、全て2本立てで検討することが必要である。

また、ベンチマークについて、進学を目指すための授業力向上という視点から、「学習の手引き」などを参考にできる高校について、ロケーションが同じようなところから探すこととなった。

(3) 授業参観した意見・感想及び課題について

公開授業を参観した結果、授業にはそれぞれに持ち味があったが、よい授業には、展開にストーリー性があること、発問が的確であること、生徒の学習への構えが上手につくられていることの3点が備わっていた。ストーリー性がある授業は、聞くものがひきつけられ、ポイントが押さえられていて、何をねがいとしているのかよくわかった。的確な発問は、生徒に考えさせる必要がある時には、生徒が何を考えればいいのかわかるようなものになっており、また、生徒が答えたことに対して上手にほめていた。学習への構えをつくるために、視線で注意を満遍なく喚起したり、直接肩に手を置いて喚起したりしていた。このような授業をするためには、深い教材研究がなされており、本質的なところを現代的な問題と対比しながら説明し、皆が参加する授業となっていた。

このような授業の一方で、反対に生徒のやる気をそいだ指導をしたり、生徒が理解できない発問をしたり、教科内容が今の生活とどう結び付くのかがあいまいであるなど、クラスの雰囲気は暗く、寝ている生徒が多くなるような授業もあった。そこで、全体的な課題として、授業規律、チャイム、チームティーチングについて検討する必要があることが指摘された。

以上が主に話し合われた内容であるが、今年度でこのサポート事業は終了するため、来年度から授業力向上等のための具体的な取り組みが展開できるよう、次回の最終協議会までに、今回課題とされた点について校内協議会で検討し、「学習の手引き」やDVD制作など実施できる取り組みについては、進めていくこととなった。

オ アドバイザーから

校内協議会から提案された授業力向上のための対策は、教員側の取り組み方だけとなっており、一つ一つが関連した発想になっておらず、教員が問題を抱え込んだ形となっている。対策を検討する場合は、授業力向上と学力向上とキャリア支援の3つの軸を考えるとよい。現在の対策は、授業力向上と学力向上についてはテストや「勉強の手引き」、自習室での対応が考えられている。それに対して、授業力向上とキャリア支援の絡みについては、進路指導計画と希望調査しか出ておらず、さらに学力向上とキャリア支援を絡めた発想は弱い。そこで、進路希望に応じてどんな力をつけていけばいいのか、何を勉強させたらいいのかを議論することが必要で、その時に、進学を希望する「S層」と学習困難な生徒を分けて考えることも重要なポイントである。

一方、参観した授業の中では、生徒の意欲は高いと感じられた。そこで、授業力向上のためには、生徒が自分の授業をどう受け止めているのか、アンケートや授業評価ではなく、教員自身が研究し、同僚の教員から意見をもらうことも大事である。また、生徒の高い意欲を上手に使い、生徒とともに作っていくような取り組みにすることも考えられる。一つの例として、現在実施されている入学時の面談を活用させ、本校に入学した理由、考えている進路を聞き取り、カルテを作成し、そのための計画と取り組みを生徒とともに検討する。「勉強の手引き」やDVDライブラリー制作も、生徒が必要としているものをアンケートによって調査する、希望者を募ってシナリオを生徒に書かせるなど、生徒と一緒に作成することも可能である。

このためにも、よい授業を見て、上手な教師から学び、もっと日常的に授業について議論すること、自分がどう生徒と関わるのか、授業内容や教科内容に関連付けた視点を持つような雑談から取り組むことが必要である。

(4) 第4回

ア 日 時：平成19年2月26日(月) 13:30～17:00

イ 場 所：桑名北高校校長室

ウ 参加者：木岡一明〔名城大学大学院大学・学校づくり研究科教授〕

南部初世〔名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授〕

小出禎子〔名古屋大学大学院生〕

浅尾正男学校長 大山真穂教頭 大西健之教頭 安藤友頼事務長 飯田賢一教諭

佐藤嘉晃教諭 西塚 享教諭 西村雅彦教諭 桃澤秀樹教諭 森 健人教諭

エ 内 容：

①活動内容

管理職、教務委員、アドバイザーにより、3年間の総括と本年度の総括について協議が行われた。また、これまでの取り組みを今後につなげるための話し合いもなされた。

②協議内容

主な協議内容は、以下のように3年間の総括と本年度の総括である。また、本年度は「授業力向上」というテーマで校内協議会が提案した対策のうち、実施に移すことができた「学習の手引き」とカレッジ委員会についても、以下のような検討がなされた。

(1) 3年間の総括

3年前の本校は、募集定員割れを起こしており、それに伴って授業に取り組めない生徒が増え、学校改革が急務となった。そこで、学校経営サポート事業の1年目は、授業規律への取り組みを行い、ある程度成果は得られた。これと並行して授業改善の取り組みも始めたが、公開授業を行って授業を見せ合うこと等はなかなか進まなかった。2年目はコース制という制度的な設計を行い、進学を目指す生徒の希望に応えるためのコース、学習困難な生徒に対して基本的な生活習慣やコミュニケーション能力を身に付けさせることを目的としたコース等の検討をしたが、コース制の実現には至らなかった。そこで、3年目は「授業力向上」をテーマに掲げ、授業を成立させるために行っていた授業規律から、生徒の学習の質をより高める授業改善を目指したものと取り組みを転換し、そのための具体的な対策の検討を行い、いくつかの対策を実施に移すことができた。

(2) 本年度の総括

これまで校内協議会では「授業力向上」を図るために、いくつかの対策の提案を行い、学校経営サポート協議会でその対策について検討を行ってきた。その対策のうち、本年度中に実施に移せたものは、学習室の設置、「学習の手引き」の作成、カレッジ委員会の設置と開催の3点であった。特に、「学習の手引き」は、次年度にカレッジクラスと希望者に配布するものを作成することができた。また、進学を目指したカレッジクラスの生徒の支援については、これまで担任に全てを任せてきたことから、学校全体の取り組みとするためにカレッジ委員会を設置し、本年度はカレッジクラスの現状と課題について共有し、その対応を検討する委員会を5回開催することができた。

1) 「学習の手引き」について

「学習の手引き」は、進学目的の学習を主体とした内容であり、最終的には、進学するに当たって、学習や模試や手続き等のすべき事ごととその時期についても載せることにより、進学の具体的な流れを生徒が理解できるようなものにすることが求められる。

各教科の具体的な内容について、意見が出されたが、内容を充実させるとともに、一方で、生徒が読んで活用するよう働きかけることも必要であることが指摘された。

今後検討すべき課題としては、これまで生徒に配布してきた「進学のしおり」との関連で、「学習の手引き」を「進学のしおり」の替わりとするのかという検討や、キャリア教育や他の教科の関連をどのように内容に盛り込んでいくかがあげられた。

2) カレッジ委員会について

本年度のテーマ「授業力向上」のための対策の一つとして設置したカレッジ委員会は、

カレッジクラスの担任3名、進路、教務、総務、管理職の教職員からなり、主にカレッジクラスの充実について推進していくことが目的である。カレッジ委員会では、カレッジクラスの担任が提示した「カレッジクラスの現状と課題」について、検討を進めてきた。問題の一つは、現在のカレッジクラスの中には、進学を目指す生徒のみではなく、専門学校や就職を希望する生徒もいるため、学習に対する意識の違いが大きく、指導が大変であること、大学進学を希望しているが学力が十分でない生徒に対して十分支援できないことである。これまで取り組んできたコミュニケーション能力の育成を含むみらいと今年度のテーマである「授業力向上」の関連を学校全体で理解することにより、こうした問題に答えていくことが指摘された。

また、カレッジクラスにおいては、副担任が今以上に担任の支援ができるような配慮をすることも提案された。

今後、カレッジ委員会としては、カレッジクラスと他のクラスでは、授業に対する指導の困難さの違いが担任の温度差、感情のねじれとして発生し、教師集団が分断することが危惧されるため、それに対する保障措置を考えておく必要もある。

3) その他

これまで指摘されているように、授業規律や授業力向上の中身について学校全体で大まかな共通項を持つことが必要であり、授業規律や授業力向上とは生徒が何をする事なのか、教師が何をする事なのか等を議論することが重要である。その一つとして、授業が工夫され非常によい教師が教科ごとにわかっているため、その教師の授業を見て分析し、自分の授業を考えることができる機会を設けることも有効であろう。

以上のように「学習の手引き」やカレッジ委員会については、具体的な検討項目や今後配慮すべき点が多く指摘されたが、まだ学校全体として合意されていない点も多いため、今後は議論を広めつつ、改良を重ねて、完成を目指すこととなった。

オ アドバイザーから

3年間の学校改革の過程を経て、本校では子どもたちをいかに学習に向け、動機付けるかが焦点となってきた。そして、その手段として「学習の手引き」の作成、授業公開を通じての「授業力向上」を図る、学習室で個別指導を行う等、進学を意識した改革論議へと転換されてきた。それと同時に社会一般に通用する基本的な生活習慣を身につけさせ、人との関わりができるような子どもを育てることにまた、焦点が置かれている。

このように、単に学力の上位層だけに学校の全ての力を注ぎ込むという形ではなく、そういう可能性を持った子どもたちを増やす方向になってきており、本校では、全ての子どもたちが3年間充実した学校生活を過ごし、職場や専門学校に出て行くことが大切であると捉えており、これまで担ってきた子どもたちへの手厚い対応は地域でも評価されるようになってきている。

学校経営の観点からすると、1年目は学校改革委員のみ、すなわち学校の一部の教員しか変わろうという意識を持っておらず、自己完結的にモデルが描かれ、他の教員との意識の差が極めて高かった。2年目は、制度改革を含んでいたため、アンケートの実施等により変わろうとしていることが学校全体に拡がり、どう変わるのかという議論のレベルに問題が移行してきた。3年目

になり、制度的な限界が見えたことに伴い、授業そのものに目が向かい、学校全体の課題として共有されてきて、問題に対する共有の度合いが相当高まってきた。この3年間で学校の中に議論する文化が育ってきた。

それと同時に、生徒を見る目が以前は一面的だったものが、カレッジクラスや生徒の潜在的能力等の議論によって、生徒にも色々あり、一人ひとりの顔を見る姿勢が出てきたことが成果としてあげられる。

今後は、「授業力向上」とは何をすることなのか、何をすれば向上するのか等、さらなる合意や連携が学校全体で必要である。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

- (1) 今年度より設置した「カレッジクラス」を充実させるためにカレッジ委員会を立ち上げた。本年度は年間6回の開催により抱えている問題点について共有し、学校全体として少しずつ問題解決を図っているところであるが、3年間を見据えた「カレッジクラス」の進路指導年間計画を作成することなどが緊急の課題である。また、平成19年度以降も引き続き「カレッジクラス」を設置していくが、その一方で平成19年度より「コミュニケーション授業」も実施していく。今後は、幅広い層に対応できる学習指導について検討し現実を踏まえて完成させてゆく必要がある。
- (2) 「学習の手引き」（1・2年生のカレッジクラスを対象とした、勉強法・参考図書などを載せた冊子）を作成した。来年度は3年生を対象とした受験編の作成や、現在配付している「進路のしおり」との関係を明確にしていく必要がある。
- (3) 学習室を設置（平成19年4月より）することで施設環境は確保できたが、学習室の担当教員などソフト面での整備が必要である。
- (4) 公開授業（平成18年11月9日）を参観していただき、貴重な意見、的確な分析・アドバイスを得ることができたので、今後の授業に活かしていきたい。来年度は「本校の授業の上手な先生による研究授業」を企画するなど、校内外の公開授業を進化させていく必要がある。
- (5) 授業力向上のための対策として話し合いはしたが、本年度取り組むことができなかった「北高テストの作成」「DVDライブラリー制作」「進路指導年間計画の作成」などについて来年度以降も継続して検討していく必要がある。

② 県立四日市西高等学校

所在地	四日市市桜町6100
交通機関等	近鉄 桜駅下車徒歩15分
電話番号	059-326-2010
FAX番号	059-326-4830
教職員数	55名
生徒数	991名

1 学校の概要

本校は昭和50年に四日市市西部の閑静な新興住宅地域に開校され、昨年度創立30周年を迎えた普通科高校である。大規模校であったが、高等学校の適正規模化の施策により、現在1,2学年は8クラスとなった。文武両道の精神に基づき、本校では部活動の活性化に力を入れている。また個々の生徒の多様な進路希望に応じた教育内容の提供に努めるため、比較文化・歴史コースに加え、平成15年度に数理情報コースを1クラス新設した。このコースでは急速な科学技術の発展やIT化に対応できる人材の育成を目指している。文系、理系に特色あるコースを持っていることを強みに進学指導にも力を入れている。

2 学校、地域、児童の現状

(1) 学校・生徒の現状

「自律・協同・創造」をモットーに豊かな人間性と不屈の精神力の育成を目指している。生徒の主体性を重んじ、比較的自由でのんびりした校風の普通科高校として地域に定着している。その様な校風に対して、地域からの進路面の期待に応えきれていない現状があり、本校の大きな課題となっている。

生徒の9割以上が上級学校への進学を希望するものの、進路先は国・公立から各種専門学校まで極めて範囲が広い。そのため進学中心の指導体制では対応できない状況があり、生徒の実態に合わせた教育指導体制が必要となっている。このように生徒の能力・適性、興味・関心が極めて多様化するなかで、授業評価や家庭学習時間調査等の試みを導入した。しかし、これらの調査結果を学校全体として、どう改善していくかという議論がなされておらず、いわゆる「やりっ放し」になっている部分があることは否めない。

多様な価値観を持った生徒の中には、自己中心的な考えを持ち、規範意識に欠け問題行動に走る実態や、コミュニケーション能力に問題があり対人関係が上手くいかず、精神的に不安定な状況に陥る生徒もいる。臨床心理士の方の援助を受けながら教育相談には力を注いでいるが、中々追いつかないこともある。学習面においても熱心に課題に取り組む生徒がいる反面、具体的な進路を決めぬまま勉強を半ば放棄したり、入りたい学校に進学希望をするのではなく、入れる学校に推薦入学する生徒の姿が目立ってきている。個々の教員レベルでは、このような生徒の資質や適性・個性に応じた能力の育成を助け自発的な学習につなげてゆく努力はしているが、学校全体としての取り組みにはなっていないとは言えない。

(2) 地域等の現状

本校は、大規模な新しい住宅団地と昔ながらの家並みを校区に持っている。自然環境に恵まれ、

近くには日本百名水の智積養水が清らかに流れている。桜地区は文化的水準の高い地域であり、地域の方々の活動はどの年代においても非常に盛んである。そのため、地元の学校に寄せる期待も大きく、本校が新しい試みを行いたい時には、応援や協力が得られる。授業や部活動の場で、地域の保育園、幼稚園、老人会などとは交流を持っている。

3 アドバイスを希望する課題

本年度の目指す学校像「キャリア教育の推進と学習指導を充実し、質の高い進学校を目指します。」を具現化し活気あふれる学校にするため、どのように本校の生徒たちにアプローチするかという具体的方策についてご指導いただきたいと考えた。

本校生徒は比較的素直でおとなしいが、高い目標に向かって努力を維持できず安易な方向に流れがちである。また、総体的に自分の意志で行動する力が弱く、周囲に流されて同調してしまう傾向がある。受身の傾向にある生徒にどの様に意欲を喚起し、その結果、学力向上につなげていくかが課題である。この課題解決のためキャリア教育を如何に有効に取り入れていけば良いかご教示いただければ有り難い。一方教師集団は各自または小さなグループでは課外授業・国際交流・クラブ活動などに力を発揮し、高い評価を受けている。個々の活躍が線になれずに、無関心や協力が消極的な雰囲気漂う。一部の教員に仕事内容が増え、彼らは生徒に対応する時間が少なくなる。ひとつひとつの実践に全体に取り組めないのはこういった現状のためかも知れない。意識しないうちに、西高としての教育実践が惰性的になり、教育の質の低下を招いているのではないか。これらの課題に学校が屈するのではなく、抜本的組織改革とキャリア教育導入により西高再生を図りたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時	平成18年7月6日(木)	14:00~16:45
イ 場所	三重県立四日市西高等学校 会議室	
ウ 参加者	池田 輝政 [名城大学・学校づくり研究科教授] 小柳津久美子 [名城大学・学校づくり研究科院生] 生柳 久応 [三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹] 中村 和生 [三重県立四日市西高等学校長] 倉田 純子 [同校教頭] 稲垣 良二 [同校教諭] 岩花婦美代 [同校教諭] 佐藤 誠広 [同校教諭] 宮出 大 [同校教諭] 長谷川 登 [同校教諭] 坂口 勝也 [同校教諭]	

<協議内容>

I 本校の現状の把握

生徒

- ・自分なりの進路目標を維持できず、安易な（推薦入学等）方向に流れがち。
- ・家庭学習の習慣があまりなく、学習には受身である。やれと言われればやる。
- ・のんびりと高校生活を楽しまたいし、楽しんでいる。

教師集団

・課外・国際教育・クラブ活動に力を発揮しているが、組織的な取り組みにはなっていない。

保護者

・子どもとじっくり進路についての話ができていないことがある。子の進路選択に関する意識が低い。

II 昨年度のキャリア教育推進事業の成果と課題

成果

- ・各学年間での情報の共有・発信の場として進路委員会が立ち上がった。
- ・学習の仕方をまとめた3年生用の「進学の手帳」を作成した。
- ・意欲の少ない生徒にチャレンジ精神を起こさせるために、生徒が共感できる社会人を呼び、話を聞かせる機会を設ける。(ドリームマップ)
- ・3年間の見通しを持ち、系統立てた各学年の進路指導年間計画を作成する必要性を認識できた。(進路ストーリー)

【進路指導年間計画に導入したい事柄】

1年	①視野を広げる(4、9月)「生活実態調査(進路調査)」 ②自己理解 『適性関心診断テスト』 ③職業理解 『フリーター 自分探しの旅』 ④コミュニケーション能力の育成
2年	①放課後「出前授業」の開催 ②『高校生活を見直す～10年後の自分を見据えて』 ③ 大学、学部探索 『学部・学科を探ろう』 ④ 学年末「進路週間」の開催により3学年に繋ぐ

III 本校の抱える課題

- ・本校の教育に、キャリア教育をどう入れ込み生徒の学習意欲を喚起させるか。
- ・西高で、どのような生徒たちを育てていくのかという共通理解が持てない。
- ・各部と学年の連携が弱い。
- ・「1学年で西高生につけたいコミュニケーション能力」「学年末進路習慣」が具体的でない。

IV アドバイス

① キャリア教育とは

人生70年、80年の今、人がリタイアするまでの人生設計をサポートするのがキャリア教育。大学も今までとは異なった意義を学生たちが持つようになってきている。大学に通いながら将来設計のための専門学校に通う学生も増えてきた。キャリア教育とは高校での進路指導とは別物という捉え方。

② ツールの開発を

今年度、進路が作成した進学のしおりや進路ストーリーは昨年度のこの会議での議論の成

果ではなくツールを開発したということ。授業の教材、プリント等もツールだ。

③ 成果とは

生徒が上記のツールを例えば、ボロボロになるまで使いこなして初めて成果が出る。だから、学校ではツールをドンドン開発するとよい。

④ ツールだけでなく場と機会を与えるということ

例えば、ツールを設けても生徒が主体的に自ら使うためには、場や機会が必要。

その意味で上記の進路週間はその機会となる。他に、パネルディスや卒業生との語る会などのツールがあるが、それらは点である。系統立てられた線にしていくことで、成果が出る。進路週間とのタイアップを考えていく。

身近な人の話を聞き、「人生とは面白い」という感覚を与え、挫折があっても、その場を起点にもう一度やり直そうとする生徒育成を

2年生では、夏休みに父母の軌跡を聞き取することを生徒にやらそうかと考えている。生徒の興味のある誰かの人生の奇跡を知ること、「人生は面白い」と感じる機会になる。

P T A向け講演会で味のある起業家に話をしてもらおう予定がある。生徒にも、卒業生などを招き、苦労話ややりがいを感じたことなど話をしてもらえないか。

南高校の面白い例もある。

教生や模試アルバイト登録生から人選して話をしてもらおうこともできる。

⑤ 本校での新たなツールの開発とそれを使う場を

2年生向けには「進路のしおり」を進路が作った。内容は全部、大切なことばかりだが、例えば「しおり」の中に教師や、生徒は自己チェックできる具体的項目などを入れてバージョンアップしていけないか。

また、1年生用に英数国ぐらいで、高校での勉強法は中学校と違うということを示す冊子を作ってはどうか。どちらも、ツールであるので成果を出すには、使いこなすことが大切。新1年生は4月の変則授業の時などに各クラスで教科担当より「学習の仕方」について説明する場を設けてはどうか。

神戸高校や四高では教務が音頭をとって、既に使っている。他校のものを参考に西高バージョンを作る方向でいく。

様々なツールを系統立てて、線にし、面にすることで、学年別でない3年間を見通した西高進路ストーリーを完成させていく。

(2) 第2回

ア	日時	平成18年10月6日(金)	15:30~17:30
イ	場所	三重県立四日市西高等学校	校長室
ウ	参加者	池田 輝政 [名城大学・学校づくり研究科教授]	
		小柳津久美子 [名城大学・学校づくり研究科院生]	
		生柳 久応 [三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹]	
		中村 和生 [三重県立四日市西高等学校長]	

倉田 純子〔同校教頭〕	稲垣 良二〔同校教諭〕
岩花婦美代〔同校教諭〕	佐藤 誠広〔同校教諭〕
宮出 大〔同校教諭〕	長谷川 登〔同校教諭〕
坂口 勝也〔同校教諭〕	

<協議内容>

次の課題の特に②について協議を行った。

- ① 西高で、どのような生徒たちを育てていくのかという共通理解が持てない。
- ② 本校の教育に、キャリア教育をどう入れ込み生徒の学習意欲を喚起させるか。
- ③ 各部と学年の連携が弱い。

② について

「進路のしおり」や「進路ストーリー」、1学年での総合学習ノート、2年生での保護者への聞き取り活動等は生徒が将来設計をするため開発されたツールである。

このツールを、どう使い効果をあげていくかが大切である。

ツールについては、

- ・ 使いやすく具体的であること
- ・ ツールを使う場と機会があること
- ・ 系統立った計画に基づいていること
- ・ 生徒が共感出来、再チャレンジしようという気持ちになれるもの

具体的なツールの利用の方法について

- ・ 2学年より 保護者への聞き取り活動について報告
- ・ 名城大学での取り組みの紹介
- ・ 今後のツールの活用に向けて

2年生用進路のしおり、保護者への進路講演会の活用、企業家育成事業
進路ストーリー

(・3年間の本校でのキャリア教育が具体的にわかるもの

- ・ 担任、生徒が4月時点でその学年の1年間の流れがわかるもの
- ・ 学年、関係分掌、関係教科の様々な活動が系統づけられ、タイムリーな時期に計画されているもの)

フリートーク「今、西高について感じていること」

- ・ 本校は、今、私立高校の動向で受検者数が左右されるという現状がある。
- ・ 西高は気に入っている。自由な雰囲気クラブ活動も盛んで、学習も自分でやれる習慣のある生徒は伸ばしてもらえる。魅力の素がけっこうある、と思う。なので、本当に「自主自律で自分で考え、決め、実行する」生徒を育成したい。
- ・ クラブをやって、勉強もそこそこ(?)頑張るといふ、「いいなあ」と思える高校生を

増やしたい。そのため、最低限、今のレベルをキープするには少しでも良い子が中学校からほしい。一生懸命に中学校訪問をしているが、全体で先生方がどう思っているのか、わからない。自分としては、出来ることは何でもやろうとしているが、果たして自分のやっていることが歓迎されているのか？

- 例えば、学年で何かの取り組みをし、クラス単位で生徒に書かせたりする時、100%回収のクラスもあれば、10枚程度しか生徒に書かせたものが集まらないクラスもある。事前には、いろいろ話をして意思統一的なことをしているのに、10名足らずのクラス担任という小さな集まりでさえ、意識が大きく違う。協力してみんなで頑張りたいが、その方法がわからない。
- 本校の生徒層の幅の大きさには戸惑う。進学を目指す生徒、その中でも国公立を目指す者もいれば指定校推薦で決めたい生徒もいる、専門学校に行く生徒、就職する生徒など様々でどの層にターゲットを合わせて学校として指導をすればいいのかが定まらない。曖昧な状況が、どうしても起こり、どっちつかずで中途半端になっている。
- 学年の主体性と部の主体性の棲み分けが、曖昧。生徒のために、今すべきことを主体的に考え実行するには、教員が団結して協力することが絶対に必要だが、そのことの難しさを実感する。なぜ、協力できないのか？
- 生徒の学力はドンドン落ちているという実態がある。何とか、いい子を集めるにはそれなりの結果を目に見える形で出すことが必要だ。そのためには、国公立へ2ケタの合格者を出せれば、と思う。せつかく、2コースが本校にあるのだから、この2つのコースを特化したものにして、教育課程も変えて、と思う。そうしなければ、数年後には学校が悪い状態になって、違う意味で大変な苦勞をしなければならなくなる。だから、今何とか体制を整えたいと思うが、全員にその思いが共有されていない。
- 例えば、比歴では国公立合格者があまりいないが、力のある生徒はいても家から通える専門学校でいいとか指定校推薦でお願いしたいという状況がある。女子が多いクラスなので、親も子もしっかり頑張って自力で国立受験して合格を目指す、という雰囲気はない。それでも頑張って勉強させれば何とかなったかも知れないが「そういう道もあり」という指導が出来る自由さも魅力と言えれば魅力だと思う。
- 毎年、3年生の特編授業をどうするかということが問題になるが、打開策を見出せずにきた。いつも困った状況は同じである。何故解決できないのか。今年は何とか考えていけるか？

* 上記のフリートークへのアドバイス

西高の価値とは何か？

それを教員で共有することが今は、ないのではないか。この価値が共有され、教員に浸

透していくことが必要だ。例えば、「自主自律の精神を持った生徒を育成すること」が西高の価値なら、それを教員、生徒、地域の人々の目に見える形で提示すべき。教員が自主自律の生徒を育成することが目標だということを生徒に伝えることが大切。

そのためには

- ・何度も多くの教員が事あるごとに「自主自律」を口にする。
- ・この目標を、大きく書いて、職員室や廊下などに貼り、すぐに見える形にする。



教員がよく口にすることで、まず教員に自覚が生まれる。生徒は様々な場面で「自主自律」とはどういうことかを教員たちから聞かされることで、この目標に馴染んでいく。生徒自身の口から「自主自律」という言葉が出れば、生徒にも浸透している証。教育は総合力。

トータルな進路指導へのアドバイス

勝負は1年生。1年生の前期に中学校とは違う、「変わったな」という実感を生徒に抱かせる。生活習慣と学習指導を結びつけた指導が必要。何か1つに絞った継続的指導を行うべき。

(3) 第3回

ア 日時	平成18年12月13日(水)	15:30~17:30
イ 場所	三重県立四日市西高等学校 校長室、会議室	
ウ 参加者	池田 輝政〔名城大学・学校づくり研究科教授〕 小柳津久美子〔名城大学・学校づくり研究科院生〕 生柳 久応〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕 中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕 倉田 純子〔同校教頭〕 稲垣 良二〔同校教諭〕	

【活動内容】

2回のキャリア教育推進事業でのアドバイスを活かし、より具体的で丁寧な生徒へ進路指導を行いたいと考え、学年別進路のしおりの作成を進めてきた。このことは、生徒の自己実現に向けた取り組みであり、一定の評価ができる。しかし、このような願いを教員側は持っているが、果たして生徒の実情はどうであるか。それを探るべく、第1学年より生徒7名を任意で抽出し、アドバイザーとの直接の話し合いの機会を持つことになった。

1時間30分のフリートークがなされ、生徒たちの本当の気持ちや生の声が出出した。

【協議内容】

西高での学校生活における課題についての抽出生徒たちとアドバイザーとの話し合い。

【アドバイザーから】

生徒たちとの話し合いから、担任とのコミュニケーションな信頼関係が構築できていなければ、個々の自己実現に向けての取り組みは上手く運ばないであろうとのアドバイスを受けた。生徒が「自分のことを話したい、相談したい」と思えるような関係が出来ていないことが多く、学習や進路指導で彼らを追い込み、口を閉じさせるような雰囲気が教員にある。

教員にそのつもりが無くとも、ちょっとした目線、態度で生徒たちはそのことを敏感に感じている。せつかくの進路のしおりがキャリア教育推進のツールとして効果を発揮できない事態にならぬよう、教員の気付きや生徒理解の一助となるような研修会が必要。

四日市西高校の1年生との懇談（2006年12月13日）

－1年生7名（女子5名＋男子2名）と懇談する－

池田 輝政（名城大学 大学・学校づくり研究科）

小柳津久美子（名城大学 大学・学校づくり研究科）

懇談の趣旨

この懇談会は中村和夫校長と倉田純子教頭に提案をしてから、1学年主任の宮出先生にご協力いただいて、いい形で実現しました。懇談会の趣旨は、先生方に本校での「初年次教育づくり」の大切さを共有してもらうためです。そのためにはまず対象となる生徒の現状分析から入り、そこから出発することだと考えました。その分析方法はいろいろあります。今回は、短時間で生徒の本音を直接汲み取る方法として、生徒からから見て安心できる第三者の私たちが、少人数の生徒達と懇談することにしました。このレポートでは、懇談の中で交わした彼・彼女らとのやり取りや雰囲気ができるだけ伝わるように工夫しています。

懇談の中から私たちが感じた、あるいは理解したことは多くあります。この紙面ではそれらをコメントすることは控えますが、一言だけコメントすれば、それは「生徒の中学校での経験は、単なる過去ではなく、高校での1年次の現実とせめぎあう『認識上の現在形』である」ということです。とくに入学時点から最初の3ヶ月は、新しい高校文化への適応行動として、生活面でも心理面でも、そして体調面でも負荷がかなり高くなる時期です。新入生としては、まだ信頼できる仲間集団はいませんし、教師も含めて見知らぬ他人ばかりで、家に帰っても親と会話を交わせない青年期初期の段階、そんな集団だと思えます。コミュニケーションをとる大人にうまく出会えない、そういうテンションの高い状況からでてくる言葉は、「疲れる」に尽きるようです。そのような生徒の状況を以下の質疑応答からいろいろなメッセージやニーズを読み取っていただき、高校3年間の学びの文化における「四日市西校の初年次文化づくり」の議論と課題解決に、役立ててもらえればと考えます。

(4) 第4回

- ア 日時 平成19年 1月25日（木） 15：30～17：10
- イ 場所 三重県立四日市西高等学校 校長室
- ウ 参加者 池田 輝政〔名城大学・学校づくり研究科教授〕
小柳津久美子〔名城大学・学校づくり研究科院生〕
生柳 久応〔三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹〕

中村 和生〔三重県立四日市西高等学校長〕
倉田 純子〔同校教頭〕 岩花 婦美代〔同校教諭〕
山本 久人〔同校教諭〕 辻野 幸生〔同校教諭〕
宮出 大〔同校教諭〕 長谷川 登〔同校教諭〕
坂口 勝也〔同校教諭〕 伊藤 数馬〔同校教諭〕
黒田 司〔同校教諭〕

【活動内容】

来年度のキャリア教育実践のためのアドバイスを受ける。
現在の西高生の現状・教員の弱み・生徒とどのように接するかなど。

【協議内容】

1年生の抽出生徒との話し合いの結果を参考に西高生の実態分析を行った上で、今年度の協議の流れと実績を振り返った。生徒の実態と教員の意識にズレがあり、そのズレを克服する方法やキャリア教育実践で成果を上げるための取り組みについて協議した。

【アドバイザーから、教員から】

- ・ 生徒とコミュニケーションを図り、互いの信頼関係がなければ学校で様々な実践を仕掛けても効果は期待したほど上がらない。コミュニケーションを図るための手段として、身近な大人（教員・卒業生・保護者等）が自分の失敗談などを語ることによって安心して生徒も自分を語るようになる。父母の軌跡を聞き取る、生徒の興味のある誰かの人生の奇跡を知ることで、「人生は面白い」と感じる機会を設ける。苦労話ややりがいを感じたことなど話をする。教員はカウンセリングをしようとする傾向があるが、必要なのはコーチングの心である。安心して何でも話せる関係になることがあって初めて進路ストーリーや進路のしおりの実践に成果がでる。
- ・ 西高の価値を教員で共有することが大切。教員が自主自律を目指したいという気持ちはわかるが、パッシブな生徒たちにその要求は高すぎる。もっと低いところから始めて、生徒たちがアクティブになるような取り組みを一つ始めてはどうか。挨拶が出来ないのなら挨拶から条件反射でもいいので、みんなで何かを実行することが大切。
- ・ 教員が生徒とどのようにコミュニケーションをとれば、関係が上手くいくかという研修会という堅苦しい協議ではなく、気軽に実践や失敗談を出し合える機会が必要ではないか。つまり、生徒が緊張して教員に本音を言えないという実情が、緊張してではないが、教員サイドにも本音で生徒と語り合えない部分があるかも知れない。
- ・ 生徒は中学校の教員を懐かしむ気持ちを持っている。困ったことがあれば気軽に相談し助けてもらえる親しみの表れ。高校では、中学校ほど救いの手は差し伸べない。それが冷ややかに映るのかもしれない。世の中に出る・高校生はもう子どもではない・自分で考え、実行することを後押しするなどの意識が高校教師にはある。

- ・ 1年生から上手く手を離していけるような進路ストーリーが要る。最初はきめ細かく高校生活に慣れることを目標に、だんだんと自分で考え、実行する・実行したことに責任を持つというような流れを具現化したものが必要。
- ・ 西高生は先生方に振り向いてほしい・わかってほしいと思っている。夢を笑わずに一緒に実現して行ってほしいと思っている。つまり、生徒たちからの期待は大きいということ。できることから実践を。挨拶でもよい、何か一つを継続して行うことでコミュニケーションは育っていく。その基本があって西高キャリア教育は前進していく。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

成果

- ・ 西高生の進路実現に向けた3年間を表した「進路ストーリー」を完成させ、総合学習、LHRで取り組むための小委員会を立ち上げたこと。
- ・ この進路ストーリーをベースとして、各生徒の自己発見・自己実現を促すプロジェクトとして、さくら・プロジェクトを企画・立案し、前述の小委員会が月1回の定例会を持ち、具体案の検討、終了した取組の総括を行う。
- ・ 生徒理解のための面談に力を入れることが意志統一された。
- ・ 学年別進路のしおりが、生徒の書き込みができたり、データの切り取りができたり、面談に有効利用できるものに改良された。

課題

- ・ 様々な事柄を解決していくためには、各関係部署だけでなく、学校としてキャリア教育に取り組むための体制(やらされている→自らやろう)が整わなければならないが、いまだ不十分である。
- ・ 西高の価値を教員で共有することが大切。教員が自主自律を目指したいという気持ちはわかるが、パッシブな生徒たちにその要求は高すぎる。もっと低いところから始めて、生徒たちがアクティブになるような取り組みが必要。
- ・ 生徒とコミュニケーションを図り、互いの信頼関係がなければ学校で様々な実践を仕掛けても効果は期待したほど上がらないことは理解できる。しかし、「生徒は緊張して教員に本音を言えない」、「教員側にも、本音で生徒と語り合えない部分がある」という現状がある。
- ・ 西高生は先生方に振り向いてほしい・わかってほしい・夢を笑わずに一緒に実現して行ってほしいと思っている。その思いをどのように受け止め、生徒を甘やかし過ぎず自己実現に向けたサポートにしていくか？

③ 県立名張桔梗丘高等学校

所在地	名張市桔梗が丘7番町1街区1926-1
交通機関等	近鉄 桔梗が丘駅下車徒歩20分
電話番号	0595-65-1721
FAX番号	0595-65-1759
教職員数	83名
生徒数	714名

1 学校の概要

本校は昭和48年に、名張地区に高等学校普通科の独立校をという地域の方々の熱望によって誕生した。閑静な住宅地の中にある学校として、地元名張市を中心とする近隣市町村から進学を目指す部活動も頑張りたいという生徒が入学してきている。そして年々多様化する生徒の進路志望に対応するために、平成14年度から単位制を、平成15年度からは二期制を導入している。

2 学校、地域、児童の現状

本校は全日制普通科（生徒数714名、単位制・二期制）で、平成十七年度卒業生の進路は4年制大学5割、短大及び看護専門学校2割、その他の専門学校2割強、就職が1割弱となっている。また部活動が盛んで、陸上競技部や吹奏楽部・箏曲部を中心に全国大会や東海大会に毎年のように出場を果たしている。

一方、本校関係者を講師とした「図書館ミニミニ講座」の地域への開放や、回覧誌『桔高だより』による地域への発信、校外清掃の実施や地域行事への部活動参加などを積極的に推進し、地域と共にある学校、地域から信頼される学校づくりを目指している。

しかしこうした中で進学については実績の伸び悩みが見られ、生徒にいかにして目標を持たせ、どのようにして必要な学力をつけるか、また9割近くの生徒が部活動に所属しているとは言え、低調な部の活性化をどのようにして図るかといったことが喫緊の課題で、このための校内指導体制や指導方法の研究が急務となっている。

上記のことを踏まえ、また生徒減少期を迎える中で、本校が地域で確固とした地歩を築いていくための方途を現在模索している状態にあり、こうしたことから学校経営品質推進のためのプロジェクトを設置している。

3 アドバイスを希望する課題

昨年度は本事業の指定を受け、次の三つの課題解決に向けた研究協議を継続してきた。

- (1) 学校経営品質定着化への意識改革とその取り組みはどのようにすればよいか。
- (2) 職員間の仕事量均等化と軽減化への取り組みはどのように着手すればよいか。
- (3) 分掌と各年次団が更に連携し、学校が有機的・機能的に組織化されるためにはどのように変えていけばよいか。

一年間の研究協議の結果、上記(2)(3)を常に念頭に置きつつも、本年度は「授業改善・授業の充実」を本校の最重要課題として取り組むことの共通理解に至った。本校として進むべき方向性が定まったとは言え、例えば「授業評価」実施の具体的な計画の段階においては教員がそれぞれに持つ教育観がぶつかり合い、時としては議論が進まないことも十分予想される。

こうしたことから本年度は、授業改善・授業の充実に向けた取り組みの（評価指標を含めた）工程表の作成とそれに基づいた取り組みについての支援を希望。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 平成18年9月1日（金）

イ 場所 校長室

ウ 参加者 小松郁夫（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部長）

植田みどり（国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部研究員）

辻村大智（三重県立昴学園高等学校 教頭）

辻 喜嗣（三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室主幹兼研修主事）

学校経営品質推進プロジェクトメンバー

森川(学校長)・大川(教頭)・池原・川合・村田・谷屋・和田・市田・服部・吉田・米森

エ 内容

(ア) 学校長、教頭、担当者との事前打ち合わせ

- a 昨年度の研究協議とその成果をもとに、今年度取り組もうとしていること（授業改善等々）や学校経営品質推進プロジェクトの会議で話し合ってきた内容についてアドバイザーに説明し、今回の協議の進め方について話し合う。また、感想とアドバイスをもらう。
- b 次回の日程調整。

(イ) 学校経営品質推進プロジェクトメンバーとの研究協議

（学校経営品質推進プロジェクト第4回）

- a 授業改善に向けた取り組みの進捗状況と授業公開の日程。
- b 授業公開の考え方と持ち方。
- c 生徒による授業評価の観点と、具体的質問項目。
- d 校時検討グループからの提案
- e 単位制改善グループ進捗状況。

オ アドバイザーより

(ア) 1年前よりずいぶん先が見えてきた（全体的にも）。授業評価シートを座学系と実技・実習系の2タイプに分けるのはよい。

(イ) 評価の観点については、たとえば、実技・実習系などの授業では事故に注意するという点を入れるなど、検討の余地がある。

(ウ) 授業評価シートについては、授業の目的が授業に反映されているか、少人数指導などの学習形態の工夫の成果が出ているか、シラバスどおり教えてくれるか、評価の観点を明確にしてくれるかどうか等についてきいてみるとよい。

(エ) 国立教育政策研究所で高校改革の研究をスタートさせた。小・中・大よりも今、高校改革が必要。新しい学校をつくってきたその検証の時期となっている。単位制についてここ（事項書添付資料）に出ているような悩みが共通のものとして出てきている。

(オ) 授業評価がよかった部分については、教職員間でよい点を共有しあうことが大切である。

(カ) 何のために授業評価をしてもらうかはっきりさせ、それを生徒にどう周知していくかが大切である。また、生徒が授業評価シートに書くということは、次の授業がどう改善され

るか期待することなので、その答を出していかなければいけない。

- (キ) 授業の改善はさまざまなフィールドを見渡して取り組むことが大切である。
- (ク) 教員には不安や反対の意見もあるだろうが、当面は先生たちが授業について互いに仕事ぶりを知り合うという考え方でよい。1つ1つ段階を上げていかないといけない。その第一歩が知り合うことである。
- (ケ) 評価シートはふり返りに役立つし、励ましの課題をもらおうと考えればよい。それをもとに生徒との関係づくりを目指すことにつなげていける。
- (コ) 中学校の進路指導担当者に単位制がよく理解されていないといった現状がある。東京都では、卒業生、保護者、中学校の教員、都民も含め、単位制がどう受け取られているのかを調査する予定になっている。
- (コ) この学校の実態調査アンケートはおよそ考えられるものは網羅している。どのように自分たちの元気につなげていくかが大切である。また、経営数値については大切な考え方であり持たなければいけない。

(2) 第2回

ア 日時 平成18年10月2日(月)

イ 場所 校長室

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部長)
植田みどり(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部研究員)
辻村大智(三重県立昴学園高等学校 教頭)
辻 喜嗣(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室主幹兼研修主事)
学校経営品質推進プロジェクトメンバー

森川(学校長)・大川(教頭)・池原・村田・谷屋・市田・服部・吉田・米森

エ 内容

(ア) 学校長、教頭、担当者との事前打ち合わせ

- a 今回主に協議したい事項、および次回以降の協議事項の説明と、協議の進め方について話し合う。
- b 保護者へのアンケートと地域へのアンケート(事項書資料)について説明し、アドバイスをもらう。
- c 次回の日程調整。

(イ) 学校経営品質推進プロジェクトメンバーとの研究協議

(学校経営品質推進プロジェクト第5回)

- a 来年度から改正を考えている校時(朝読、昼休み45分確保、最終下校時刻といった現行の問題点を改善する提案)。
- b 最終下校時刻の変更と部活動の時間確保の諸問題(平常時、および考査時)。
- c 現行の単位制を改善しようとする、目的、対象、方法等々についての、さまざまな観点や考え方。
- d 保護者、地域へのアンケート実施の目的、方法、考え方。
- e 保護者、地域へのアンケートの質問項目の追加、削除、精選。

オ アドバイザーより

- (ア) 朝読に取り組むのなら、年次や教員によって取り組みにばらつきが出ないように、やるならやるということをはっきりしないといけない。
- (イ) 単位制はまだ一般にはよく理解されておらず、中学校の教員にもよく理解されていないということもある。単位制のタイプも進学重視型、就職重視型とどちらにもできる。名張桔梗丘高校はどちらのカラーを出すのか。中学生から見たこの学校の魅力は何なのかを明確にしていくことが必要である。
- (ウ) 単位制になったのなら、従来の指導方法を変えていかなければいけないこともある。教員が単位制の機能を把握したうえで、それを生かそうとした指導の方法を確立しなければいけない。とくに、ガイダンス機能の強化が不可欠である。
- (エ) 保護者にアンケートをとる場合は、A4用紙1枚くらいになるようにすることが多い。今回のアンケートはA3用紙で2つ折りにし、表紙にアンケートの目的、結果を知らせる方法やその時期などを書くといい。
- (オ) 地域へのアンケートの回答の分析では、学校のことをよく知っている人の声を重視することが大切である。
- (カ) 保護者にとっての質問形式は、たとえば「わたしは学校行事によく参加している。」など「わたしは…」という主語を明確にした形の質問にした方が、個人として答えやすいのでよい。
- (キ) 保護者への質問として、入学するとき何を重視して選んだか、入学させてその通りになっているか、について聞くとよい。
- (ク) 用語についても、教員間でふだん使っているものをつい使ってしまうがちであるが、保護者にわかりやすい表現にするように気をつけないといけない。

(3) 第3回

ア 日時 11月17日(金)

イ 場所 校長室

ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部長)
植田みどり(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部研究員)
辻 喜嗣(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室主幹兼研修主事)
岡田恭子(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室研修員)

エ 内容

- (ア) 学校長、教頭、担当者との事前打ち合わせ
 - a 今回の協議事項と協議の進め方について話し合い、その後次回の計画を説明。
 - b 授業評価(座学系・実技実習系)シートについて説明し、アドバイスをもらう。
 - c 次回の日程調整。
- (イ) 学校経営品質推進プロジェクトメンバーとの研究協議
(学校経営品質推進プロジェクト第6回)
 - a 今年度の課題についての評価、今後の方向性(学校内での取り組み・学校外への取り組み)。
 - b 授業評価シート(座学系・実技実習系)の観点・質問項目の追加と分析方法。

c 生徒、教職員へのアンケートの質問項目の追加、削除、精選。

オ アドバイザーより

(ア) 今年度の課題についての評価

a 「授業は教員と生徒が共につくるもの」という意識で授業改善に取り組んでいる姿勢は評価できる。

b 習熟度別授業や少人数授業についてもどのような授業をするのかを明確にして取り組んでいく必要がある。

c 教員自身がやる気を持てる改革プランでなければならないが、そういう意味でもこのプロジェクト(学校経営品質推進プロジェクト)の存在意義は大きい。

d 「勉強と部活の両立」を生かす取り組みとして「校時の見直し」など具体的な進展があった。

e 「やりたいこと、やらねばならぬこと」をアンケートで調査する中で、まず第一に何をどのようなスパンでやっていくかを抽出する必要がある。

f 誰が何をいつまでにどうやっていくのかを明確にした「工程表」を作成する必要がある。

(イ) 今後の方向性

a 改革の工程表をどうつくるのか。

具体的な「工程表」の作成と「進捗状況」把握が必要である。中間評価を行うことで躓きを修正することができる。

b 生徒を含め、関係者をどう巻き込んでいくのか。

(a) 授業づくり、学校づくりへの生徒の参加意識を形成していく。

(b) 「こういう生徒にこんなスキルを身に付けさせて卒業させる」ということを積極的に地域へ発信する。

(c) 卒業生と学校という観点から、エンプロイアビリティの育成、キャリア教育の充実が重要となってくる。

(ウ) 授業評価シート

a 観点・質問項目の追加

(a) 本時のテーマ(今日の授業は何について学習しようとしたのか?)についての理解度

(b) 成績(前期末評定)の妥当性(生徒自身が納得しているか)

b 分析

(a) 「自己の取り組みに対する評価」と「授業に対する評価」の結果をリンクさせて分析することによって、評価結果の信頼性が向上する。

(b) 教員自身が捉えている生徒の実態と、生徒から出された実態評価との違いを知るという意味で、授業担当者が生徒の回答結果予想をアンケート実施前に立てることが大切である。

(エ) 学校実態に係わる生徒・教職員へのアンケート

a 表現

全体を肯定的な表現へ統一する。

b 選択肢

5段階評価よりも4段階評価の方がよい。

(4) 第4回

- ア 日時 平成19年2月14日(水)
- イ 場所 校長室・会議室
- ウ 参加者 小松郁夫(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部部長)
植田みどり(国立教育政策研究所 教育政策・評価研究部研究員)
辻 喜嗣(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室主幹兼研修主事)
岡田恭子(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室研修員)
全体協議会には全職員が参加

エ 内容

(ア) 学校長、教頭、担当者との事前打ち合わせ

- a 本日の全体協議の進め方について話し合い、その後学校経営品質推進プロジェクト会議の次回以降の計画を説明。
- b 経営数値について説明し、アドバイスをもらう。
- c 学校経営の改革方針の各年次・分掌の自己評価について説明し、アドバイスをもらう。

(イ) 全職員との協議

- a 教育改革の動向
- (a) 教育改革論議
- ① 中教審
- ② 教育再生会議
- ③ 自治体レベルでの動き
- (b) 客観的情勢
- ① 後期中等教育の量的・質的課題
- ② 規制改革と地方分権
- ③ 学校の自主性
- ④ 評価
- b 名張桔梗丘高校の現状と課題
- (a) 現状認識
- (b) 課題の発見
- c 改革の方向性
- (a) 目指す新しい学校の姿
- (b) 授業改革
- (c) 学校経営改革

オ アドバイザーより

(ア) 世界的な流れ

- a イギリスでは十数年前から学校を親や子どもが選んでいた。当時文科省は「そんなことは日本ではありえない。」といていたが、今ではすでに導入されている。
- b イギリスでは以前から学校経営に地域住民が関わっていた。現在では日本でも学校評議員制度が導入され、また地域運営学校(例：津市立南が丘小学校)もスタートした。
- c 最近の注目すべき話題は学校評価で、近い将来、本格的に導入されるだろう。

- d イギリスではニート対策を行なっているが、いつの間か日本でもニート問題が起きている。しかしその対策としての「キャリア教育」については、小中高の連携がまだうまくいっていない。

(イ) 中教審

a 教育課程の審議

小学校の英語教育・キャリア教育・国語教育・理数教育 etc で混乱している。

b 義務教育の問題

英語教育・総合的な学習の時間・基礎基本の学習の問題

c 高等学校の問題

教育改革は果たして成果を挙げているのか？

現在は検証の時期で、新しく作った高等学校に対して様々な角度からデータ分析をやっているところである。総合学科や単位制を導入して、よくなった学校もよくならなかった学校もある。これは制度の問題ではなさそうで、今後は総合学科や単位制をどのように活用したのかという分析が必要。

(ウ) 教育再生会議

社会奉仕活動経験の必要性を提唱

大学を9月入学（高校卒業後、半年間の奉仕活動）に変更しようという動きがあるが、奉仕活動の受け入れ先や大学のその期間の授業料の扱いの問題で進んでいない。

(エ) 自治体レベルでの動き

a 東京都で独自の設定教科として、必修科目「奉仕」の導入が決定した。

b 東京都教育庁は「国際交流」「情報系」に力を入れたが、現在では教員の入れ替わりによってうまくいかなくなっている学校もある。ビジョンから授業実践まで貫かれている学校はうまく行っているが、そうでない学校ではうまく行っていない。また同じタイプの学校でも3～5年後に「差」が出てきている。

(オ) 後期中等教育の量的・質的課題

a 小中高一貫へ

問題点：高等学校では一つ一つの授業にまで落とし込みにくい。学年団主義のせい、他学年とのつながり（縦の系列）がうまく行っていない。

典型的な例：生徒指導の方針において学年ごとにブレがある。

進路指導の方針は学年団の自主性に任せてある。

中学生や地域住民などから見たとき、学校の姿が見えにくく学校としての評価は低くなる。また様々な「ノウハウ」が個人技（名人芸・職人芸）になっていて、学校共有の財産になっていない。

b 授業について

(a) 教材の準備をIT化し、開発したものを共有することが必要である。

(b) シラバスの公開

指導計画・評価がパッケージとして書かれていて、事前に生徒と「約束（契約）」されていることが重要なポイントで、授業ごとに「本時の目標」を明らかにして臨むことが求められる。この「積み重ね」が文科省の言うところの「指導と評価の一体化」につながっていく。

(カ) 目指す新しい学校の姿

a 学校のミッション

「3年間で〇〇〇の生徒を育てます。」ということを中学生・入学生に説明する。ただし「生徒の実態」に寄り添い過ぎないこと。また生徒自身に対しても責任を負わせること。

b 学校のマネジメント

(a) 校長・教頭がリーダーだが、しかし管理職だけの問題ではない。組織の中で自分はどのようなポジションかを意識する。これからは「組織力」の時代で、共通する「進むべき道」を歩むとき、それぞれの専門性を発揮しながら自分は何を担うかを考えなければならない。それが生徒から見たときに、安心・信頼して3年間過ごせる学校づくりにつながっていく。

(b) 学年・教科・分掌等でバラバラに目指すのではない。一人で生徒を育てているわけではなく、生徒はいろんな先生と係わる中で育っていくのであるから、共通のビジョン作りが必要である。大学ではこの動きが出始めているが、高校では遅れている。「こういう高校を作っていこう。」その中で「私はこういう役割を担おう。」というように考え方を変えていかなければならない。

(c) 「うちの高校はこういう高校ですよ」という内容を「純化」する。欲張らず、シンプルに。

(d) 「こんなカリキュラムを作れば何とかなる！」という時代ではない。みんなで「持続的」に取り組むことが求められる。花火のように次々に改革をしていく時代ではないかも知れない。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

本事業2年目ということで、サポート事業による研究協議会を中心に学校経営品質推進プロジェクトを十数回開催し、次のような取り組みの共通理解を得ることができ、順次計画、実施中。

- (1) 「朝の読書」の完全実施を含めた校時の変更（平成19年度より実施）。
- (2) 授業の相互公開、生徒による授業評価、評価に基づく授業研究会の開催というPDCAサイクルの確立。（平成18年度途中より実施）
- (3) 経営数値の収集
- (4) 学校実態調査（生徒・保護者・地域・教職員）の実施
- (5) 「学校経営の改革方針」の自己評価と学校経営品質アセスメントを組み合わせたPDCAサイクルの確立。
- (6) 単位制・二期制のあり方の検証。

上記(1)によって生徒が主体的に学習環境を整えることで、職員の多忙軽減が期待できる。また(2)～(5)により、継続的改善のPDCAサイクルを確立することができた。今後の課題として(6)を更に進め、単位制・二期制のメリットを最大限に活用できるシステムの構築が急がれる。

6 アドバイザーから —成果と課題—

改革の方向性

- (1) 目指す新しい学校の姿
 - (2) 授業改革
 - (3) 学校経営改革
- 学校のミッションがある。3年間でこのような生徒を育てるといふ、目指す学校像や育てたい生徒像をわかりやすく、生徒に説明することが重要である。しかし、現在では生徒の実態に寄り添う傾向が見られる。しかし、学校としての考えを示し、生徒に対しても、この学校の価値を創り出す責任を担ってもらうように指導することも重要である。
 - マネジメントは校長、教頭が担うのが基本であるが、組織の一員として担う役割は全ての教員が持っている。自分は全体の中で、どのような役割を担うのかを自覚し、チームワークを創っていくことが、「組織力」の育成という上では重要である。共通して進もうとすることに、各教員が何を担うのかを考えることがマネジメントである。
 - 学校は、構成員の一人ひとりが高い専門性を持った組織である。専門家集団である点では、会社とは異なる。専門性を出しながら、それが絡み合って力を発揮することが重要である。一人の能力が優れていても、バラバラでは組織の力にはならない。
 - 生徒から見た場合、安心して過ごせるという観点で魅力ある学校となる必要がある。生徒である自分たちに期待する姿がどの教員に接しても見えてくることにより安心感を得ることができる。教員が各立場でそれを示していかないと、組織としてまとまっているという風には生徒には見えない。
 - 自分一人で生徒を育てているのではない。日々生徒は多くの教員と関わる中で育っていくのである。だからこそ、専門性を持った教員同士が組織としてもまとまりを持つことが求められている。
 - 日本の高校教育がどういう子どもを育てるのだろうか？という視点があまり見えてこない。国としてもそのような見通しが見えて来ない。この点が現在の高校改革で深刻な点ではないかと思う。このご時世、なかなか明確に示せないということもわかる。しかし現場で、色々と議論してほしい。この学校では、こういう高校生を育てる。そのことに自分がこのように関わるといふことを作り上げていくことが重要である。そして、そのことにどう取り組むのかをデータを取りながら進めていくことが重要である。
 - 何をつかんで、社会に出ていくのか？ということを示してあげないといけない。これからの世の中では、1つの職業をずっとやっていけるわけではない。色々な職業を経験することになる。色々な変化に対応できる子どもの育成が求められる。柔軟性をもち、タフに生きていくための知識、理解力とは何かを考えていかなくてはいけないのではないか。

④ 県立名張高等学校

所在地	名張市東町2067-2
交通機関等	近鉄 名張駅下車徒歩15分
電話番号	0595-63-2131
FAX番号	0595-64-6293
教職員数	124名
生徒数	699名

1 学校の概要

本校は昭和23年学制改革により、元県立名賀農学校と元県立名張高等女学校が統合され、三重県名張高等学校（普通・畜産・農業）となり、昭和30年三重県立名張高等学校に改称し今日に至っています。現在創立90年を迎え、平成14年4月には、総合学科として再スタートを切りました。

2 学校、地域、児童の現状

本校は、平成13年まで普通科3クラス、情報ビジネス科1クラス、会計科1クラス、生活デザイン科1クラスの中規模校でした。総合学科1・2年次生は5クラス、3年次生は6クラスです。定時制普通科1クラスを併設しています。

90年の伝統を持つ本校は、地元卒業生も多く、地域の人々の信頼も厚く、地域から期待されているところも多々あります。生徒は、総じて素直で明るく楽しく学校生活を送っています。進路状況については、4年制・短期大学進学、専門学校進学、就職とそれぞれ3割で、進学にも就職にも対応しています。また、生徒は、学習活動はもとより、部活動にも熱心で、柔道部は男女とも全国大会に出場実績があります。

3 アドバイスを希望する課題

昨年度のアセスメント結果から、本校の課題として優先的に取り組むべきものとしてクローズアップされたのは

1. 働きやすい職場風土づくり
2. 教職員満足

の2点です。この課題を改善し、目指す学校像実現のために教職員がお互い、ベクトルの方向を合わせるために、コミュニケーションを図ることにより本音で話し、潜在的意欲を引き出し、風通しの良い職場をつくることだと強く感じます。

また、お互いが教育実践を認め合い、サポートしあえる関係を築き上げることで、一人ひとりの教職員が当事者意識を持つことにより、目標達成につながると思います。そのために「コーチング」がこれからの教職員のスキルとして必要であると切に感じるところです。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時：2006.7.6 14:00-17:00

イ 場 所：名張高校校長室

ウ 参加者：名張高校 大市智子校長・菅山善久教頭・福井長年・堀昌弘

エ 内 容

【意見交換概要】

1. 「面倒見のよい学校」→ イメージは人によって異なる → どんな生徒を育てたいか
2. 引き出すスキル → 学習
↓
行動=マネジメント → ゴール設定
3. 「面倒見がよい」とはどういう事かほぐす
→ 価値・特質を抽出 → 共有 → ◎学校としての面倒見がよい
(KJ法) ◎どういった質の生徒を育てたいか
(生徒像のクオリティ)
↑
マネジメントが機能する
4. 「面倒見のよい学校」→ 具現化(見える化)する → 図で表現
5. 問題解決には・・・
現状認識(本質を見極める) → 現状分析
(マッピング法など)

【提 案】

- ① コーチングを通じたマネジメント研修(KJ法)
- ② コーチング自身をやる
 1. コアメンバー研修(ワークショップ)
 2. One to One Coaching
 3. 全体にレクチャー

【日 程】(案)

第2回

日 時 : 9月4日(月)～8日(金)のいずれかの日の 14:00-17:00
内 容 : コアメンバー対するコーチング(ワークショップ)

第3回

日 時 : 9月27日(水)/28日(木)/29日(金)のいずれかの日の
10:00-16:00
内 容 : コアメンバー対するコーチング(ワークショップ)

第4回

日 時 : 10月30日(月)/31日(火)のいずれかの日の 15:15-17:15
内 容 : 全教職員対象のレクチャー

オ アドバイザーより

総合学科になって5年、新しい方針のもとに、様々な経営上の取り組みを精力的に行なって来られたことが伝わって来ました。3時間の会議を俯瞰して気になった点は、次の3点です。

- [1] 経営品質の活動を積極的に取り入れて行っている反面、部分的な項目の評価を切り出した形で、改善の取り組みを考えられているのではないかと、ということが気になりました。評価やアンケートにもとづいて改善を考える際、評価のよくなかった一部

の項目にこだわるのではなく、学校全体の広い現状（事実）を洗い出すことが大事になります。つまり、胃が悪いからといって胃だけに処方を行うという西洋医学的な発想ではなく、身体全体の気血の巡りを高めるという漢方的な発想が重要です。

[2] 総合学科になって5年ということで、学校が創設期から次の段階に進もうとしており、あらためて管理職・ミドル・スタッフ間で、学校の方向性や互いの思いや考えを共有する時期にあると感じました。いずれにしるコミュニケーションを図ることが出発点となるので、コーチングを校内研修のテーマとして選ばれたことは適時適切であると思われます。

[3] コーチングはコミュニケーションのシステムですが、このシステムが名張高校に入り機能するためには、それなりの土壌が必要です。その土壌とは、日常の人と人の関わりやコミュニケーションのあり方です。会議の中では、そのあたりはよく分かりませんでした。コーチングを導入しつつ土壌改良をすることは、コーチングのシステムを有効に機能させるために大変重要です。

(2) 第2回

ア 日 時：2006.9.7 14:00-17:00

イ 場 所：福祉実習室

ウ 参加者：プロ・コーチ 曾余田 順子

名張高校 菅山善久教頭 福井長年 堀 昌弘 堀越英範 河村紀孝 山添長輝

森 千里 中尾恭子 児島和歌子 高塚謙太郎 松本幸子 中川さち代

教育委員会 辻 善嗣主幹 岡田恭子

エ 内 容

第1回コアメンバーによるコーチング研修

【講座のねらい】

- ① コーチングの構造や働き・スキルを体験的に理解する。
- ② コーチングの関係やスキルを通して、自身の **Doing** や **Being** に気づき、学びを深める。
- ③ 日常の仕事でコーチングの関わりを促進する糸口をつくる。

【期待される成果】

- ・ コーチング的コミュニケーションを実践する土壌づくり
- ・ 他者（対同僚・対生徒など）の可能性や力を引き出す糸口の発見

◆ワークショップ

1. 「傾 聴」

講 義

- ・ シングルループ学習からダブルループ学習へ

I. コーチングとは？

コーチの役割とコーチングの前提

II. コーチングの構造

III. コーチングの基本（1）－ 傾聴

エクササイズ

◆フォローアップセッション

One to One のコーチング・セッションを実施

オ アドバイザーより

コーチング研修の第1回目は、コーチングのスタンス・傾聴・傾聴に関するスキル練習を行いました。研修後のフォローアップとして、受講した先生方一人ひとりと、電話でコーチング・セッションを行いました。

研修に熱心に取り組まれる先生方の姿勢やフォローアップ・セッションでのコミュニケーションを通じて、先生方のポテンシャルと名張高校のもつ人材の底力を感じました。

一方で、研修のやり方に戸惑いや出来ないこと・分からなさに達成感を持ってない感があるようでした。このことについては、フォローアップ・セッションでも、質問を頂きました。

研修中にもお伝えしましたが、本研修は、テキストに書いてある通り、コーチングの技法を獲得するだけでなく、自身のDoingやBeingに気づきや学びを深めることをねらいとしています。

(それがコーチングのねらいでもあります。)

コーチング・セッションでご質問いただいた先生には、このねらいと効果的な研修の受け方・考え方をお伝えしました。

第1回目の研修とフォローアップ・セッションを通して、フィードバックしたい点は、次の2点です。

- [1] 研修を受講する先生方の中で、名張高校の目指すところとこの研修を実施することの関係性を、再度確認して共有してください。このことに関して、是非リクエストしたいことは、コーチングの関わりで、話し合いを持っていただくことです。このリクエストを実施していただくことで、お互いがどのような関わりをすることにより組織が活性化するのかを行動を通して、学んで頂けると思います。
- [2] 教育の実践に身を置いていれば、「コーチングがどのように役立つのか？」と考えることは、もったもなことです。しかし、それ以上に大切なことは、「コーチングを使っていく自身がどうあるか」という問いを持つことです。コーチングは、行動と学習が醍醐味であることをお伝えしましたが、この問いを持つことで、ご自身の行動と学習が深化し、組織の活性化へも繋がると思います。

(3) 第3回

ア 日 時：2006.9.28 10:00-16:00

イ 場 所：福祉実習室

ウ 参加者：プロ・コーチ 曾余田 順子

名張高校 菅山善久教頭 福井長年 堀 昌弘 堀越英範 河村紀孝 森 千里
中尾恭子 児島和歌子 高塚謙太郎 松本幸子 中川さち代

教育委員会 辻 善嗣主幹 岡田恭子

エ 内 容

第2回コアメンバーによるコーチング研修

◆ワークショップ

1. 「質問」

講 義

IV. コーチングの基本（2）－ 質問

- ・質問でコミットを促し学びを促進する
- ・拡大質問はパワフルです！

質問に関するエクササイズ

◆フォローアップセッション

One to One のコーチング・セッションを実施

(4) 第4回

ア 日 時：2006.11.2 15:15-17:15

イ 場 所：大会議室

ウ 参加者：広島大学教授 曾余田 浩史

プロ・コーチ 曾余田 順子

ファシリテーター アセスメント推進委員会のメンバー

名張高校 教職員 27名

教育委員会 辻 善嗣主幹 岡田恭子

エ 内 容

【研修のねらい】

「同僚と協働的に関わる」をテーマに、コーチング的コミュニケーションのあり方を体験的に学び、日常の業務の中でコーチング的コミュニケーションを行う糸口を見つける

【期待される成果】

- ・日常のコミュニケーション・スタイルへの気づき。
- ・コーチング的コミュニケーションを実践する土壌づくりの糸口を見つける。

◆ワークショップ

1. 「コーチング」と「コーチング的関わり合い」についてのレクチャー
2. 「コーチング的関わり合い」に関するワーク
3. ワークを通しての気づき・学びのシェアリング

オ アドバイザーから

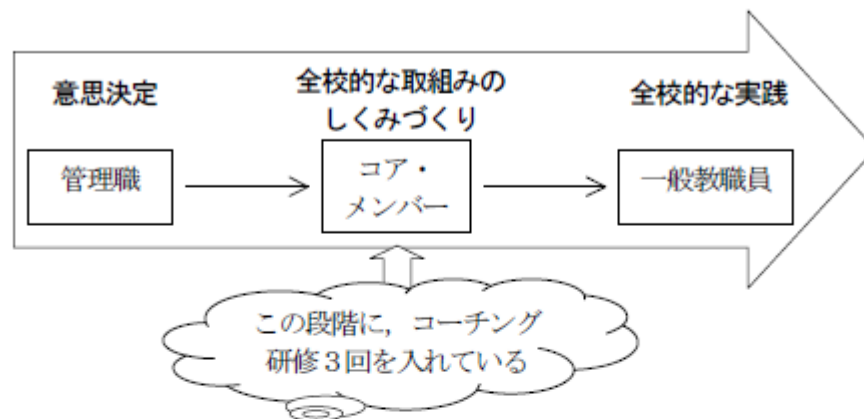
コーチング研修の第2回目は、前回のリマインドと「質問」に関するワークを行ないました。コーチング研修も2回目とあって、どの先生方も、第1回目よりもリラックスして受講していただけたように感じています。特に、第2回目のメインテーマである「質問」のワークでは、クライアント役をしてくださった先生方を通して、直接的にコーチングの働きと効果を体験していただく内容であったと思います。

また、今回は、研修前に管理職と担当の先生方とミーティングをさせていただきました。このミーティングを通して、本研修に関して、私たちと名張高校の認識にズレがあるのではないかと考えました。

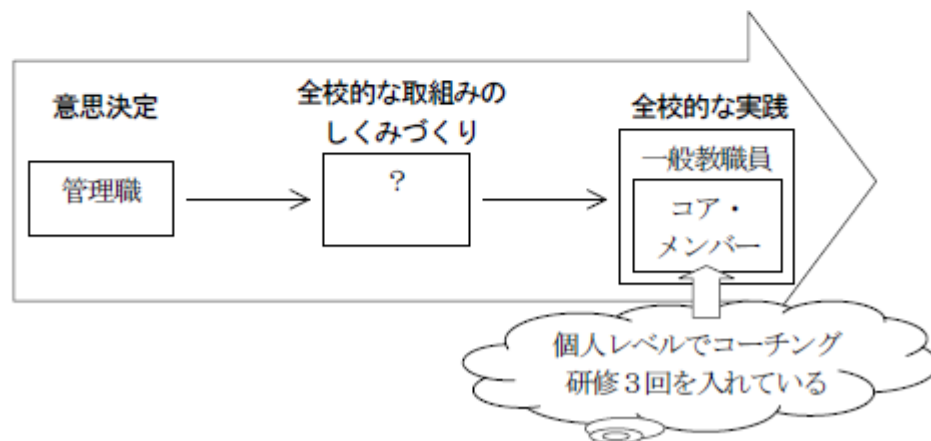
この件に関することが、今回の主たるフィードバック内容です。次回の全体研修までに、擦り合わせをお願いしたいと思っています。

(1) 本研修の位置づけに関する認識のズレ。

①7月の会議内容を受けて、私たちは、本研修の位置づけを次図のように考えていました。



②ミーティングで私たちが感じた、名張高校での本研修の位置づけは次の通りです。



(2) 生じる課題。

私たちは、①の立場で研修を進めています。コア・メンバーの先生方には、研修内でも職場で実践することを伝えていますが、これは、個々人の取組みという側面の他に、全校へのコーチング的コミュニケーション実践の波及という意味があります。

しかし、実際の位置づけが②だとすると、コア・メンバーの先生方にとって、自分たちの実践を裏打ちしてくれる「全校的な取組みのしくみ」がないので、職場での実践を促進する環境がなく、全校へのコーチング的コミュニケーション実践の波及もしにくいという結果になると思います。

「全校的な取組みのしくみ」は、他の教職員をコーチング的コミュニケーションの実践に参画していただくしくみでもあります。この「参画のしくみ」がないままコーチングを導入するということは、他の教職員だけでなく、コア・メンバーの先生方にとっても「やらされ仕事」になる危険性があるということです。

また、コア・メンバーの先生方に、「全校的な取組みのしくみをつくる」(①)、あるいは、「全校的な取組みのしくみ」を実践する(②)という意図が共有されていない場合、研修の気づきや学びを職場で実践するにしても、個人レベルの取組みで収束する可能性が大きいのではないかと思います。つまり、名張高校が当初目的とした「学校経

「営上のコミュニケーションの改善」という観点で本研修をみた時、効果が上がりにくいと思われる。

(逆に、もし個人レベルの研修が、自然に全校的に波及し、効果を上げるということが可能であるならば、当初の目的は、すでに、かなり達成されているということも言えます。この点をどうアセスメントするか、というのは研修の位置づけを考え、研修プログラムを組んでいく上で、とても重要です。)

(3) 本研修の効果を上げるための提案。

- ① まず、本研修の目的と位置づけを、再度、名張高校内、および名張高校と私たちの間で、確認してください。

<目的>

- a. 「学校経営上のコミュニケーションの改善」
- b. 「教職員の主立ったメンバーに、コーチングを知ってもらう」
(私たちは、経営品質のサポート事業だということ、7月の会議の内容から、a.だと認識しています。)

<研修の位置づけ>

- a. 「目的 a」に基づいて、(1)の図①。→「全校的な取組みのしくみづくり」が必要。
- b. 「目的 a」に基づいて、(1)の図②。→「全校的な取組みのしくみづくり」が必要。
- c. 「目的 b」に基づいて、(1)の図①。→「コーチング導入の全体的なプラン」が必要。
- d. 「目的 b」に基づいて、(1)の図②。→「コーチング導入の全体的なプラン」が必要。
(私たちは、aだと認識して行なって来ました。)

- ② 「全校的な取組みのしくみづくり」や「コーチング導入の全体的なプラン」づくりを行なうところとメンバーを明確にしてください。その上で、③あるいは④のことを行なって下さい。

- ③ <研究の位置づけ>が a, b の場合、「全校的な取組みのしくみづくり」を行なって下さい。

<研究の位置づけ>が c, d の場合、サポート事業として「コーチング導入の全体的なプラン」づくりを行なって下さい。

(5) 第5回

ア 日 時：2006.11.30 15:30-17:30

イ 場 所：小会議室

ウ 参加者：広島大学教授 曾余田 浩史

プロ・コーチ 曾余田 順子

名張高校 大市校長、菅山教頭、堀昌弘、堀越英範、福井長年

教育委員会 辻 善嗣主幹 岡田恭子

エ 内 容

テーマ「これまでのコーチング研修の振り返りとこれからの名張高校のあり方について」

1. マッピングの手法を通じて名張高校の現状を分析
ファシリテーター 広島大学教授 曾余田 浩史
プロ・コーチ 曾余田 順子
2. コミュニケーションについてマッピング
3. 曾余田浩史助教授によるマネジメント研修
「目指す姿を達成するためには」

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

学校をいかにより良い組織風土にするかということが、本校の最重要課題だと考えました。そのために、教職員間のコミュニケーション＝対話を活性化することで風通しの良い組織風土を作りたいと考えました。コアメンバーがコーチング研修を受けることにより、そのメンバーがコーチング的コミュニケーションを広めることにより組織を活性化していくことを目指しました。すぐに成果というほどのものは出ていませんが、この研修、曾余田先生からのアドバイスから本校の課題がクリアになり、解決すべき課題が明確になりました。これをきっかけとして本校の目指すべき方向に進んで行きたいと考えます。

⑤ 県立聾学校

所在地	三重県津市大字藤方2304-2
交通機関等	三交バス藤枝東バス停徒歩7分
電話番号	059-226-4774/4775
FAX番号	059-224-8252
教職員数	96名
生徒数	101名

1 学校の概要

本校は、三重県の中部に位置し県下全域を校区とする県内唯一の聴覚障害児を対象とする聾学校である。多くの子ども達は電車、バス等乗り継ぎ通学しているが、通学困難者にとっては寄宿舎に入舎し毎日の教育を受けている。本校の学校教育目標は、教育基本法及び学校教育法にのっとり、聾者並びに強度の難聴者に対して、障害の状態や発達段階、特性などに応じて幼稚園、小学校、中学校、高等学校に準ずる教育を行うものである。また、障害に基づく種々の困難を克服するため、必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、幼稚部・小学部・中学部・高等部・専攻科の一貫した教育を通して社会に自立できる人材を育成するものである。

また本校では、聴覚活用も発音発語による音韻意識の形成に対する指導も行っているが、手話を基本的なコミュニケーションモードとして教育を進めてきている。

2 学校、地域、児童の現状

すでに述べたように、本校においては幼稚部から手話を基本的なコミュニケーションモードとして導入し、子ども達の教育を進めてきた。そのような中であって、手話でのコミュニケーション能力は高いが、書記日本語でのやりとり能力の弱い児童が多くいることに気づいてきた。そこで、本校小学部ではここ数年来子どもたちの「生きる力を育てる指導・支援のあり方について」というテーマのもと、日本語習得の充実をはかるために、子どもたちの実態をどう把握し、その結果をどう解釈するか、そしてその課題にせまるためにどのような手だてを立てて子どもたちに関わり実践を進めていくことが子ども達の日本語力を高めることになるのかを研究してきた。また、このことを深めていくことが子ども達の将来へ向けての自立を促す一助となると考えている。

3 アドバイスを希望する課題

上記のような現状に対応するため昨年度は学部を低・中・高3ブロックに分けその中で研究対象児を抽出し、各児童の課題にせまる方策を論議する中で日本語習得へのプロセスについて研究を進めた。また、子どもたちの実態をよりの確に把握する手段としてITPAの活用も行い、児童を把握する尺度を一定レベルにそろえることで論議の客観性を高める工夫も行った。このような研修を進める時、私たち実践現場での知見だけでは視点が偏り、児童の把握や取るべきアプローチの方法に多面性が見られなくなる危惧が感じられた。そのような時、研究者という立場から私たちの研究のあり方を異なった視点や違った立場で評価・助言して頂くことが、私たちの研究を多面的・複眼的なふくらみのあるアプローチの創設につながっていくものと考えられた。そこで、数年来本校とつながりのある専門家に指導者として来校して頂き、私達の目指す日本語習得をより深みのあるものとし、本校児童生徒に還元し、子どもの生きる力を高める一助としたいと考えた。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成18年6月20日(火) 12:00～16:30
イ 場 所 三重県立聾学校小学部教室及び図工室
ウ 参加者 坂本 幸(前宮城教育大学教授) 生柳久応(県教育委員会)
無藤賢治(本校教頭) 本校小学部・幼稚部職員

エ 内 容

【活動内容】

*授業参観(12:00～12:20)

- ・研究対象児童所属学級の授業参観(5年)社会科の調べ学習を中心として

*研究授業(13:30～14:15)

- ・研究対象児童所属学習グループ自立活動の授業研究

*研究協議(14:30～16:30)

- ・授業研究をベースとしながら、本年度研究テーマ(日本語習得の充実を図る指導・支援のあり方について)にせまるための研究協議

【協議内容】

*授業について

=授業者より=

- ・学年始めから今日の学習パターンで文作りを進めてきた。そのような中で助詞をかなりスムーズに使えるようになってきた。今後、さらに難しい単語を導入する必要があるのかを探りたい。
- ・繰り返し学習の中で助詞を覚えてきたので定着している部分もある。
- ・手話で表現したことをどのように文章化することに繋げていくことが、できるかが今後の課題である。
- ・今回「どのように」を初めて付け加えたが、その意図をどこまで子どもたちに伝えることができたか。「どのように」をどの範疇までと解釈するかが大きな課題である。

=参観者より=

- ・「どのように」を入れてよかったか。すなわち「かくれる」「かくす」等で代表されるように自動詞や他動詞を含み時間帯の部分でもいろいろな場合がある。従って様々な課題が含まれることになり子どももどのように思考することが良いのかの判断が難しくなる。もっと課題を整理し絞り込んだものを提示する必要があるのではないか。
- ・ボトムアップ的思考からのみアプローチするのではなく、トップダウン的思考からもせまる必要がある。底辺をかさ上げすることだけに意識が集中しすぎると子どもの実態にそぐわないアプローチとなり言葉の学習を行う上で無理が生じる危険性が高くなる。手話から意味をつかみ文に換えていくアプローチをすることが子どもの実態を考えた時、有効な手段であると言えるのではないか。
- ・作られた文がやや不自然な形になってしまっている。子ども自身がその文から具体的なイメージが描けたか。機械的に文の構成をすることから学習者が共通したイメージを描くことができるかが大切なところではないだろうか。

=授業者より=

- ・言葉の選択は児童の日記に頻繁に書き表されるものを選択したつもりである。

- ・文作りの後で手話や絵でイメージ化させている。子どもの反応から、ある程度イメージできているととらえていたが・・・。

＝参観者より＝

- ・文作りの後に動作化することが重要になるのではないか。
- ・対象児の思考をもっと待つことも必要ではなかったか？

*日本語習得について（研究協議）

＝授業を通して言えること：アドバイザーより＝

- ・自由に言葉を選んで文を構成すると「意味」や「言葉」がわかり解釈が難しくなってくる。
- ・始めは言いたいことを確定しそれをニュアンスに換えることのほうがねらいによりせまることができるのではないだろうか。
- ・表現のパターンを整理して提示することが必要である。
- ・くじ引きで文を構成していく方法はおもしろいやり方であるが、課題が高度になる。
- ・助詞「～で」「～に」だけに絞って動詞（状態動詞・方向動詞）を考えさせると助詞の活用についてさらに焦点化させることができる。
- ・子どもが具体的文章を書く前に指導者が文章化してしまっている。子どもの自発的な表現を大切にすることが必要ではないか。
- ・手話の表現をすぐ文章化するのではなく、手話→対応手話→指文字→書き言葉という手順をきちんと踏むことが必要である。つまり、手話表現でできていることを文章化という作業を通してわからせることにつながっていく。対応手話で書き言葉を理解させていくことは大切なことである。そのために活用部分を指文字で入れることをさせても良いのではないかと考える。ex: 「いかない」の表現を最初の「い」を手話で二番目の「か」を指文字で、最後の「ない」を手話で表現する。つまり手話と日本語の相違点をはっきり説明しその違いをつかみ取らせることが大切である。手話で言いたいことを表現させその中に必要部分で指文字を入れる。そこで、表現上のポイントを押さえる。この活動をくり返すことがとても重要である。自分の言いたいことが「て・に・を・は」を使うだけで伝わるようになることを実感として感じ取らせたい。

＝参観者＝

- ・手話と日本語の相違点について明確に教えることを統一する必要性を感じる。
- ・日本語の入りにくい子供の手話依存率は高い。そこに対応手話を多用することは子供にストレスを感じさせることになる。どの程度対応手話を用いていくかは個人差があり指導者の匙加減の見せ所でもある。しかし、そこで指導者の直感に頼るのではなく一定のルール作りが必要になってくる。
- ・授業で二人の児童は手指メディアを使いこなしている。コミュニケーション意欲にも満ちている。そのような子供の今持つ手話力をどのように書記日本語にマッチングさせていけるかが課題であるとともに、現在試行錯誤を行っているところでもある。一方で、専門家であるアドバイザーから手だてや指針をいただきたいと思う。
- ・子供が不自然に感じないところでどのように日本語表現能力を高めることができるか、どのようにしたらわかりやすく伝えることができるかを探っていかなければならない。
- ・書記日本語を音声で教えてきたものと手話を使って教えてきたものの違いを知りたい。また音声で教えてきたところのメリットとデメリットについても教えてほしい。
- ・(アドバイザーより) 健聴児は音声をしりとりや言葉遊びを通して音韻分析する。たとえばまり

ちゃんの「ま」をしりとりなどで切れることを覚える（4歳）→ひらがなを覚える（これ何という字？）見分ける、覚える→文字のつながり。一方聞こえない子は、固まりが曖昧である。従って音韻分析も無理がある。つまり文字につながらない。言い換えると単語として入らない。また、目から読み書きが入る子もいるが自由なコミュニケーションが難しい。また、手話での思考力、言語力（コミュニケーション）についても書記日本語とは違うものとして教える必要がある。さらに、手話には助詞はない。その代わりに目の動きや手の動かし方によってその違いを表すことを教えることが必要である。

- ・手話でコミュニケーションできることは大事であるが、日本語表現能力を高める（書記日本語能力）までの指導にも責任を持たなければならない。その時、「日本語を教える本」は役立つのではないかと思う。「娘は病気なので会社を休みます。」と「娘が病気なので会社を休みます。」の二つの文で会社を休むのは誰なのか。この違いを我々は無意識に覚えてしまっている。今、聞こえない子供の日本語の指導について論議するとき私たちが日本語をどのように教えどう理解するか再度学ぶ必要がある。

〔活用の授業についてどのようにしているか〕

- ・活用について一つ一つ学習しても文全体の中で使えるかはまた別次元の話である。ボトムアップは有効ではあるが実際の場面での活用とはつながりにくい部分もある。文全体の意味をつかんでから活用について理解することはできないものなのか？
- ・デフファミリーの児童で、自動詞・他動詞をよく理解できる子供がいる。その子の場合兄がよく声を使って話をする。また指文字も多用する。そのことが大きく影響している。
- ・文章をよく読ませ書かせることも意味がある。

〔指文字の必要性〕

- ・絵カードとことばカードのマッチングができる。それには指文字は必要である。しかし指文字だけのコミュニケーションは、かなりきついものがある。そこで、対応手話をもっと取り入れられたらよいのではないか。
- ・手話と日本語の違いを意識しそこにどのように指文字を使っていくかを考えていかなければならないことが課題として出てきたと思われる。

〔ことばの習得について〕

- ・手話でのコミュニケーション力が高まりことばの習得につながる児童と手話はあまり使えないが目で見ることばを覚えてそれから手話・漢字とつながり活用できることばに結びつく児童がいる。一人一人入り方の違いがある。
- ・どのようにことばを覚えていくかは個人差が大きいことを常に意識する必要がある。

【アドバイザーから】

- ・指導者として日本語を再度見直す必要がある。
- ・手話から日本語へのつながりを大切にする。
- ・日本語を丁寧に細かく指導する。
- ・トップダウン的考え方とボトムアップ的考え方をうまく組み合わせることによる相乗効果を有効に活用すること。
- ・手話を取り入れた教育を進めてきたのであるから、それをどう活用できるかを考えなければならない。
- ・手話を活用できるようになってきているのだから、さらに書記日本語を学ばせるために手話もも

っと使ってほしい。手話を使ってもっと複雑なことが表現できるようになること（手話で論理的表現する力を身につけること）も考えながら実践を進めてほしい。

- ・手話をトップダウン的分析的に活用し日本語を知識として理解させることが必要である
- ・先駆的に手話導入を行ってきたのだから、日本語習得についての課題を整理しそれにどのように対処し解決していこうとしているのかをまとめていってほしい。

(2) 第2回

ア 日 時 平成 18 年 10 月 24 日(火) 9:00～16:30

イ 場 所 三重県立豊学校小学部教室及び図工室

ウ 参加者 坂本 幸（前宮城教育大学教授）

松本傳夫（本校校長） 無藤賢治（本校教頭） 本校小学部職員

【活動内容】

*授業参観及び研究授業（午前中）

- ・小学部各学年の授業参観
（研究対象児を中心としながら、小学部全学年の授業参観を通した児童の実態把握）
- ・4年及び5年の研究授業
（研究対象児の在籍する学習グループの研究授業）

*研究協議（14:30～16:30）

- ・授業研究会(14:30～15:30)
研究授業を中心として、課題解決にせまる内容での話し合い。
- ・研究協議会(15:30～16:30)
本年度研究テーマに関する研究協議

【協議内容】

◇5年生の授業について◇

＝授業者より＝

- ・今回の授業は助詞が抜ける、異なることで文の意味が違ってくることの大切さまた助詞の違いに気をつけなければならないことを気づかせることが目標であった。
- ・授業を進めていく中で、子どもたちは助詞への意識が少ないことに気づいた。それは子どもたちが助詞の抜けていることにあまり気づかずに行動を始めたことから明らかとなった。
- ・対象児は助詞の違いで文意が異なってくることに気づき始めていた。また、本児は単語だけで文を読み取っていく傾向がある。そこで、このことをきっかけとして助詞の違いで文意が異なってくることに気づかせていきたいと思っている。

＝参観者より＝

- ・導入方法はよかった。しかし出された例文の助詞が抜けていることに気づかず名前を書き始めた。（助詞が入ることで文意が異なってくることに気づいていない）
- ・例文が書かれた紙の破れにも気づかず行動を始めたところがあった。
- ・助詞が抜けていることについて、子どもたちの中では、あまり重要なことではなかった。「紙を切る」「はさみで切る」「のりではる」この「～で」「～に」の違いにどこまで気づいているか。それを知るための経験が少ない。
- ・聞こえる者は「で」「に」の違いを何回も聞くことで理解している。対象児は基本的なこのような違いをどこまでわかっているのだろうか？

- ・「バスに乗る。」を「バスを乗る」といつも間違えて表現する。その間違いを指摘されるとその違いに気づく。この使い方の違いの意味を十分理解できない段階かもしれない
- ・今回の提示方法であると、助詞が抜けていることに意識が向きにくかった。紙の端を破くのではなく、紙の中央部分を黒く燃やしたような状態で提示するなどの工夫をすれば、その部分に集中し「で」「に」について意識化できたのかもしれない。
- ・導入段階で完璧な答えを求める必要はない。
- ・気づきの弱さよりは、楽しく勉強したという印象を受けた。今回の場合「鉛筆で書く」というとらえ方をするのは自然な流れだったと思う。
- ・手紙形式で課題を提示した方法はよかった。
- ・「で」「に」の違いについて対象児は少し気づいていたように思う。
- ・助詞を目立たせる手法があったと思う。例えば事前に単語を紙に書いておいてそれを黒板に貼りながら助詞を考えていくという方法もあったように思う。
- ・Yが「牛乳でかきまぜる」を提示した時「ぎゅうにゅう/でかきまぜる」と読んでいたことが気にかかった。(助詞の意識化が不十分)
- ・(授業者)「牛乳でスプーンをかき混ぜる」のおかしさに気づかせるような説明をするとよかったと思う。
- ・文意の違いを手話で表せという手法をとるのはどうなのだろうか？
- ・Iならそれはきちんと表現できた。
- ・Yが間違えた文の構成について、「で」「に」の用法が身に付いているのであれば、順を入れ替えても文の意味が通じることがあることに気づいたかもしれない。
- ・前回の研究会の反省を生かした授業であってほしい。「で」「に」についてが今回の授業で終わってしまうのであれば意味はないと思う。日常的な手立てについても明らかにする必要がある。
- ・文をパターンで覚えることに重点をおいた。自分で助詞に気をつけることに気づかないとパターンで理解させようと思っても理解できていかない。助詞が違くと文の意味が全く違って伝わってしまうことに気づかせなければならない。そういう意味から今回の授業は気づく場面を作る授業であったと理解してほしい。
- ・「で」「に」を入れて意味の通じる文にすると導入を生かしたのではないだろうか。

◇ 4年生の授業について◇

＝授業者より＝

- ・日常的に見るとあまりわかっていないようである。1学期の自立で行ってきたが定着しなかった。2学期は、手話で覚えて文で表す。絵を見て指文字で文を覚え、手話で表す。などの形態をとってきた。母親に文例を渡し、日常使う時は指文字で伝えるように頼んである。
- ・集中して覚える経験を重ねる必要が大きい。読んだり書いたりする経験をさせる必要がある。プリント、本読みと毎日の宿題で経験していく。対象児は日記を書いても十分なものが書けなかったという経緯もあることから、指文字の宿題をとることにした。

＝参観者より＝

- ・経験を話せる子どもがいて授業がスムーズに進んだと感じた。
- ・(授業者)プリント、教科書をじっくり読んでいればできる。
- ・経験の大切さを感じる。対象児は言葉の入り方の難しい子どもである。
- ・子どもが手話で表現できたとしても手話と実物がどこまでつながっているのかという疑問がいつ

も残っている。

- ・(授業者) 穴埋め問題は、これまでもやっているののでできると思う。もし、埋めることができなくても、もう一度本を読んで調べることができる。このようなことができないと言葉は入ってこないと思う。繰り返しによってできて来るという事実もある。手話と実物がつながってこないという場面は、今回のような中身であればあまり問題もない。ただ、学年相当の教科書の中身になると難しい場面も出ると考えられる。
- ・手話と指文字を使って丁寧に行われた授業であると思った。的はずれな答えもなかったことに驚いた。
- ・対象児は結構プレッシャーを感じていたのではないか。(性格上)
- ・授業のパターン、動きがよく入っている。だからこそ言葉に集中できたと思われる。
- ・これまでの積み上げの中で言葉の数は増えているのではないかと思われる。それは特別な手立てがない時でも文章を読むことへの抵抗感が減って来ていることから予想することができる。

◇日本語習得という観点から◇

- ・1年生の例として…手話表現で話すことができるわりには、言葉はわかっていないことが、よくある。毎日絵カードを宿題に出す。国語では指文字から手話へという流れを作っている。質問への的確な答えについては、手話で聞けば答えられる子もいるが、文を読み取ってはなかなか難しい状況でもある。いつ、どこで、…などについて会話や文の中で確認していく作業を進めていきたい。

【アドバイザーから】

- ・手話と音声語の関係について…
名詞が入っていない→経験していない、注意して見ていない筋道にそって見ていないとわからなくなる。聞こえている場合の注意と、目で見ているだけの注意とは違う。
経験を経験として定着させる。これが言葉につながる。
本当の日本手話でない限り、手話と音声語の間には共通部分があり、手話を使って日本語を教えるていくことは可能である。
- ・ことばとことばの関係について…
「で」「を」「に」
ふでば に えんぴつ を くつつける。
えんぴつ に くつつける。 どの表現も可能
えんぴつ を くつつける。 他動詞
バス を 乗る。 → × 自動詞
バス に 乗る。
動詞の性質とくつついている。動作語の性質でどの助詞を選べばよいか決まってくる。
- ・後ろの単語との関係を考えて…
日本語制限のようなものがある。助詞だけ取り出してもわからなくなる。パターン化することと気づくことが大切である。
- ・「文法」文の中の語の関係
助詞に気づくのは健聴な子どもで5才くらい
文と文の関係については10才くらい
プリント中の「いつのことでしょうか」は後ろの文につながっていない。

文と文の関係に着目させることが必要である。手話を使うことで意識づける。ただ手話だけでなく、文章で押さえると効果的。文をチャート形式で分析する。

- ・集中することは健聴の子どもより難しい

見るところがあちこちに渡ると集中することは難しい。

見ながら聞くことができないことで集中力は半分になる。手も見る。口も見る。非常に大変である。数詞を覚えることの他に1ひきとは言わずに1びきとなることの合理性は聞こえない人にとってはわからないこと。

- ・指文字の使用について

指文字をどんどん使うことだけではなく「気づき」が大切である。「えんぴつでかく」が自然だと思っているが「えんぴつにかく」があると言うことに気づくことが大切。無意識で使っていくが同時法でいつも使っていれば自然に覚えるものではない。

(3) 第3回

ア 日 時 平成19年1月16日(火) 9:00~17:30

イ 場 所 三重県立聾学校小学部教室及び図工室

ウ 参加者 坂本 幸(前宮城教育大学教授)

無藤賢治(本校教頭) 本校小学部・幼稚部職員

【活動内容】

*朝の学習及び授業参観と研究授業(午前中9:15~12:20)

- ・小学部各学年の授業参観

(研究対象児を中心としながら、小学部全学年の授業参観を通じた児童の実態把握)

- ・1年及び5年の研究授業

(研究対象児の在籍する学習グループの研究授業)

- ・研究協議と講演及び質疑(14:30~17:30)

- ・授業研究会(14:30~15:30)

研究授業を中心として、課題解決にせまる内容での話し合い。

- ・講演(15:30~16:30)

演題:「助詞と動作語」~日本語の文構成~

- ・質疑(16:30~17:30)

今後の研究の方向について

【授業研究会】

*授業研究を基本にして、課題解決に迫るための討論

◇5年生の授業について◇

=授業者より=

- ・今回の授業は、最初の10分間が文法の学習、後半は、教科書の内容で学習を組み立てた。文法の学習内容は、言葉を組み立てることを課題の中心とした。1学期からこれまでの学習の中で、間違いの多い部分を取り上げる指導を行っていったが、変容はあまり見られなかった。そこで、助詞によって文意が変わることに気づかせる指導を進めていった。その結果として、少し意識しながら文章を書くような態度が見られるようになってきた。その後、正しく助詞が使えるかという観点でチェックしてみたが、次第に良くなってきたように感じている。一方、動詞の活用についてはそのことに気づいていない事による間違いが多いことに気づいてきた。「~が、~。」という

形になる動作語を覚えている。他動詞と自動詞の違いを教え「～を」がこない動詞から覚えさせるように取り組みを始めたところである。

＝授業参観者より＝

- ・細かく順を追って指導されたことが良かった。
- ・「ので」をつかませるところで、時間不足になってしまったことが残念であった。
- ・「よばれる」の表現を手話で表すと、子供の間違いを指導者が把握しやすく良いと思った。
- ・丁寧な指導で良かった。ヒントとして与えた「残雪は」のところだけではなく、その前の部分も指摘すれば子供達がより分かりやすかったのではないか。

《動詞の学習について》

- ・「歩く」という動詞の活用を学ぶとき、I以外はその活用について理解できているように感じた。この後の学習の流れは、基本の動作語について順番に進めていく予定である。
- ・子供達に学習内容を定着させるには、もっと時間が必要だと感じた。
- ・短い文で書くことを徹底させることで、長い文に広げていく方向へ持って行きたい。また、学習したことが実生活につながられるようにして欲しい。
- ・対象児にとっては適切な学習内容であったと思う。しかし、他の児童にとってはもっと適した課題の提示方法があったように思う。書かせ方を、子供に託すのではなく、指導者が方向性を持って提示することも必要であると感じた。子供により適した課題の形式をとるべきではないか。つまり文を覚えるという形だけでなく、子供の落ち込んでいる部分を明らかにしながら、課題を提示していく必要があるように感じた。今後課題の絞り込み方にさらに工夫が必要であると思った。

◇1年生の授業について◇

＝授業者より＝

- ・実際場面で使える言葉として身につけさせることをねらいとして学習を構成した。
- ・対象児は、朝の学習グループの編成も変え、現在動詞について学習を進めている。その際、その日の国語の学習に関係ある動詞を取り上げ予習的に取り組んでいる
- ・「いいました。」「いきました。」の区別がつきにくい。言葉についても細かなところまで理解が進んでいないと感じている。指導する立場として、細かなニュアンスまで伝えたいと思っているが……。限られた時間の中でどれだけ子供達の力を引き上げることができるか試行錯誤の段階である。宿題として覚えさせる場作りも必要だと思っている。

＝授業参観者より＝

- ・学習内容がたくさんありすぎたように感じた。最初の言葉のまとまりのところで時間をとりすぎたように感じた。
- ・次々と「はじめに」「つぎに」・・・と移っていったが、内容が豊富すぎた。もっと絞って進めても良かったと思う。そして、子供に例文を考えさせる時間を確保した方が良かった。そのように子供に反復して学習させる場作りも必要である。「など」の押さえ方についてさらに工夫が必要。たくさんの種類を提示することが必要ではなかったか。
- ・「わらいながら」「おこりながら」という形に動詞の形を活用させることはなかなか難しいさらに練習が必要だと感じた。
- ・上位概念と下位概念をどこまで確認させるべきか？
- ・短文作りなどで定着化をはかっていくことも必要だろう。

- ・指導者の表情が学習内容理解に有効に働いていたように思う。つまり、子供の中でイメージが膨らみ、子供の体験とつながっていったので良かった。
- ・言葉を一つ一つ押さえていくと、その単元の中で文章全体からつかみ取ってほしい内容とのギャップが出てくる。その段差に悩むことが多い。
- ・文章を切り刻んで説明していくと深まりがなくなる。
- ・擬音・擬態語で成長してきた子供達が言葉を通して多くの内容をより深く学ぶことが現実となってきた今、子供達にとっては難しい場面が次第に増えてきていると感じた。その中で子供達が生き生きと学習していたのが印象的であった。

講師先生(アドバイザー)の講義

- ・聞こえない子供にとって「助詞」は難しいととらえているが、普段はあまり意識していないのも事実である。しかし、いざ体系的に指導しようとするルールがあってないようなものである。
- ・「助詞と動作語」～日本語の文構成～という演題で、「助詞」指導の困難さと今後の方向性について講義を受けた。
- ・様々な実践から、動詞との関係で助詞を考えていくことが助詞理解につながっていくのではないかという考えに達した。そこで、「助詞と動詞をくっつけて学ぼう」という形を進めていくことがより現実的になるのではないか。そのために、用法を図示することで視覚的に子供の理解を進めることが有効な手段ではないかと考える。(別添資料にある盆栽型系統樹)
- ・今ある基本の動作語100語+について盆栽型系統樹を作り助詞の理解についての方向性を提示できないものか研究を進めたいと考える。(本校からの外部への情報発信)

(4) 第4回

ア 日 時 平成19年2月20日(火) 9:00～17:30

イ 場 所 三重県立豊学校小学部教室及び図工室

ウ 参加者 坂本 幸(前宮城教育大学教授)

本校小学部・幼稚部職員

【活動内容】

***朝の学習及び授業参観と研究授業(午前中9:15～12:20)**

- ・小学部各学年の授業参観
(研究対象児を中心としながら、小学部全学年の授業参観を通じた児童の実態把握)
- ・1年・4年・5年の研究授業
(研究対象児の在籍する学習グループの研究授業)

***授業研究会及び研究協議と本年度のまとめ(15:20～17:30)**

- ・授業研究会(15:20～16:20)
研究授業を中心として、課題解決にせまる内容での話し合い。
- ・研究協議と本年度のまとめ(16:20～17:30)

【協議内容】

◇授業研究会

***各学年部の授業内容について**

[4年生の授業について]

- ・文章構造の基本を押さえることにポイントをおいて指導を進めた。
- ・授業を見て普段から何を大切にしているかがよく伝わってきた。文法を丁寧に伝えて

いくことが非常に大切なことも実践を見てよく分かった。

- ・聞こえる子どもにとって何気なく解る言葉が聞こえない子にとっては難しいことが推測された。

[5年生の授業について]

- ・動詞の意味を理解した上で、正しい文の構成を導くことをねらいとして進めた。
- ・その中で、自動詞と他動詞を正確に理解させることに視点をあてて指導を行ってきた。
- ・今回の指導内容は多義にわたっていたので内容的に難しかったと思う。
- ・子どもが見つけたルールを取り上げることが一番の理解につながるのではないか。

[1年生の授業について]

- ・現在動詞の変化には応用がきかない状況である。
- ・説明文の文章がどれだけ読み取れているかは個人差がある。
- ・定型的な表現を今後も確認していきたい。
- ・指導者の意図が子どもによく伝わっていた。

《アドバイザーから》

- ・原則から押さえていくことが基本である。その後、適宜例外を入れながら理解の幅を広げていく。
- ・聞こえるものは日本語を自然に獲得している。そのうち形を整理して納得するものである。子どもには大きくなってから理屈を教える。例を挙げたり具体的用法を示すことで理解させることが必要となる。教師の学びと異なっていることを理解しておく必要がある。
- ・単に言葉の対立を考えるのではなく、視点・自分がどの立場に立っているのかなど考えさせることが重要である。
- ・基本を押さえるとき、文を構造図で表すことが一つの方法であると考えられる。幹と枝葉が解るようにすることが必要である。
- ・指導者が内容を十分かみ砕いた上で、子ども達にわかる形で教材を準備することが大切である。
- ・聴覚障害児は時間の関係や因果関係理解の部分で弱いものを持つ。時が移ることの実体験がその感覚をつかみ取らせることになる。

*本年度の研修テーマを基本としての研究協議

①基本的な文の構造をおさえていく。

枝葉の部分は落とし、基本的な文の構造を抑えていく事が大切。しかし、いずれは、枝葉の部分も提示していかなければならない。どのような方法で、いつごろから子どもたちに提示していくか？

②子どもたちに「ふーん」「そーなんだ」とわからせる。

日本語に関する理屈の部分は、大人になってから。子どものうちは、例をあげたり、ドリルをやらせて身につけさせたりしたほうがいい。子どもたちが、「ふーん」「そーなんだー」と納得できるように。

③図示する。

説明していくときに図を書いてわからせていく。どのような図を書くかで、わかりやすいかどうかが決まってくる。

④問題の出し方を工夫する

同じ内容の問題を出すにしても、子どもがわかる言い方で、わかるように出す。

⑤視点を変える

たとえば、他動詞、自動詞については、「～を（目的語）」があるかどうかの視点もあるが、自動詞は「(主語になっている者が)自分からみた視点」。他動詞は、「(主語になっている者が)他者

を見た視点」という見方もある。⑥文の構造を図示するなどして、わかりやすく教える事ができるよう工夫する。

(教師が) 自分のやったことをそのまま子どもたちに伝えるのではなく、「子どもたちにわかるように、どうやさしく言うか」が大事な事。

⑦時間の経過の概念をどう教えるか。

聾の子は、時間の経過の把握、時間の経過に従った物事の把握が弱い。それをどう教えていくか。

⑧「論理をたてる」ことをどう教えるか。

一文一文は理解できても、全体で何を言っているのか把握しにくかったり、論理立てて説明しにくかったりする子どもが多い。それをどう指導していくか。

⑨「読み」が先に発達。「書き」は遅れて発達

「読み」「書き」では、「読み」が先に発達する。「指導のパターン」だけが先行しないように。

5 アドバイスを受けて～本年度の成果と課題～

(1) 諸検査等の実施とその成果

継続的研究を進めていく上で、研究の一貫性と統一性そしてその精度を高めていくために、児童の実態をより正確にかつ客観的に把握していくことは重要なことである。そのような観点から、標準化された諸検査を導入し児童の成長の度合いを定期的に把握してきた。その結果、一人一人の子供について、学部全体で共通理解が図れ一貫した適切な指導方針が立てられた。そして、その方針に沿った形で指導が継続されることで児童の基礎的能力の向上につながってきた。

現在、導入している標準化された検査は最終的に決定されたものではないが、全国の多くの聾学校で取り入れられ、それぞれの現場で一定の分析が行われてきているものである。そのような意味からいっても今後本校でもさらにその活用に関して論議し、その有効活用を見いだしていかなければならない。

このほか本校小学部が過去から積み上げてきた発音明瞭度検査の結果については、言葉の学習を進めていく上での基本資料として活用されてきた。今後も、児童の発達を連続的に見ていくための有効な方法として確立されていくべきものである。

(2) ケース研究の意味とその成果

各学年部で対象児を決め授業研究を通して、テーマに沿った話し合いを進めてきたことは、論議の焦点化につながり、子供を低学年から高学年に向けての方向性を持った成長体として捉え、筋の通った指導方針確立に役立てることができた。また、具体的児童の実態を基本として話し合いを進めることで、事例を通した分かりやすい研究を推進することにつながったと考える。事例研究を進めることで、個々の指導者がそれぞれの場で子供に接するときにより具体的な方策を見いだすきっかけとなった。次年度以降も大切にしていきたい方法である。

(3) 日本語の習得を図るために考えられること

低学年部では、基本の文型の習得がまず求められている。そのためには、読む・書く等の一連の活動を繰り返し行っていくことにその意味を見いだしている。そしてそれを実生活の場でどれだけ生かすことができるかが、本当の意味での日本語力習得につながることができると結論づけてきた。そのためには、基礎力を上げることはもちろんであるが着けてほしい力を見つめながら児童の力を引き上げることも視野に入れている。

中学年部においては、基本の動作語 100+を含む文章作りを通して動作語と手話のマッチングを行

った。その過程において文を指文字で表現することに視点を当て、その中で動作語を日本語として意味理解できるような取り組みを進めていった。その成果は、動作語の意味理解についての確認テストにはっきりと現れてきている。今後もこの限られたしかし日常的に活用できる範囲の基本の動作語 100+にこだわりながら、その語尾変化や助詞との関連性について学習を進めていくことが必要であると捉えられている。

高学年部では、前述の動作語をベースとして助詞と動詞の関連を学ぶ中で文を組み立てることがだんだん出来るようになってきた。これも、多くの繰り返し学習の中で培われてきたものということが出来る。今後は動詞のグループ化と文型のルール習得が書記日本語習得への大きな足がかりとなる。

(4) 今後の課題

これまでの研究の中で、助詞に視点を当てその活用例を数多く経験させること、次にその助詞と動詞の関連性について検討し、多くの用例に触れ繰り返し学習を積み重ねること、そして動詞そのものの活用についても児童に分かりやすい方法で提示し定着を図ること等に焦点を当てて実践を積んできた。その結果各学年部のまとめでも述べたように一定の成果が見えてきた。

そこで、今後さらに子どもたち自身が言葉を整理して文章を日本語として組み立てていくことが出来るような目に見える方策を見出す必要がある。本年度実施してきた学校経営サポート事業における研修会で、動詞との関係で助詞を考えていくことが助詞理解につながる。そこで「助詞と動詞をつなげて学ぼう」という形態で学習を進めることがより現実的な方法となるのではないかという方向で話し合いが進んだ。そのための一つの方法として「盆栽型系統樹」による文章の構造図化が研究課題の一つとして考えられる。次年度以降、一人一人の子どもの特性をさらに的確に把握しながら、個々の児童がより活用できる日本語を習得できるよう研究に努めていきたいと考えている。

⑥ 松阪市立久保中学校

所在地	松阪市垣鼻町1790-1
交通機関等	近鉄 東松阪駅下車徒歩10分
電話番号	0598-21-1042
FAX番号	0598-21-8103
教職員数	47名
生徒数	671名

1 学校の概要

本校は1948年創立で、校舎敷地は住宅街の中に位置し、生徒数のわりに敷地が狭く学校施設の増設も難しい状態である。また、徳和小学校区から通学する生徒数が年々増加する傾向にあり、三重県下でも大規模校の一つとなっている。

2 学校、地域、児童の現状

本校は700人弱の生徒が在籍し、校区は旧市街地・農村・新興住宅地を有している。旧市街地では人数が減少しているが、新興住宅地は軒数が増えつつある。多くの生徒が落ち着いた学校生活を送っており、クラブ活動も活発で全国大会出場など素晴らしい成績を残している。しかし、一部の生徒に生活の乱れがみられる。教室にはいれなかったり、遅刻をしたりする生徒の姿がある。また、様々な理由により、不登校傾向の生徒も数人いる。生徒や家庭を取り巻く状況は様々で、複雑な家庭状況を抱え、家庭の温かみを知らずに育った生徒もいる。わたしたち教職員はこのような現状を受け止め、生徒理解に努めている。

3 アドバイスを希望する課題

平成17年度より、「小集団活動を取り入れた授業改革について——なかまづくりを中心に据えて」をテーマにして、授業改革を中心に研修を進めている。今まで、「なかまづくり」とは別の視点で取り組んでいた授業に、小集団活動を取り入れることにより、「なかまづくり」の視点で授業を捉えることにした。授業の中でできるだけ小集団活動を取り入れることで、生徒たちをつなげようとしている。到達目標は「生徒たちが互いに考えや気持ちを聴き合うことのできる集団」である。

生徒たち一人ひとりの「学び」を保障し、小集団活動の中で互いにかかわり合ってつながっていくことを目指している。

「なかまとつながる小集団活動を取り入れた授業とはどんな授業なのか」。「学びの共同体」を築いていくことで生徒たちの落ち着きを取り戻していった静岡県富士市立岳陽中学校の元校長の佐藤雅彰先生に、本校の実態に即したアドバイスをお願いした。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日時 平成18年6月9日(金) 10:30 ~ 17:00

イ 場所 松阪市立久保中学校

ウ 参加者 全職員 45人

エ 内 容

(ア) 研究授業

- 1年5組 社会
- 2年2組 音楽
- 3年1組 英語

(イ) 事後検討会

- ・ 小集団活動についてよかった点、改善点について
- ・ 各教科の現在の取り組みについて
- ・ 全員ができるだけ参観できる態勢を工夫

オ アドバイザーより

- ・ 効果のある小集団の取り入れ方を研究する。
- ・ 発問はなるべく難しいものを入れていく。
- ・ 全員が実践をして、お互いを批評していくようにする。

全校職員で共通認識をもって「こと」を決めたら中途半端に実行しない。諦めない。意味のあるグループ活動は子ども相互が依存し合える課題で実施し、一人で解けないときに気軽に仲間に相談できるようにさせたい。グループ活動は3つの場合がある。1つは低学力層の子どもをジャンプさせるため。2つは子どもたちの解釈・思い・気付きなど意見交流をするため、3つは教科書よりやや高いレベルの課題で高学力層の子どもを含めてジャンプさせるための3つ。

仲間で学び合うとき、子どもたちの間に溝があった。まだ仲間に依存できない状態がある。焦らず諦めず続けること。また、授業参観後の研究協議で子どもの学ぶ事実で語り合い、学び合ってほしい。その場合、子どもの人やモノやこととどうかかわっているか、教師と子どものかかわりはどうか学び合うこと。

(2) 第2回

ア 日 時 平成18年10月18日(水) 11:30 ~ 15:30

イ 場 所 松阪市立久保中学校

ウ 参加者 全職員 45人

エ 内 容

(ア) 研究授業

3年2組 国語

(ビデオを撮影していただく)

(イ) 事後検討会

- ・ 視点生徒の様子について
- ・ 視点生徒以外の気になる生徒について
- ・ 小集団活動を使う場面について

オ アドバイザーより

- ・ 子どもと子どもをつなぐ手だてを考える。
- ・ 子どもと教材をつなぐ場面を持つ。
- ・ 小集団活動の場面は、「みんなで調べる」、「みんなで考える」時に使うと効果がある。

水谷先生の3年国語「おくの細道」を参観。グループ活動の時にホワイトボードが有効に活用されていた。他教科でも活用したい。子どもの発言も多かった。しかし、国語は単なる話し合いで終わりにしたくない。そのためにはテキストの言葉の裏を自分なりに解釈し、コミュニケーションを通じて思考し合うことを大事にしたい。国語は言葉に気付く感性を育み育てたい。そのために、子どもをテキストの言葉とつなぎたい。

学びをデザインするとき、教科書の読み取り後、「芭蕉の人物像」「芭蕉の旅はどんな旅だったのか」「芭蕉は何を求めてこのような旅に出たのか」の発問だったが、芭蕉がなぜ旅に出たのかが十分に追求されていなかった。中心発問に行くには周辺部分を丁寧に扱ってから考えさせたい。

(3) 第3回

ア 日 時 平成18年11月17日 11:00 ~ 17:30

イ 場 所 松阪市立久保中学校

ウ 参加者 全職員 45人

エ 内 容

(ア) 授業参観

佐藤先生が全クラスを参観

(イ) 研究授業

1年5組 人権学習

2年5組 数学

3年4組 美術

(ウ) 事後検討会

- ・ 学年別の事後検討会を全体の場で公開

オ アドバイザーより

- ・ 小集団の活動がうまくいっていないグループにかかわりながら全体の様子が見える位置に教師が立つこと
- ・ 小集団活動を取り入れる場面がだんだんと教師たちに理解されてきている。

(4) 第4回

ア 日 時 平成19年1月11日(木) 10:20 ~ 17:00

イ 場 所 松阪市教育会館他

ウ 参加者 久保中学校職員 45人
小学校（第二小学校・第五小学校・徳和小学校）職員52人

エ 内 容

(ア) 授業参観

佐藤先生による授業参観（第五小学校・徳和小学校）

(イ) 佐藤先生の講演

「小中の連携について」

久保中学校の取り組みを紹介しながら、小中で連携できそうな授業改革や子どもたちのケアを示唆

オ アドバイザーより

- ・ 小中連携は人が行ったり来たりすることではなく、子どもの社会的側面が育つようなことを考えて連携が望ましい。
- ・ 学びがうまくいっていない子どもに対する「ケア」や「聴く力」をつけるための対話のある学びについても連携ができる。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

(1) 成果

(ア) 「4人班だと相談がしやすい」

「友だちが何を考えているのか知るのが楽しみ」

「班学習は楽しい」

という声を生徒たちから聴くことができるようになった。

(イ) 「日常生活の中でも、グループの中で一人ひとりに居場所ができてきた」

「授業に遅れてきた友人に『もっと早く来ればよかったのに』と声かけられる」

「授業に集中できなかった生徒が声をかけてもらうことで授業に参加できるようになった」

「グループのメンバーが替わっても机を寄せ合うことに抵抗が少なくなった」

「黙ってじっとしている生徒たちに声をかけ教える生徒の姿が見られる」

等、生徒たちが授業中でも、互いに理解し合う場面が少しずつみられるようになってきた。

(ウ) 小集団で考える課題のレベルが高いと、どの生徒も話し合いに参加する姿勢がみられるようになった。

(エ) 教師たち全員に、教え込む授業から、生徒一人ひとりが考え、交流しさらに考えるという授業に変えようと努力する方向に変化してきた。

(オ) 担任は、授業で4人班を活用することを意識して、クラスの班編成や座席を考えるようになり、「いつでもなかまづくり」を意識して、学級経営に取り組むようになった。

(カ) 小集団活動がうまくいかないとき、授業者は、そのクラスの間関係や日常の担任の指導にも気を配り、生徒とかかわるようになった。

(キ) 教科を超えて、授業後の事後研究に全員が参加できるようになった。

(2) 課題

- (ア) 授業の中で、小集団活動の効果的な使い方はまだまだ試行錯誤である。
- (イ) 授業中、教師の生徒に対する支援の方法が個人によってまちまちである。
- (ウ) 「学びから逃走する生徒」がいたり、解放されていない生徒がまだまだいる。
- (エ) 「考えることのできる課題」の準備がまだまだ不十分である。
- (オ) 小学校との連携を実践していく。

⑦ 松阪市立殿町中学校

所在地	松阪市殿町1508-1
交通機関等	近鉄 JR松阪駅下車徒歩15分
電話番号	0598-21-0463
FAX番号	0598-21-8102
教職員数	34名
生徒数	360名

1 学校の概要

本校は、松阪市の中心部にあり、松阪城址やよいほの森を間近に見上げる閑静な中に位置している。以前は1,000人を超す大規模校であったが、1985年に一部校区を分離し中学校が新設された後は、生徒数も徐々に減少してきており、現在は360名ほどの学校となっている。

校区は、昔からの住宅街が大半であるが、最近はマンションもいくつか建設され、昔の面影が変わりつつある。また、校区には5校の小学校があるが、一部の小学校区には学校選択制が導入されている。

2 学校、地域、児童の現状

本校は平成15・16年度に、文部科学省「学力向上フロンティア事業」の研究指定を受け、英語や数学の少人数学習を中心に取り組み、学力向上の研究を進めてきた。今年度においても英語・数学については、全学年で少人数学習を実施している。また、昨年度より二学期制を導入し、授業確保に努めている。

今年度は、研究の中心を「人権・同和教育」に据えて、人権・部落問題学習のあり方や教科において人権保障の視点に立った授業、教職員の人権意識や資質・指導力の向上、生徒の人権意識高揚に向けた取組、保護者や地域への啓発活動などの実践研究を進めている。

保護者は、学校教育への関心も高く、いろいろな取組にも理解が得られ協力的である。また、地域においては、青少年健全育成会が学校と連携した事業を推進しており、子どもたちの健全育成に大きく貢献してもらっている。

生徒たちは、落ち着いた環境の中で、学習や行事、部活動などに熱心に取り組んでいる。また、友達関係による小さなトラブルはあるものの、問題行動はほとんどなく、ルールを守った学校生活を心がけている。

人権学習については、6月と11月に人権・部落問題学習の研究授業や11月に保護者対象の公開授業を実施したり、12月には校区人権フォーラムを開催した。また、人権フォーラム委員が中心となり、障がい者差別について講師による学習会や水平社博物館へのフィールドワークを実施したり、「人権宣言」の作成に向けた取組を進めている。

3 アドバイスを希望する課題

本校の人権教育については、学校行動計画に基づいた取組を進めてきたが、人権・部落問題学習や教職員研修等においていくつかの課題が見えてきた。そのなかで、子どもたちに部落に対するマイナスイメージを持たせないような学習のあり方や、教職員の人権意識・指導力の向上について実践的な取組が必要であることを全教職員で確認した。また、教科学習の中においても、人権保障の視点に立った授業のあり方を研究していくことにした。

このような状況から、人権・部落問題学習での題材や指導計画及び授業展開、さらには、教職員の指導力向上に向けた学習会において、専門的見地から具体的なお話や資料提供などを含めたアドバイスをいただきたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成 18 年 6 月 21 日 (水) 15:30~17:00
イ 場 所 松阪市立殿町中学校 校長室及び会議室
ウ 参加者 中野陸夫 (大阪教育大学名誉教授)
前川卓弥 (本校 学校長)
長島達郎 (本校 教 頭)
伊藤清子 (本校 研修担当)
飯田禎子 (本校 人権教育担当)

エ 内 容

- (ア) 本校の概要説明
- (イ) 本校の研修計画及び人権同和教育計画の概要説明
- (ウ) 今後の研修日程及び内容について

オ アドバイザーより

- (ア) 事実を教えることは大切だが、それに関連したエピソードを交えると考えやイメージが広がり、知識の定着も図れる。
- (イ) 研究によって事実が変わってきていることがある。また、教科書も同和教育の進展により内容の記述に注意が払われている。特に、音楽や英語は大きく変わってきている。
- (ウ) 次回は、夏季休業中に教職員研修として人権部落問題学習についての講話を行う。

(2) 第2回

ア 日 時 平成 18 年 8 月 9 日 (水) 10:00~12:00
イ 場 所 松阪市立殿町中学校 図書室
ウ 参加者 中野陸夫 (大阪教育大学名誉教授)
校長、教頭、教諭、養護教諭等 計 21 名 (松阪市立殿町中学校)

エ 内 容

- (ア) 学年別人権学習の交流
- (イ) 人権部落問題学習の講話「部落問題学習の内容と体系」および質疑応答
- (ウ) 次回の研修内容について

オ アドバイザーより

- (ア) 部落差別は、中世や近世の事実が姿形を変えて現在に残っている。現在の差別実態から過去へさかのぼりながら、当時の差別実態や理由を学習していくことも考えられる。やはり、

戦後の学習が大切である。

- (イ) 生徒に差別実態を知識として獲得させることが大切で、どのような知識を獲得させるのかを教師間で共通理解しておく必要がある。

(3) 第3回

- ア 日 時 平成18年11月16日(木) 13:40～16:00
イ 場 所 松阪市立殿町中学校 各教室 図書室
ウ 参加者 中野陸夫(大阪教育大学名誉教授)
吉永泰志(県教育委員会人権教育主事)
石井加津雄、辻 善嗣(県教育委員会研修分野研修主事)
野呂一彦、御堂栄治(松阪市教育委員会人権まなび課指導主事)
前田加津代(大台町教育委員会人権教育指導員)
校長、教頭、教諭、養護教諭等 21名(松阪市立殿町中学校)

エ 内 容

- (7) 人権授業公開
(イ) 学年別協議会

オ アドバイザーより

- (7) 社用紙や統一応募用紙から差別をなくす取組を学習することは、3年生のこの時期には適切である。生徒にいろいろ気づかせたいなら、グループでの学習を取り入れるとよい。
(イ) 部落問題学習は、部落解放運動と捉えることが大切で、部落外の問題であることや、加差別の立場から考えさせていくことが大切である。

(4) 第4回

- ア 日 時 平成19年2月20日(火) 13:20～15:30
イ 場 所 松阪市立殿町中学校 教室、会議室
ウ 参加者 中野陸夫(大阪教育大学名誉教授)
辻 善嗣(県教育委員会研修分野研修主事)
田中千恵(県教育委員会研修分野研修員)
長島達郎(本校教頭)
飯田禎子、伊藤清子、川合美穂、岡 隆史、染川奈緒、間瀬琴美(本校教諭等)

エ 内 容

- (7) 2年3組英語科授業研究(少人数学習)
(イ) 研究協議会

オ アドバイザーより

- (ア) 「わかることとできること」の統一が大切。できるようになるまでの学習プロセス（トレーニング等）が重要となる。楽しく学習に臨んでいるが、本当に理解しているのかの検証が大切。
- (イ) 生徒に学習の見通しがつくようにすることが大切。（単元ごとのシラバスを作成・提示）
- (ウ) 学習プロセスが自己確認できるような手だてや、一斉指導と個別指導のあり方を考える。
- (エ) 自学自習に結びつくような学習にしていくことが大切。
- (オ) 学力保障が人権保障になる。一人ひとりの生徒に教科の内容を理解させ、基礎基本の学力をつけていくことが重要。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

本校の人権教育推進に向けて、夏季休業中の校内研修会や11月・2月の授業研究会など、4回の指導助言をいただいた。以下にその成果と課題を明らかにしたい。

(1) 成果

- ア アドバイザーの人権部落問題学習に関する豊富な知識や経験に基づいた講話及び指導・助言により、本校の人権部落問題学習の重要性やそのあり方について再認識するとともに、今後の取組の方向性が確認できた。
- イ 授業研究や協議会を通して、教科における人権保障に向けた授業づくりや教材選定など、具体的な取組の方向性が明らかになった。
- ウ アドバイザーの講話や授業研究等で、教職員の人権意識の向上を図ることができた。

(2) 課題

- ア 人権保障の視点の明確化と共通理解を図り、人権部落問題学習や教科学習等において人権保障の実現に向けた教材開発・選定及び授業改善をおこなっていく必要がある。
- イ 教職員のさらなる人権意識や指導力の向上を図るために、OJT研修を取り入れるなど日々の実践に結びつく効果的な研修を考えていく必要がある。

6 アドバイザーから —成果と課題—

- ① 今年度の学校経営の重点は、人権・同和教育の充実であり、その達成に向けて人権・部落問題学習の在り方を実践的に追求していくことを確認し、研修計画、授業計画について協議した。
- ② 人権・部落問題については、教科書の記述が昨今の研究を反映して大きく変わっていること。例えば、被差別部落の歴史的起源でいうと長年定説であった近世政治起源説にもとづく記述はなくなっているが、これは部落史の転換にとどまるものではなく、歴史観全体の転換であることを理解する必要がある。
- ③ 人権(差別)概念は歴史的・発展的な概念であることを正しく理解する必要があるということで、具体例をいくつか示した。
- ④ 教科書での部落問題に関する記述がどう変化しているかを例にして、部落史研究の今日的状況について理解を深めるようアドバイスした。
- ⑤ 今後各学年ごとの学習内容を具体的につめていくことを確認した。
- ⑥ この時期に、「統一応募用紙の学習～就職差別の学習を進路学習へ」をテーマにしたことは適切であるので、生徒の問題意識や質問に適切にこたえられるようさらに工夫すること。

- ⑦ 授業形態が一斉指導に終始していたが、テーマからしてグループで討論し学習する場面を設定する必要があること。
- ⑧ 学習資料は、生徒の生活や意識にあったものを使わなければならないが、そのためには原資料に不適切なところがある場合には、削除や修正を加えることが必要であること。
- ⑨ 「人権の視点に立った授業（英語科）」は少人数制で行われたが、基本的には一斉指導が主であるから、生徒の学力実態をふまえて一斉指導と個別指導のつながりを一層工夫する必要があること。
- ⑩ 「人権の視点」は「人権保障の視点」と解すべきで、教育内容が人権保障にかかわる内容であるということと、教科のねらいである学力を保障することの両面があるということ。

⑧ 東員町立神田小学校

所在地	員弁郡東員町六把野新田100
交通機関等	三岐鉄道 東員駅下車 徒歩7分
電話番号	0594(76)2305
FAX番号	0594(76)2393
教職員数	27名
生徒数	400名

1 学校の概要

本校は、員弁郡・いなべ市の東端に位置し、校区内には、役場、町文化会館もあり東員町の中心部に位置する。昭和42年町制施行により、東員町立神田小学校となり、昭和48年現在地に移転、鉄筋3階建て校舎となる。その後、平成14年に耐震補強大規模改修・トイレ高品位改修、平成17年に児童数増による増築工事を終え、充実した施設となっている。

2 学校、地域、児童の現状

(1) 学校の現状

本校では、一人ひとりに「確かな学力」を保障し、「豊かな人間性」を高めるため、「語彙量調査」等基礎学力調査による個に応じた指導、「詩の暗唱」「視写・聴写」「100問計算」等の全校的な基礎学力向上の取り組み、更には、縦割り班活動、ボランティア活動等を組織的に取り組んできた。



そして、平成17年度に入り、児童の学校生活の75%をしめる「授業」の充実こそ重要であると考え、東京大学の佐藤学先生の「学びの共同体」の理論を学校経営や研修に取り入れ、全校的に授業改善に取り組みはじめたところである。

〔図1〕詩の暗礁表彰

(2) 地域・家庭の現状

かつては、田園に囲まれた農村地域であった校区も、近年、大型ショッピングセンターの進出、小規模団地等の建設もあり、急激に、都市化が進んでいる。そのため、児童や保護者の有り様やニーズも多様化している。多くの地域住民の「地域の学校」としての意識は強く、例えば、児童の安全確保について見れば、多くの「学校安全ボランティア」の方にお世話になっている。また、PTAの「健康貯金」（基本的な生活習慣づくり）や「親子読書」等、学校の教育活動に対して、協力的な関係もつくられつつある。

しかし、一方では、子育てに悩みや課題をもつ家庭も多くあり、学習上、生徒指導上の支援を必要とする場合も多いのも、現状である。

(3) 子どもの現状と教育課題

このような中で、教職員の前向きで、組織的取り組みにより、全般的には、子どもたちは、落ち着いた学校生活を送っている。しかし、前述のように、地域変化の中で、学力格差の拡大、家庭環境の厳しい児童の存在が、問題となってきている。端的に言えば、「格差の克服」と多様な子どもの多様な共生が、本校の教育課題である。

3 アドバイスを希望する課題

(1) 本校の「学びの共同体」

ア 「学びの共同体としての学校」の4点の課題

本校の「学びの共同体」は、前記教育課題を解決するために、公立学校の多様性を積極的に生かし、一人ひとりの学力保障と共に、児童一人ひとりが、豊かな人間関係を築けるようにする全校的な授業改善・改革の取り組みであるともいえる。その実現には、次の4点の課題がある。

- ①「教師と子ども」とのよりよい関係の構築。^{*1)}
- ②「学び」を中心とする授業の創造。
- ③学び合う「同僚性」のある教師集団の創造。
- ④親が子どもの学びに参加する「親の学習参加」の創造。



(図2) 2年親子参加型授業

イ 学びの共同体の3カ年計画

「学校と教師の責任は、一人残らず子どもの学ぶ権利を保障し、子どもの高い学び」を保障することにある。」「教師集団が同僚性を築いて協力することなしに、その責任をまっとうすることはできない。」^{*2)} このことを実現するため、次の3カ年計画を立てている。

平成17年度テーマ：「学びの姿の観点の共有を図る」

平成18年度テーマ：「学びの姿を生み出す授業の組み立てを実践に移す」(本年度)

平成19年度テーマ：「学びを支え合う個と集団を育成する」

このテーマにそって、17年度は、月二回の公開授業の実施等の研修体制づくりと「学び」とは何か、授業のどんな場面や展開に「学び」を生むことができるかなど、教職員同士で学習観の共有化を進めてきた。

そして、18年度は、「活動的で、協同的で、表現的な学び」のある授業づくりを進めたいと考えた。

ウ 個人テーマについて

本校では、月二回の公開授業と事後検討会の積み上げと共に、教職員の主体性を高めるため、教職員個々が、個人テーマを設定し、研究・実践活動に取り組んでいる。しかし、テーマの設定の仕方や深め方については、課題も多いのが現状である。

(2) アドバイスを希望する課題

以上のように、本校では、「学びの共同体」づくりを核として、授業改善・学校経営改善を進めているところである。しかし、その取り組みは緒に就いたばかりであり、研究課題も多い。そのため、次の各点について、ご示唆・ご教授頂きたいと考える。

ア 児童の「学びの共同体」形成につながる授業づくりについて

<活動><協同><表現の共有>をどう授業に組み入れるのか。

- イ 「学びの共同体」における研修の在り方について
「学びの共同体」における効果的な研修はどうあるべきか。
- ウ 「学びの共同体としての学校」における学校経営について
研修主体の学校経営を、どう進めたらよいか。

4 訪問記録

(1) 第1回

- ア 日時 平成18年6月30日(金) 9:30 ~ 12:20
- イ 場所 校長室及び2年C組教室
- ウ 参加者 佐藤 廣和(三重大学教授)
辻 喜嗣(三重県教育委員会事務局 研修分野研修企画室 主幹兼研修主事)
岡野 譲治(本校 学校長)
神谷 宏(本校 教頭)
堀江 由美(本校 研修主任)

エ 内容

(ア) 活動内容

- ① 2年C組 国語「スイミー」 清水教諭の授業参観
- ② 本校の「学びの共同体」研修の概要について(プレゼンテーション)
 - ・ 学校教育目標と研修主題
 - ・ 基礎学力の取り組みから、「学びの共同体」へ
 - ・ 「学びの共同体」としての学校・・・一研修中心の学校経営
 - ・ 本校の「学びの共同体」3カ年計画
 - ・ (教職員の)個人研究テーマについて
- ③ 今後の協議の予定・方法について

(イ) 協議内容

- ① 授業や児童の様子を見て
- ② 提案に対する質疑と助言
- ③ 今後の研修の進め方(レポートの受け方)の検討と日程調整
 - 授業研究を通じて、実践的アドバイスをして頂くこととした。

オ アドバイザーから

- 2年C組の授業参観を通じて、児童の実態として、「感応力(友達表現に対して)はある程度育っているのではないか。」と思う。
- 教え合う関係と学び合う関係の違いを明確にした方がよいのではないか。
- (本校提案の)学びの共同体のスパイラルアップについて、低学年ではあてはまるが、高学年では、わかるできることと学ぶ楽しさはずしもつながらないのではないか。
 - 高学年では、「わかる」けど、学ぶ意義・意味をとられないことも多い。
 - この学校で、総合学習がどう展開されているかを知りたい。
- 本校の基礎学力、学びの共同体の取り組みでは、「一人ひとりの子がどのように自立していくのか」が「他者への依存性」以外に見えない。「わからないときどうするのか」を教えることが大切である。すなわち、子どもにとって、「学び方」(自分でテーマを設定できる。自

分で調べようとする力をつけること)を学ぶことが、大切ではないか。・・・フランスでは、間違ふことを前提にした辞書が開発されている等、研究事例の紹介をして頂いた。

(2) 第2回

- ア 日時 平成18年9月15日(金) 13:30 ~ 17:00
イ 場所 6年B組教室 校長室・図書室
ウ 参加者 佐藤 廣和(三重大学教授)
辻 喜嗣(三重県教育委員会事務局研修分野研修企画室主幹兼研修主事)
大塚 睦子(6年B組担任)他、神田小学校教職員

エ 内容

(ア) 活動内容

- ① 6年B組 算数「真分数×真分数」大塚教諭の「学びの共同体」授業の参観
- ② 授業事後検討会(高学年部会)でのご助言
- ③ 全体会にて、今後の研究方向等の協議とアドバイス

(イ) 協議内容

- ① 参観授業への実践的アドバイス
- ② 職員からの「日頃から課題と思っていること」等の質問に答えて頂く形で協議
- ③ 次回予定の協議

オ アドバイザーから

- 児童の実態として、よい意味で1970年代の子どもの印象を受けた。(児童が落ち着いて、先生の話聞ける、子どもたち同士が学びあえる関係にある。)今までの取り組みの成果が見られる。
- 「佐藤先生の描く、児童の学びの共同体像はどのようなものですか。」「授業の中で、どのような子どもの姿が見られれば、学びの共同体に到達点したと言えるのか。」との職員の質問に対して



(図3) 佐藤廣和先生

→ 学力テスト等の目指す到達点は、教科の内容に対する到達点であるのに対して、神田小の目指す「学びの共同体」で子ども達につけたい力は、基礎学力の徹底と共に、教え合いの中で、他を思いやる力やコミュニケーション能力など豊かな人間性を育むことも目指していると思う。「学びの共同体」を形成するには、「つけたい力」を教職員で共有し、神田小学校として「つけたい力」を明確にし、保護者と共有もしくは、話し合いをしておくことも必要があると思う。

- 「どのように保護者と共有化すればよいのか？」という質問に対して

→ お便り等で、具体的な学びの姿を伝える方法、家庭訪問による方法等がある。教職員の個性を生かし、それぞれの得意を生かしていくのがよいと考える。

- 授業や学校生活の中で、「形式的な挨拶、発言」を解消する方法として、「異化した表現法」がある。

(例えば、本校の詩の暗唱の取り組みの発展として、「自分が選んだ詩を暗唱する」、選んだ理由を聞くことにより、他の子のもつ「思い」への理解が深まる。)

→ 神田小の課題として、「自己表現をどう豊かにさせるか」を追求したほうがよいと思う。

(3) 第3回

- ア 日時 平成18年10月13日(金) 9:30 ~ 17:00
イ 場所 6年A組・1年B組・4年B組教室・校長室・図書室
ウ 参加者 6年A組 日置教諭 1年B組 栗田教諭 4年B組 日沖教諭 その他全教職員
エ 内容

(ア) 活動内容

- ①6A 日置教諭 算数「時間と分数」 1B 栗田教諭 算数「どちらがながい」の授業参観
②全体公開授業 4B 日沖教諭 国語「文と文のつながり(接続語)」
③授業事後検討会でのご助言

(イ) 協議内容

- ①参観授業への実践的アドバイス
②佐藤先生の講義「学びの共同体の意義について」
③次回予定の協議

オ アドバイザーから

授業の中での具体的子どもの動きをもとに、示唆に富むアドバイスを頂き、大変参考になった。具体的には、次の2点である。

○「学びの共同体」授業展開において、<活動><協同><共有>の整理が必要であったのではないと思う。その整理のために、次のように「共同体」を整理してみてもどうか。

A・・「子どもが説明した方がわかりやすい。」「説明することで理解が深まる。」ことがある。
このことを意識すること

→ 定着指導・習熟指導としての<協同>があると思う。本時の授業では、最初の復習の部分がこれにあたる。

B・・個々の思考があつて、その筋道を共有していく過程で、個人の思考や学びも深まる。
そのための共同体である。この共同体にも2種類ある。

B1 「答え」への過程が多様であり、他の子の理解の過程を<共有>することにより、自分の思考が深まる共同体である。

B2 個々の表現活動<活動>(正答がない学習 作文表現など)を共有することで、個々の子どもへの人間理解が深まる共同体である。言い換えれば、学びの共同体の基盤をつくる共同体である。

※本時の授業では、どの展開で、共有するのかという点で、軸にぶれがあつたように思う。

共同作業で文をつくることに功罪があることも知ってほしい。個々で作れば、豊かな文ができることもあるであろう。それを全員に広げ、共有することで、「学びの共同体研修」が育つように思う。

○今日の授業の中で、立場の弱い子の思考や発言が、立場の強い子の発言で消される場面があつた。どう「正当性」(人権教育の視点)を確保するかが課題である。「学びの共同体」を標榜する学校としての真価が問われることになるので、丹念に指導を進める必要がある。

(4) 第4回

ア 日時 平成18年10月17日(金) 9:30 ~ 17:00
イ 場所 4年B組 1年C組 5年A組教室・校長室・図書室
ウ 参加者 4年B組 日沖教諭 1年C組 丸山教諭 5年A組 中村教諭 その他全教職員

エ 内容

(ア) 活動内容

- ①4B 日沖教諭 国語「説明文・マップルーズで伝える」1C 丸山教諭 国語「何ができるか漢字で書こう」の授業参観
- ②5A 中村教諭 算数「正多角形の辺と角」の全体公開授業
- ③授業事後検討会でのご助言

(イ) 協議内容

- ①参観授業への実践的アドバイス
- ②佐藤先生の講義「神田小学校の『学びの共同体』に期待すること」

オ アドバイザーから

○全体公開授業（算数「正多角形の辺と角」中村教諭）に関して

- ・子どもの様子としては、落ち着きがあり、それでいて、応答力（人の意見を聞く力・人の質問に答えようとする姿勢など）も感じられ、学習規律や基礎基本の力の側面はある程度育っているように思う。
- ・今日の授業では、作図法の内容と証明の内容が、整理されていなかったもので、主課題「なぜ正六角形になるのか」に取り組む必然性を持たせる（不思議だなあという気持ち）点に弱さがあり、協同の場面での「学び合い」が進みにくかった原因となった。
- ・しかし、今日の提案授業は、「本当の思考をしてないといけない課題」に挑戦した点は、高く評価したい。「本当の思考をしてないといけない課題」に挑戦させるには、「集団での学び」と「個人での学び」の折り合いを考える必要がある。例えば、集団思考で行き詰まったとき、個人思考をさせる。3分間個人で考えて見よう。→その後、全体へ → グループへというような柔軟な展開も出来るのではないか。（子どもの表情を見て、集団思考と個人思考を切り替えることが大切である。）（このことが出来る子ども達であり、先生の研修体制（姿勢）も充分あると思う。）



○今後の「学びの共同体」に期待すること

- ・子ども一人ひとりに「不思議だなという気持ち・感覚」（センスオブワンダー）を育ててほしい。今の子どもは、この感覚が不足している。そのことが「学びからの逃走」の要因となっている。
- （身のまわりにある現象→不思議だな→個人思考で解決しようとする→ひとりひとりの思いを共有化する→他の子のセンスオブワンダーを育てることになる。）

（図4）公開授業でのT・T

- ・神田小の実践は、かなり高いレベルにある。だからこそ、自己表現を豊かにさせる授業・一人ひとりの個性を開かせる授業を創造してほしい。是非、表現の授業——文学・芸術等の授業に挑戦し、「学びの共同体」を育ててほしい。

例えば、正答のない授業（文学の登場人物の思いを語るなど）を展開し、実際の生活体験に基づく意見を大切にすることを通じて「こんなこといったら笑われるかもしれない」という子どもの思いを解放し、「思いを深めあう学びの共同体」づくりを期待したい。

- ・そのため、自分の素直な答えを出した子どもを大切にしてほしい。

（アップとルーズの授業で、「だれがゴールしたかわかる」と答えたSの姿をとらえて）

一人ひとりのちがいを「良さ」として、集団にかえしてあげることで、「学びの共同体」が育つのではないか。子どもは、教師のねらいとは、別のところで、こだわりをもつ子もいる。そんな子が私は好きであるし、大切にしてほしいと考える。

○「学びの共同体」研修の在り方に関わって

- ・今日の授業では、自然にあちこちでT・Tの授業があった。全員の教師で一人ひとりの子どもを育てようとする雰囲気があった。私も現場にもどったら、このような研修・実践をしてみたいと感じた。（辻主幹の感想）・・・この「全員の教師で一人ひとりの子どもを育てようとしている」ということを、保護者に伝えることで「学びの共同体」への理解が得られるのではないかと思う。

- ・子どもの「学び」を保障するには「教科研究」も必要ではないかとの質問に対して私は、「教育実践論」も研究テーマとしている。岐阜県のある地域では、もう10年も前に、子ども研究中心から「教科研究」へ、そして、子ども研究へもどした。その理由として次の2点を言われた。

A 子どもの「学びの姿」を中心とした研修では、新任教員もベテランも互いに気づいた意見を言える。このことが大事である。「教科研究」では、知識量の多い教師主導になり、多数の受身の教師をつくり出すことになる。

B 「教科研究」に偏りすぎると、子どもから視線が離れた研究になることがある。

あくまで子どもの「学び」をどう保障するかが大切であり、それぞれの教師が、自由にいろんな実践を学び、よいところを互いに取り入れていけば良いのではないかと考える。

5 アドバイスを受けて—成果と課題—

- 本校の「学びの共同体」の授業公開（互見授業）も、この2年間で、50回を優に超え、少しずつではあるが、次のような子ども達が、増えてきていることは嬉しいことである。このことがなによりも大きい成果であると考える。

- ・先生や友達の話静静地に真剣に聞く子
- ・自分の思いをみんなの前に出せるようになった子
- ・友達の考えを聞いて、自分の考えを深める子
- ・1つの課題に向けて、みんなで解決しようとする子
- ・友達に説明することで、自らの考えを深める子

- <活動><協同><表現の共有>を授業に組み込む意義・意味への理論的根拠を与えて頂いたように思う。そのことで、本校の実践の強みと弱みが見えてきたように思う。

<強み>・・・児童の聞く姿勢、教職員の前向きな姿勢、<協同>場面での児童の成長など
<弱み>・・・<活動>場面の充実、豊かな表現力を育てること、本音を出せる仲間づくりなど
次の3つ「学び」をさらに吟味し、「学び」のある創造的な授業づくりを進めたいと考える。

- ①「モノや人やこと」との出会いと対話による「活動的な学び」^{*3)}
- ②他者との対話による「協同的な学び」
- ③知識・技能を表現し、吟味する「学び」

○具体的な公開授業の参観や事後検討会への参加、そして、実践的なご助言を頂くことで、教職員にとっても大変有意義な時間が過ごせたように思う。そのことにより、教職員の同僚性や「一人ひとりの子をみんなで見ていこう」とする職場風土もできつつあるように感じる。また、個人テーマと公開授業研の関係など今後の研修体制についても、ご示唆を頂けたと思う。

○子どもたちの「学びの成立」には、保護者等との協力関係をつくることの大切さを改めて認識することができた。それは、単に説明責任を果たすだけでなく、私たち自身の学習観を深めることでもある。

また、「すばらしい環境で毎日学校生活を送っていることに感謝の気持ちで一杯です。(中略)親が学校に求めることより、学校が家庭に求めることがあれば是非教えていただきたいです。」(保護者の感想)とあるように、佐藤先生にアドバイス頂いたことで、本校の取り組みへの理解が深まりつつある。

○今後、さらに研修と実践の質を高め、「学びの共同体」による授業改革が、子どもたちの確かな学力と共に、人間関係や豊かな人間性を育てることを実証していきたいと考える。

6 アドバイザーから

神田小学校に何度か訪問させていただき、「学びの共同体」に学校をあげて取り組む研修体制に触れられたことは私にとって刺激的でした。「学びの共同体」という言葉が、教師だけでなく子どもたちの口からも出ることがまず驚きでした。

職員室での教師の話題から子どもが消えたとか、出る話題は子どもの否定的な面ばかり、という指摘がずいぶん前になされました。同僚性の基本は、子どもの発達を多面的にとらえ、共有していく教師の日常的关系づくりだと思います。参観した授業での子どものグループ学習に先生方が寄り添い、観察とともに実質的な T.T.をされていたこと、子どもを固有名詞で話題にしていることが印象的でした。

参観では基礎学力形成に関わった授業を見させていただきましたが、機会があれば総合的学習の時間や自己表現活動の分野もぜひ見たいと思います。

引用文献

- * 1) 岳陽中学校 研究紀要
- * 2) 「学校の挑戦」 佐藤学著 (小学館)
- * 3) 「学び」から逃走する子どもたち 佐藤学著 (岩波書店)

⑨ 津市立椋本小学校

所在地	津市芸濃町椋本5047
交通機関等	バス 椋本新町西下車徒歩5分
電話番号	059-265-2002
FAX番号	059-265-2209
教職員数	20名
生徒数	167名

1 学校の概要

本校は、津市芸濃町の中心部に位置する小学校である。古くは宿場町として栄え、旧椋本街道（伊勢別街道）は今でもその面影を残している。また学校の近くには古くからの商店や旅館が営業を続けている。学校から5～6分歩くと、本校の校名の由来ともなっている樹齢1500年以上といわれる「大椋の木」があり、今でも地域の人々に親しまれている。

旧伊勢別街道は現在津関線となり、道筋は変更されて本校の近くを通っているが、津市中心部と名阪国道を結ぶ重要な道路となっている。

本校は、商店が周辺に存在すると同時に、農村としての面影も残し、学校周辺には田も多くある。

以前は、各学年2学級の中規模校であったが、折からの少子化は本校にも少なからず影響を与え、現在は各学年とも40名以下となり、30名前後の学年が多い。

2 学校、地域、児童の現状

本校は、167名の児童が在籍している。穏やかな地域で3世代にわたって一緒に暮らしている家も多いことから、全体的に温厚な子どもたちが多い。また、人なつっこく接する子どもも多く、学校全体としては落ち着いた雰囲気となっている。

本校は、豊かな心の育成のため、人権総合学習を中心とした取り組みをおこなっている。人権総合学習は、1年生から6年生までの系統的な取り組みを大切にし、地域の方をゲストティーチャーとして招聘して、仕事・地域活動・生き方についてのお話を聞かせていただくことを大きな柱としている。そこで、子どもたちと教師がともに自分の生活や生き方について考えている。また労働の意味や大切さについての学び、さまざまな人生観についての学びによって、人間的な幅を広げていきたいと考え実践に取り組んでいる。

さらに、人権総合学習と国語科を関連づけながら、話す力・聞く力・伝え合う力の育成にも取り組んでいる。こういった力は、授業はもちろんのこと学習発表会である「椋っ子発表会」や6年生を送る会、全校で意見を述べあう「友だちの輪集會」で発揮されている。

学校に対する地域の期待は大きく、学力を高めることと同時に、子どもたちの人権意識が高まっていくことにも大きな期待を寄せている。したがって、学校が地域にお願いして取り組む地域学習やゲストティーチャーの招聘にも快く応じていただいている。

保護者も学校に対する関心が高く、自由参観への参加者は毎回80%近くになっている。5月の定期家庭訪問、夏休みを中心として本校の人権・同和教育に関する意見交換をおこなった家庭訪問、秋におこなったいじめ問題に対する保護者の思いを聞き取る家庭訪問など、担任とも結びつきはかなり強くなっている。したがって、保護者が不安な思いを持ったときは、すぐに担任へ連絡が来て、担任

も家庭訪問をして対応するなど、保護者も厚い信頼を寄せている。

3 アドバイスを希望する課題

我が校では、外部評価、内部評価による学校経営の見直しはしているが、評価項目や評価の基準が妥当かどうか不安な面がある。そこで「学校経営品質」を導入することで、評価項目を精選し妥当な評価をしていきたいと考えた。それにより、より具体的な目標や活動を見つけていきたいと思う。

4 訪問記録

(1) 第1回

ア 日 時 平成18年6月14日(水) 14:00～17:00

イ 場 所 津市立椋本小学校会議室

ウ 参加者 谷口 洋：(財)社会経済生産性本部 自治体マネジメントセンター
辻 喜嗣：三重県総合教育センター
椋本小学校全教職員

エ 内 容

【活動内容】

◇学校長・教頭と今後の研修打ち合わせ(14:00～15:30)

- ・本校の概要を説明。
- ・本校の実態に応じて、今後4回の研修について、どのような取り組みを進めるかを打ち合わせる。

◇全教職員を対象に、谷口講師から学校経営品質の基本的な考え方についてプレゼンテーションによる講演。(15:30～17:00)

- ・ジョハリの窓を例に、学校経営品質の理念、さらに学校経営品質向上活動の考え方についての説明。
- ・学習者起点の立場で取り組むにはどうすべきか。
- ・社会に開かれた社会と共に歩む学校作りとは。
- ・他校における取り組み実践例の紹介。

【協議内容】

- ・学校経営品質向上活動の基本的な考え方と教職員の意識について
- ・学習者起点の立場とは。
- ・欲求と要望のちがいについて
- ・次回研修までに記入しておくカテゴリーの内容と記入について。

【アドバイザーから】

- ・学校経営品質に取り組みにあたって、学習者起点の立場で学習者が満足するように取り組むのはもちろんだが、教職員が仕事に満足できることが学習者の満足につながる。
- ・欲求と要望の違いを聞き分けながら、苦情については学習者からの貴重な意見をととして受け止めていく姿勢が必要であること。
- ・カテゴリーの記入の仕方について、まず全員が個々に考えることから始めることが大切。そして次回の研修では、合議プロセスについて取り組んでいくとよい。

(2) 第2回

ア 日 時 平成18年7月21日(金) 9:00~12:30

イ 場 所 津市立椋本小学校会議室

ウ 参加者 谷口 洋:(財)社会経済生産性本部 自治体マネジメントセンター
青 孝充:三重県総合教育センター
椋本小学校全教職員

【活動内容】

◇全教職員と全体協議及び合議(9:00~12:30)

- ・合議について谷口講師から説明を受ける。
- ・グループに分かれて合議をするにあたり、リーダー、タイムキーパー、書記、発表者を決め効率よく合議ができるようにした。
- ・教職員が3つのグループで各自2つずつ共通のカテゴリーに記入したものを合議して、グループの結果をまとめる。
- ・合議した内容をグループの代表者が発表し、質疑応答をおこなった。

【協議内容】

- ・カテゴリー2「学校の社会的責任」について
- ・カテゴリー3「学習者等の理解と対応」について
- ・カテゴリー4「実施計画の策定と展開」について
- ・カテゴリー5「人材育成と組織能力の向上」について
- ・カテゴリー6「仕事の進め方」について
- ・カテゴリー7「情報の管理と活用」について
- ・各カテゴリーの発表で、本校の強みとして、子どもたちに関する情報交換が頻繁で、共通した意識で対応することができることがあげられた。また、家庭訪問など、保護者との連携についても、個々の教職員が熱心に取り組んでいることがあげられた。
- ・弱みとして、個々の教職員が取り組んでいることが、組織全体の力としてまとまりにくいこと、その結果、仕事の出来にバラツキが生じることなどがあげられた。

【アドバイザーから】

- ・学校経営品質フレームワークの説明と、本校の場合「学習者の理解と対応」「人材育成」「情報の管理と活用」について、今後、さらに検討を加える必要がある。
- ・カテゴリー1・2・4・6の部分で合議した結果から、仕事の一貫性について課題が浮かび上がってきたので、今後は、その原因から探って、実践に結びつけるとよい。
- ・カテゴリーの評価、合議について、全体的にうまく進めていくことができていた。
- ・教職員の満足度を高めることも同じように考えていってほしい。

(3) 第3回

ア 日 時 平成18年12月13日(水) 14:00~17:00

イ 場 所 津市立椋本小学校会議室

ウ 参加者 谷口 洋:(財)社会経済生産性本部 自治体マネジメントセンター
辻 喜嗣:三重県総合教育センター

青 孝充：三重県総合教育センター
岡田恭子：三重県総合教育センター
椋本小学校全教職員

【活動内容】

◇校長と教頭・担当教諭による打ち合わせと協議（14：00～15：15）

- ・学校自己評価と学校経営品質のカテゴリー評価との関連について
- ・学校経営の改革方針と学校経営品質の関連について

◇全教職員による全体協議（15：15～17：00）

- ・椋本小学校が何をめざしていくのか、カテゴリーごとの内容で課題設定について考える
- ・年度方針とその後の活動に対する検証について

【協議内容】

- ・学校自己評価をおこなうことと、学校経営品質のカテゴリー評価をおこなうのは同じことなのか、違うとしたらその違いは何なのか話が合われた。
- ・学校自己評価をしっかりとおこなうことで、経営品質につなげていくようにすることが大切である。
- ・学校自己評価は、自分が立てたプランにどう近づいたかということの評価することが大切であり、項目が多ければよいというものではない。
- ・自分たちで基準を作り、その基準に基づいて自己評価をおこない、その結果を公表してことが大切になってくる。
- ・年度方針は学校一番大切にしている数字、例えば出席率とかを基準に設定して、心にこもった数字を大切にしながら活動をおこないようにしたい。
- ・学習者等の理解と対応について、子どもニーズを把握していくために、学習に対する傾向を細かく見ていくことの必要性が話し合われた。
- ・究極の児童理解は、一人ひとりの子どもを理解することである。
- ・少人数指導のあり方についても、指導する人数が少なくなったから指導が充実したというだけでなく、子どもたちが本当に力をつけるための方法や指導の工夫について、今後もっと考えていく必要がある。
- ・学期内で子ども理解のプランをどのようにしているか話し合う中で、例えば子どもたちが読書をしているときに、一人ひとり読んで直接聞いたり、子どもたちからの手紙を読んだりすることによって理解しているという活動が報告された。しかし、プランとして子ども理解が表されているということはない。
- ・子ども理解は、子どもの人間関係づくりにも影響してくる。
- ・外部評価表に耐えられるような自己評価表の作成が求められている。自己評価のあり方や自己評価表の内容については、今後の課題である。

【アドバイザーから】

- ・学校経営品質はオールマイティではないので、バランスを持って活動することが大切である。
- ・これからの学校教育では教師がより一層社会的責任を負うことになる。また、本当の意味で学校が開かれているか、問い直す必要がある。
- ・実施計画・方針を年度当初に管理職が示し、学校経営の方針が明らかになると同時に、担

任の学級経営計画をしっかりと立てることが大切である。

- ・事実前提の経営は、望ましい経営とは言えない。学校は、社会から委託を受けて使命を果たすために教育をしているという意識のもと、現状に妥協することなく学校の理想像を示しながら活動することが大切である。
- ・年度方針が役に立ったのか、PDCAで自己評価するのを最優先にしていきたい。組織であれば、評価は当たり前である。
- ・また現状では、学校経営の仕組みがはっきりしていない部分があるので、マネジメントをしっかりと根付くようにしていきたい。
- ・めざす学校像を示し、仕事の進め方の中でPDCAしていく。そして評価の仕組みや項目を見直していく。またマネジメントが学習者に届いたか確認するようにしたい。

(4) 第4回

ア 日 時 平成19年2月 7日(水) 15:00~17:00

イ 場 所 津市立椋本小学校会議室

ウ 参加者 谷口 洋：(財)社会経済生産性本部 自治体マネジメントセンター
辻 喜嗣：三重県総合教育センター
青 孝充：三重県総合教育センター
椋本小学校全教職員

【活動内容】

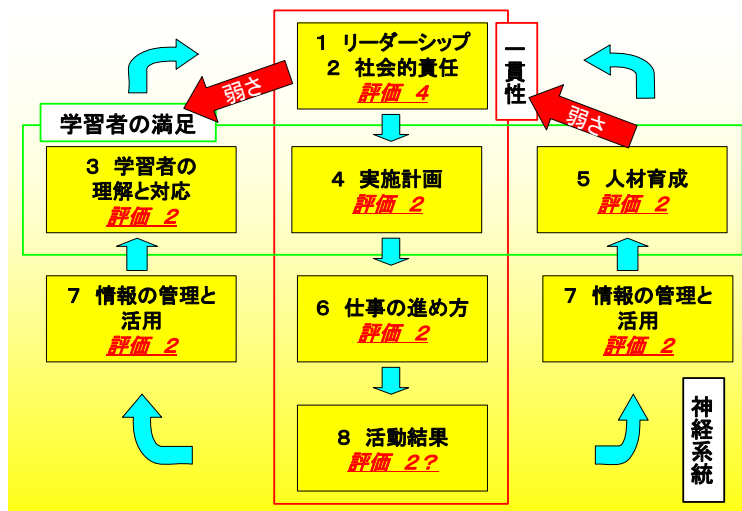
◇全教職員による全体協議(15:00~17:00)

- ・本年度の学校経営品質のまとめについて、プレゼンテーションと研究協議をおこなう。

【協議内容】

- ・プレゼンテーションでは、本校の本年度の取り組みと成果・課題について発表した。
- ・プレゼンテーションをうけて、来年度に向けて本校がやっていたいかなければならないことについて、話し合いをおこなった。
- ・学校経営品質が根付いていないことによって起きる課題は本校の場合何かをきっちり把握する。

- ・カテゴリ評価をおこなって「学習者の満足」と「仕事の一貫性」について見えてきた課題をどのように来年度に向けて取り組んでいくか考えた。



- 学習者の満足と教師の満足の両方がある、初めて活動の満足が高まるということについて話し合った。
- 各カテゴリーの関連と仕事の進め方についても考えた。
- 目標設定には、短期の課題と中長期の課題に対するものがある。短期の課題として「どう学力を高めていくか」ということが挙げられるし、中長期の課題は、3～5年後の姿ということになる。短期目標と中長期目標をしっかりと立てて活動し、自己評価をしていかないと満足度は上がっていかない。

【アドバイザーから】

- 現状の規則・道徳的なことから逸脱した問題を解決するのは今一番の問題ではあるが、これをいくらやっても満足度は上がらない。(事実前提の経営に陥ってしまう)
- 目標・目的をきちんと示しながら活動していかないと上記のことは減らない。
- 公教育をよくすることが大切である。
- PDCAをきっちり回す取り組みをしていくこと、そして結果の測定に目を奪われるのではなく、自分たちのやっていることが成長につながっているのか、伸びを見るようにしていきたい。
- 数字によって結果を測定する指標を決める。そして測定は学期に1回、年に3回おこない、中長期の目標は3年間をめどに測定していく。
- 内部評価と外部評価の差についても、比較検討していきたい。
- 個人で目標を設定し、業務計画を立てる。そしてそれを共有するようにしたい。
- 統一の用紙によって業務計画を立て、変わったかどうかアセスメントする。
- 活動がうまくいったときも必ず「どうしてうまくいったのか」を評価する。
- できることを書き、きれいごとは書かないようにすることで、本当に活動になる。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

- (1) 一人一人がよいと考えていた実践や学校経営について、カテゴリーの評価をもとに合議してみると、課題がたくさんあることに気づき、共通理解できた。一人一人の意識が学校全体への意識と変わってきたことにより、取り組みの質が学級内の子どもたちだけにとどまらず、他学年の子どもたちと関連づけて考え、実践できるようになってきた。



- (2) 課題を共通理解したことにより、実践の場で職員同士が意識的に声をかけ、課題解決に向けて取り組もうとしている。また、学年部での活動も活発化し、特に研究授業の指導案検討から授業実践の反省に至るまで、子どもたちの段階を追った成長を考える中で、自分の担当する学年の子どもを位置づけながら取り組みを進めることが、以前にも増して確立されてきた。
- (3) 今よりもさらに実践の質を上げようとする職員の意識が高まった。そのことは、まず子どもを理解しようと保護者と頻りに連絡を取り、また家庭訪問で学校や自分の学級の取り組みをていねいに説明することからも十分にうかがえる。さらに、出入り教科の担当教員とも子どもの様子について気になることがあればすぐに話し合いをし、子どもの実態や課題に応じた指導体制が素早くとれるようになっている。
- (4) 自分たちはがんばっているという意識は、現状追認の意識になりかねなかったが、学校経営品質の取り組みを始めたことで、現状の中の課題把握も鋭い視点を持つことができるようになってきた。また、本校の取り組みが中学校区の取り組みとさらに連携を深めていけるように、視点の鋭さとともに幅広さも出てきているのは、大きな成果であるし本校の強みともなっている。
- (5) 今後の課題としてまず挙げられるのは、学校経営の改革方針（P D C A）の取り組みを充実することである。平成18年度は年度当初に作成した学校経営方針のビジョンが教職員にしっかりと浸透していなかったこともあって、学校経営が一貫性に欠ける部分もあった。そこで組織力の強化や教職員の受動的な体質から能動的な体質への意識改革、子ども・保護者に対し共通理解を持って指導にあたることや対応すること、確かな学力を付けるための学力の充実などについて、統一をした用紙で計画を立て、P D A Cのサイクルを充実することで実践の質を高めていきたい。
- (6) P D C Aのサイクルに学校経営品質アセスメントを効率よく関連づけていくことが次の課題である。学校経営品質はそれ自体がオールマイティではないので、P D C Aと同時に取り組んでいくことで効果を発揮することが今回の研修を通じて教職員の共通理解となった。今後も、学校経営品質の取り組みを教職員自らが取り組んでいけるよう、学校プロフィールの作成やカテゴリ評価のあり方について再度検討をおこない、P D C Aと両輪で取り組んでいけるようにしたい。

6 アドバイザーから —成果と課題—

三重県の公立学校で経営品質向上プログラムに取り組みされてから試行期間を含め早いもので4年経ちました。これまでの4年間の取り組みの中でいくつかの学校経営品質を成功させる経験法則のようなものが得られました。それらをまとめますとまず第一は、学校の特性を踏まえた無理のない活動をしていること、第二に、学校経営の改革方針に基づきマネジメントのP D C Aが回されていること、第三に、学校経営が学校と保護者と地域が三位一体になって取り組まれていることです。

さて、椋本小学校はこの一年間「学校経営サポート事業」へ応募され、学校経営品質の向上に向けた主体的な取り組みがなされました。最初にお伺いしたときの先生方の不安に満ちた表情は忘れられません。「唯でさえ忙しいのにまた余分な仕事が増えるのではないか、学校経営品質は難しそうだな」など様々な思いが交錯したのではないのでしょうか。この一年間で椋本小学校には4回伺いましたが回を重ねるたびに先生方の熱心な取り組みの結果、学校経営品質に関する理解を深めていただきました。学校プロフィールを作成していただき、アセスメントも体験していただきました。最終の第四回目に

伺ったときには来年度より改革方針による学校経営のマネジメントサイクルとアセスメントを両立した取り組みを行いたいと校長先生が力強く語っていただきました。いよいよ学校経営品質の本格的な取り組みが行われるのだと勇気付けられる思いがいたしました。安定した豊かな地域に支えられ椋本小学校の学校経営品質は必ず根付くものと期待しています。

⑩ 玉城町立外城田小学校

所在地	度会郡玉城町蚊野 2 0 1 8
交通機関等	バス 外城田下車徒歩 2 5 分
電話番号	0 5 9 6 - 5 8 - 2 6 0 6
FAX番号	0 5 9 6 - 5 8 - 7 4 9 9
教職員数	2 3 名
生徒数	2 8 8 名

1 学校の概要

校区に大企業の工場があり、活気のある町である。稲作などの農業も盛んで、自然に恵まれている一方で、新しい住宅を建築して、校区内に転入してくる児童も多く、子どもや保護者の価値観も多様化してきている。校区は広く、年間を通じて全校児童が集団登校をしている。

2 学校、地域、児童の現状

全校児童 2 8 3 名、1 3 学級の学校である。学校の教育活動について、保護者の関心は高く、連絡帳などを通じて、日常的に子どもの様子を情報交換している。また、学校の教育方針に対して、積極的に意見を述べていただいている。地域の民生・児童委員の方々の協力も厚く、登校時には毎朝通学路に立って見守りをしていただいているので、子どもたちは安心して登校することができる。

学校内では、児童支援委員会を十分に活用し、各学年に在籍している特別な支援を必要としている児童への対応の方針を確認し、全教職員で共通理解のもと指導にあたってきた。相手の気持ちを思いやりながら話を聞く力をつけていきたいという強い願いを持ち、国語の教科指導を核としながら、全教育活動を通じて聞く力を育てていく必要があると考えている。

3 アドバイスを希望する課題

平成 1 7 年度の学校経営品質によるアセスメントで、カテゴリー 5（人材育成と組織能力の向上）の個別評価及び合議評価ともに評点が低く、弱みとして「教職員各自が自分に必要な能力の開発を個別に進めているが、ニーズの把握、計画性という点で漠然としている」ことが明らかになった。具体的には、全学年で授業公開を実施しているが、年間を通じて計画的に資質向上を進めていく校内研修のあり方がまだ十分に確立されていないということである。そのため、教職員の意識改革を一層進め、計画的に校内研修のあり方を見直し、外城田小学校らしい在り方を確立していく必要がある。

今年度は、指導力を高める校内研修の在り方を確立するための具体的方策について、アドバイスをお願いしたい。

4 訪問記録

(1) 第 1 回

ア 日 時 平成 1 8 年 6 月 2 8 日（水） 1 0 : 3 0 ～ 1 7 : 0 0
イ 場 所 玉城町立外城田小学校 パソコンルーム
ウ 参加者 石井 順治（元小学校長）
辻 喜嗣（研修分野研修企画室）
本校職員

エ 内 容

- (ア) 2・4・6年生全学級の授業参観
- (イ) 研究授業 3年A組国語『ちいちゃんのかげおくり』
- (ウ) 研究授業反省会
- (エ) 2・4・6年生担任への個別指導

【協議内容】

- (ア) グループ音読のため、意欲があり声が健康的であった。どの子どもよく話し合いに入っていた。課題についての話し合いの途中でグループの話し合い活動を入れたのはよかった。そのことにより、たくさんの手が挙がり主体的な学習ができた。
- (イ) 全グループが授業の始めに音読したことはよかったが、反面、子どもの中で発表会が一段落したという意識になり、その次に中心課題を板書したときも、子どもの反応がよくなかった。また、途中にも音読を入れていく必要がある。音読を入れて本文にかえっていく作業が必要である。
- (ウ) 発表が少ないからといって、ノートに書いてあることを発表させると、子どもの目的が発表するだけになる。これでは、学びにつながらない。書いたことを発表するにしても自分の言葉で語らせることが重要であり、ノートからはなれて発表するようにしたい。

オ アドバイザーより

- (ア) 今行っている校内研修は、国語の指導法の研究ばかりではない。子どもの心をいかにつかむかである。
- (イ) お互いの発言の中で学びあいがある。先生から教えてもらうのではない。集団があるから自分の発言の意味づけができる。自分の発言を大事にしてもらっていると実感できることが大事である。
- (ウ) 子どもがつながりあうということは、相手を受け入れることができるかということである。そのムードを学校全体でつくっていくことが大切である。
- (エ) 現在いじめ問題がいろいろと言われている。例えば元気な数人の子が好き勝手なことを言い、おとなしい子が圧倒されている。担任は、いじめではない・そんなことぐらい…と考えるかもしれないが、担任の物差しでは測らないようにしたい。子どもの心に繊細になってほしい。いじめられる子どもの気持ちが大切である。聞いて何かをするということは、なかなかできない。経験することが大事である。普段からいろいろとやらせるようにする。やらなくてもすんでしまうことをなくしていく必要がある。

(3) 第3回

- ア 日 時 平成18年11月22日(水) 10:30 ~ 17:00
- イ 場 所 玉城町立外城田小学校 多目的室
- ウ 参加者 石井 順治(元小学校長)
辻 喜嗣(研修分野研修企画室)
玉城中学校教職員(玉城町教育振興会国語部会会員)
本校職員

エ 内 容

- (ア) 1・3・5年生全学級の授業参観
- (イ) 研究授業 4年A組国語『ごんぎつね』
- (ウ) 研究授業反省会
- (エ) 1・3・5年生担任への個別指導

【協議内容】

- (ア) じっくり話し合う授業であった。板書にとらわれない新しい形を提案してもらった。
- (イ) 友達の話を良く聴く力をつけていきたい。書き込みにしばられないで、友達の意見を聞いてそこで新しい考えを述べるという力も育てたい。
- (ウ) こだわりのある女子児童に、よいタイミングで音読の機会を与えたので、当該児童の意欲が高まった。音読の力が、子どもたちにずいぶん育っている。声をつくっていくということに、継続的に取り組んでいくことが大切である。
- (エ) 中学校の立場からの感想として、小学校は丁寧な授業の進め方をしていると感じる。中学校との連携も考えながら、国語の教科指導に広がりを持たせたい。

オ アドバイザーより

- (ア) 研究発表会への参加がいくつかあった。その実践を小学校、中学校とも紹介するので、参考にしながら、子どもが学びあう姿をめざしてほしい。
- (イ) 書き込みは、子ども一人一人が作品と出会う作業である。読み深めが進んできたら、書き込みは見ないで話し合いをしていく必要がある。
- (ウ) 子どもと子どもが学びあう姿を育てていきたい。そのために、教師としての力量をつけていくということをあらためて自覚していきたい。
- (エ) 授業後の反省会では、授業のビデオのどこをもう一度検討したいのか、もっと積極的に申し出て、子どもの姿に基づいて協議をしていきたい。子どもの発言がつながっているところを中心に発言してはどうか。授業によって、子どもの心に知的な興奮、知的な喜びが起こるような授業をめざしたい。学校生活全般を通じて、遊びから学びへの切り替えをどう子どもたちに挑んでいくか、課題としたい。

(4) 第4回

- ア 日 時 平成18年12月6日(水) 10:30 ~ 17:00
- イ 場 所 玉城町立外城田小学校 多目的室
- ウ 参加者 石井 順治(元小学校長)
辻 喜嗣(研修分野研修企画室)
本校職員

エ 内 容

- (ア) 1・2・4年生全学級の授業参観
- (イ) 研究授業 6年A組国語『海の命』立松和平作
- (ウ) 研究授業反省会
- (エ) 1・2・4年生担任への個別指導

【協議内容】

- (ア) 授業後の検討会のときには、積極的に発言するとともに、ビデオを止めて話し合いたいところを意識して出し合うようにしていきたい。
- (イ) 子どもの読みには、その子なりの生活経験などから様々な段階がある。「なぜ、憎いクエのことをおとうと呼ぶのか」という問いを持つ子どももいる。様々な発達段階の子どもがいる中で、すべての子どもが何らかの場面で自分の思いを出せるように指名計画を立てたことは、今回の実践に関しては効果があった。
- (ウ) 授業者が、子どもの書き込みを十分に把握して、授業に生かしていた。グループ活動を入れるタイミングが難しい。子どもの発言を教師がリボイスすることについては、今後は課題となるであろう。
- (エ) 国語の授業というのは、国語だけでできるのではない。子どもとの日常会話や生活指導の中から、現在の子どもの様子を十分に把握して授業にのぞむ必要がある。また、教科の特性を生かしながら、他教科で育てた力も国語に生かしていけるような授業づくりをしていきたい。

オ アドバイザーより

- (ア) リボイスをすることを子どもにさせるという考え方がよいのではないか。今回の授業では、聞き合い学び合う授業をしたいから、授業者が座って聞く姿勢をとった。さらに、板書をするをやめた。そして、すべての子どもの学びを保障したという特色がある。
- (イ) 子どもの発言がつながっているところに着目して、発言していくようにすると、学び合う姿を明らかにすることができる。学び合いの授業をめざしていくには、どこで子どもがつながっているかを見つけ出す力をつけていくことが大切である。
- (ウ) 授業後の検討会では、どんなことでも発言していこうという意識が重要である。来年度につながるような問題意識を互いに持ちながら、年度末の研修に向けて進めていきたい。

(5) 第5回

ア 日 時	平成19年1月26日(金)	10:30 ~ 17:00
イ 場 所	玉城町立外城田小学校	多目的室
ウ 参加者	石井 順治(元小学校長)	
	辻 喜嗣(研修分野研修企画室)	
	本校職員	

エ 内 容

- (ア) 3・5・6年生全学級の授業参観
- (イ) 研究授業 1年B組国語『たぬきの糸車』 きし なみ 作
- (ウ) 研究授業反省会
- (エ) 3・5・6年生担任への個別指導

【協議内容】

- (ア) 授業者は、授業の入り方を迷いながら、「思ったことを、何でも言っていよいよ」という入り方にしたが、子どもたちの反応はあまり良くなかった。外城田小学校の授業スタイルにとられず、子どもの実態を踏まえて担任の持ち味を出した授業をしていくことが大事であ

る。

- (イ) 本時で扱う範囲が狭いので、読み深めが進まなかったのではないか。座席は、コの字型をとっていたが、子どもは緊張してしまったようである。コの字型は、ひとりぼっちという孤独感を感じやすい。
- (ロ) 授業をやってよかったと思えるような校内研修になってきているのがよい。今回から授業記録をとるようにしたことで、授業後の検討会でも子どもの姿で話し合いを進めることができた。今後も、能率良く授業記録を作成し、検討会の場で生かしていくようにしたい。
- (エ) 今回は、事前研修会で授業者から学級の子どもの様子や課題と感じていることを聞き取ってから、授業を参観するようにしたので、ビデオを止めて検証したい場所を意識し話し合いを深めていくことに役立った。

オ アドバイザーより

- (ア) 文学の授業では、お話の世界が楽しいと思えるような授業の始め方をしていく必要がある。吹き出しは、たぬきになって話している言葉を書くものである。「楽しそう」という書き方は誤りである。
- (イ) 低学年のうちに、人の話をよく聞ける子どもを育てておくことが重要である。その積み重ねがあって、高学年で安心して語ることができる子どもたちが育ってくる。低学年は聞く力、中学年はつながる力、高学年は発言する力を育てていくようにしたい。このことにより、低学年でハイハイと元気の良かった子どもたちが、高学年で急にものを言わなくなるというようなことが少なくなる。
- (ロ) 学校ぐるみで子どもを育てるという意識で、みんなが取り組んでいくことが大事である。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

(1) 成果

- ア 年間を通して、全学級の研究授業を参観していただいたので、子どもの成長も見届けていただきながら、授業についてのアドバイスをいただくことができた。教師の持ち味を生かしながら、力量を高めていくことの大切さを改めて認識することができた。
- イ 今年度の新しい試みとして、事前に授業者から、授業への願いやめざす姿などを説明する機会を取り、参観者がそのことを踏まえて授業を参観し、授業後の反省会でビデオをとめたいところを明確に意識できるようにした。このことにより、授業後の反省会で討議が焦点化しやすくなった。
- ウ 県内外の学校の取組を紹介していただいたので、めざす教師集団、子ども集団の姿が明らかになってきた。

(2) 課題

- ア 学び合う集団づくりのためには、お互いの発言の中で学び合っていくことが重要である。集団があるから、自分の発言の意味づけができる。自分の発言を大事にしてもらっているという実感が子どもたち一人一人に感じられるように、授業づくりをしていかなければならない。
- イ 子どもと子どもが学び合う姿を育てていきたい。そのために、今後は、授業後の反省会の在り方を見直し、子どもの発言が繋がっているところを中心に討議し、次の授業に生かしていくよ

うにしていく必要がある。

ウ 低学年は聞く力、中学年はつながる力、高学年は発言する力を育てていきたい。そのために、6年間を見通した全体指導計画を持ち、教職員が共通理解をしながら指導にあたっていく必要がある。

6 アドバイザーから —成果と課題—

私が本年度継続的にかかわってきた学校は26校(県内5校)である。その中で、外城田小学校ほど私の訪問を願ってくれた学校はなかった。一年前の2月、昨年度の最後の訪問において、授業をめぐる協議会が終了するや、全職員が立ち上がって私の次年度の訪問を要請された情景を、つい昨日のように覚えている。外城田小の先生方は外部協力者である私を必要としていた。それはどうしてだろうか。

本年度6回の訪問を終えて、私にはその理由がなんとなく分かる。

私は、訪問するたびに、メインとなる授業の教室だけでなく、いくつもの教室に入った。今月は1、3、5年生、次の月は、2、4、6年生というように。だから、2回に1回はどの教師の授業も拝見していたことになる。そして、メインの授業についての全教員による協議会の後、その日公開された授業の授業者と個別面談を行った。面談で話し合う中身は、授業についてはもちろん、生徒指導にかかわる子どもへの対応にも及んだ。私の訪問回数は6回だったから、一年に3回はそういうことをしていたことになる。今振り返ると、それは、先生方へのカウンセリングのようなものだったと言える。教師として日々子どもに対応する先生方にとって、私は、悩みや困っていることを打ち明け、打開策を模索するための相談相手だったのかもしれない。それが、私への要請の大きな理由だったように思える。

学力低下、そして、いじめと立て続けに学校教育の問題が社会問題化し、安倍総理が教育を重要課題にしたこともあり、今、国中が「教師力、教師力」の大合唱状態になった。今、教師は、その力量が問われている。しかし、子どもは、社会の変化や家庭の変化によって複雑化し、教師の子どもへの指導も、これまでとは異なるものが要求されるようになった。それは教師の苦悩を大きくしている。そのような折、その苦悩を打ち明けられる相手がいるということが、どれだけそれぞれの教師にとってうれしいことであったか、そういうことなのではないかと思う。私の仕事が、そういう役割を少しでも果たせていたとしたら、私としてもうれしいことである。

外城田小に限らず、私の訪問するほとんどの学校が挑戦しているのは、「知識伝達型授業」からの脱却である。教師から子どもへ一方的に「教える」授業ではなく、子どもたちが自ら考え、その考えを交流する中で学び合う、そういう学び方の構築である。私は、学力の向上のためにも、子どもの人間関係の育成のためにも、学ぶ意欲の向上のためにも、この転換を図らなければならないと考えている。それは、「ネット de 研修」における講演でも述べたとおりである。そういう意味で、外城田小の今後の研究に期待したい。

⑪ 伊賀市立青山小学校

所在地	伊賀市阿保 1 7 8 9
交通機関等	近鉄 青山町駅下車 徒歩 2 0 分
電話番号	0 5 9 5 - 5 2 - 0 0 4 0
FAX番号	0 5 9 5 - 5 2 - 0 1 3 4
教職員数	4 5 名
生徒数	5 6 5 名

1 学校の概要

本校は平成 16 年、旧青山町内小学校 3 校（阿保小学校・上津小学校・矢生小学校）が統合され青山町立青山小学校として開校した。その後、市町村合併により伊賀市立青山小学校へと校名を変更し現在に至っている。伊賀市の南端に位置し、団地在住の児童が大半をしめ、周囲は山間部に囲まれている。

2 学校、地域、児童の現状

一昨年まで本校は、文科省の学力フロンティア事業の指定を受け国語科及び音楽科を中心とした教育研究活動を展開してきた。これまでの取り組みから、子どもたちに「読解の楽しさ」や「友だちと意見を交流させることの大切さ」、「思いを体で表現することの尊さ」などを身につけさせることができたが、いぜんとして多くの課題を残している。

これまでも、子どもの実態や学校の課題をもとに教育研究活動を重ねてきたが、教育方法や教科を限定するなど、子どもたちの現状から多様な教育方法や教材研究のあり方を追究してきたとは言えない。また、特別支援教育・人権同和教育・教科研修の連携が不十分であったことも課題の一つである。

そこで、本年度は、本校の課題を上記の三つの視点から整理し、研究の方向性を明らかにした上で、「子どもを元気にするにはどうするか。」という視点から、各学年の現状にあった教科領域や単元を設定し研究を推進していきたいと考えた。

3 アドバイスを希望する課題

- (1) 一つの教科・領域に限定しない教育研究活動のあり方について
- (2) 研究授業の事前指導・事後指導
- (3) 先進校の紹介

4 訪問記録

(1) 第 1 回

- ア 日時 平成 1 8 年 6 月 2 7 日 (水) 1 5 : 2 0 ~ 1 7 : 1 0
イ 場所 会議室
ウ 参加者 本校職員

エ 内容

(ア)活動内容

○職員との全体協議 15:20～17:10

- ・講師自己紹介、職員自己紹介
- ・本校児童の実態の報告
- ・研究授業事後研究

(イ)協議内容

○本校児童の実態について

個々の生活背景や発達課題を背景として、様々な問題を抱えている。現在、地域や家庭と連携しながら課題の解決に当たっているところであるが、子どもたちのよりよい成長のためにどのような指導が効果的であるか、研修の中で研鑽していきたい。

○研究授業事後研究

今回の授業がA児を中心とした学級児童にどのような効果をもたらしたのかという点や、授業を進める上で改善すべき点や配慮すべき点について協議を行った。

オ アドバイザーから

- 子どもをどのようにつなげていくかという点について、具体的な子どもの様子をもとに議論を深めているので、今後も大切にしていけるべきである。また、子どもと子どもは直接つながるのではなく、「教(材)」や「活動」を通してつながっていく。
- 丁寧な板書にすると、子どもの声を十分に受け止めることが難しい。板書で子どもどうしをつなげていくことも重要で、そのためにはキーワードを明確にし板書することで可能となるのではないか。
- 学校全体で「知識」「技能」「思考力」「忍耐力」などをどのように系統的に養っていくか検討が必要ではないか。

(2) 第2回

ア 日時 平成18年10月27日(金) 13:50～17:10

イ 場所 4年1組教室、校長室、会議室

ウ 参加者 本校職員・青山中学校職員・さくら保育園職員

エ 内容

(ア)活動内容

○ 研究授業・授業参観 13:50～14:35

4年1組 人権総合学習「みんなおなじだったら」

○ 2学期の取り組みと児童の実態について報告 15:00～16:00

○ 研究授業事後研究および青山保小中交流会 16:00～17:10

(イ)協議内容

○ 研究授業・授業参観

<単元の目標>

- ・ 「ちがひ」について考えることによって、自分自身の固定観念を見つめなおすことができる。
- ・ 「ちがひ」を認め合い、他者を受け入れることができる。

- 2学期の取り組みと児童の実態について報告
各学年の視点児についての資料及び2学期まで実施された公開授業の指導案について協議を行った。

- 研究授業事後研究
今回の授業がA児を中心とした学級児童にどのような効果をもたらしたのかという点や、授業を進める上で改善すべき点や配慮すべき点について協議を行った。

オ アドバイザーから

- 学習の中でA児を中心とした4人の子どもたちの活躍が十分に見られた。この点において本授業は成功していると思われる。
- 教材文に応じたイラストが使われており、子どもたちの課題や深めていくべき視点が明らかになって非常によかった。
- 子どもたちが発する言語に視点を当てると、「堪忍袋の緒が切れる→腹が立つ→むかつく→キモイ」と、だんだん物理的にも心理的にも深いところから浅いところに変化してきている。事実をきちんと見ずに遮断してしまう言葉が多用されており、教育的な課題として残されている。

(3) 第3回

ア 日時 平成18年10月31日(火) 9:40 ~ 10:25

イ 場所 5年2組教室

ウ 参加者 本校職員

エ 内容

(ア)活動内容

- 研究授業・授業参観

5年3組 人権総合学習 『『しょうがい』ってなんだろう』

(イ)協議内容

都合により研究協議に参加していただくことはできなかった。このため、後日授業に関してのご意見などを文書でいただいた。

<単元の目標>

- ・ 「しょうがい」とは何かを考え、学習する。
- ・ 目の不自由な人との出会いを通して、自分自身に誇りを持って、前向きにいきることのすばらしさを学ぶ。
- ・ さまざまな個性、人間性をもっている私たちが、お互いに理解しながら支えあっていきいくことの大切さに気づき、自分にできることを考え、実行しようとする。

オ アドバイザーから (一部抜粋)

一つ目は、子どもたちの感性のすばらしさです。先生は10時15分頃、自分と照らし合わせて考えてみよう。感想を言ってもらおうかな。ということで子どもたちに発表を求めました。そのときに子どもたちから「感想といっても・・・」「感想はいいたくない。」という小さな声が出ました。一見否定的に見える子どもたちの様子でしたが、私には、子どもたちが自分の「感性」を大事にする気持ちを持っているのではないかと思いました。「自分と照らし合わせて」という言葉が重たいだけに、大橋さんの生き方と共振したり揺さぶられたりしたことを、言葉に表すことがなかなかできないこと、とかそのことを言葉に表す(つまり言葉によって他のともだちと共

有する) ことへの抵抗があったのではないのでしょうか。そのことを私はとても大事なことだと思います。

二つ目は、質問とコメントなのですが、大橋さんがなぜ変わったのかという「授業のポイント」において、子どもたちから「人のやさしさ、あたたかさにふれて自分を変えようと思った。」と意見がでてきたときに、先生が「人のやさしさに気づいたと言ってたね。」とまとめたところです。そのときに、子どもたちはそのやさしさの具体的な内容について共有していたのでしょうか？大橋さんは、どんなことを「人のやさしさ」と言っていたのでしょうか？というもう一つ「つっこみ」があってもよかったのではないかなと思いました。

(4) 第4回

ア 日時 平成19年 2月28日(水) 15:30 ~ 17:00

イ 場所 視聴覚室

ウ 参加者 本校職員

エ 内容

(ア)活動内容

講演「学力・感性と授業 ～言葉と体験をつなぐ(青山小学校にて)～」

(イ)協議内容

・本校の実践をもとに総括を行っていただき、来年度への示唆をいただいた。

オ アドバイザーから

○ 学力問題の本質

現在の教育改革や標準学力検査実施の背景に PISA 調査が大きな影響を及ぼしている。この中で、「読解力」については14位であり、大きな衝撃をもたらした。この「読解力」は単純に文章を読み解く力を測定しているのではなく、いくつかの情報の中から適切な情報を取捨選択することのできる力、すなわち「読解リテラシー」を測定している。また自由記述の無答率が非常に高いことから「真に考える力」が低下していると言える。したがって、読書量を増やすとかいわゆる読解問題を多く解くというような単純な学習量を増やしたとしてもその効果はあまり期待できず、「真の学び」を子どもたちにいかに提供していくかが今後の課題となる。

○ 学力について

学力は以下の三つに分類することができる。「①見える学力(知識・技能)」「②見えにくい学力(知識・技能獲得力、活用能力、感性)」「③見えない学力(関心・意欲・感性・自己肯定感)」で、②と③が①の基礎部分となっていると考えられる。現在は、見えにくい学力と見えない学力をどのようにつけていくのか具体的に改善されないまま、見える学力をいかに高めるかという点のみ議論されている。子どもたちの現状は、見える学力を学校現場の努力によって学力全体を何とか維持している状態である。見えにくい学力と見えない学力が十分につけられない要因としては、生活環境の変化や将来が展望しにくい社会情勢などが考えられるが、早急に対応していく必要がある。

○ 学力と感性について

感性には、「感じる力(感受性)と形式知に変換していく力」と「好悪の静かな感性」の二つの位相があり、どちらが「培う」「育てる」ときの対象となる力であるか、あるいはどちらでもないのか、どちらも対象となるのかについては今後も検討していくべき課題である。

- 本校の取り組みについて
 - ・ 「つながりを大事にした授業」・・・核となる、大切に見守る児童を決めて子どもどうしのつながりを大切にしていることには大きな意味がある。今後は、つながることで「何が可能になるのか」を具体的にすることで、取り組みがさらに深まっていくと考えられる。
 - ・ 「個の課題を把握した授業研究」・・・一人ひとりの子どもの様子を的確に把握し、教材や授業の展開を工夫していたことは、特別支援教育との関連もあり、今後も大切にしていきたい観点である。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

- 研究授業の参観をしていただいたので、子どもの実態を見ていただきながら授業についてアドバイスをいただいた。子どもの実態把握の方法、教材と子どもの関係、指導のあり方などについて示唆をいただくとともに理論化を図っていただき教師の力量向上につながった。
- 本校の課題について一緒に考えることで、外部からの客観的で率直な意見をいただくことができ、校内研修が活性化された。
- 子どもの実態に応じた指導の工夫を行ってはいるが、実践を理論化あるいは一般化できるにいたっていない。今後も継続した研修が必要である。
- 学力の本質や現在の教育課題についてご講演いただいた。本校の実態と照らし合わせて考察し、次年度の研修の方向性を明らかにしていく必要がある。

6 アドバイザーからー成果と課題ー

今年度、青山小学校へ計5回行かせていただいた。生活科、総合学習、道徳（人権学習）とどちらかという総合的な領域の授業参観・検討が中心だったように思う。

青山小学校における授業研究は、いくつかの特徴を持っている。

一つは、子どもたちの「つながり」づくりを授業において研究の焦点に据えていることである。参観・検討をした授業はそれぞれ分野が異なっていたが、授業において子どもたちどうしの「つながり」を重視していた点については共通する。

「つながり」、関係性の構築の視点は今日では従来よりもましていっそう重要な視点だと思われる。その理由は、一つには、子どもたちどうしの関係性の希薄化である。この状況はとみに最近、進行している。携帯文化の普及、テレビゲームなど、遊びそのものが個別化し、子どもたちどうしが関係をつくる生活的な土台がなくなってきている。もう一つは、真の学びが「学びあう」ことでしか生まれないのではないかと、学習論が問い直されている点である。佐藤学氏の「学びあう共同体」構想もこうした学習論の見直しが問題意識として存在する。

私も、この点に関して、最後の報告(2007.1.28)において、学力論との関係で、子どもたちどうしの関係性を構築することがきわめて重要なことを指摘した。「学んだ結果としての学力」とともに「学ぶ力としての学力」（市川伸一）の重要性の指摘である。コミュニケーション力とはまさに他者と協働して学ぶ力なのである。

二つ目は、子どもたちの中のいわゆる「学習困難」な子どもに焦点をあてて、その子どもがどのように学びを授業の中でつくりあげようとしているか、を丹念に見ていこうという研究のスタイルである。個々によって、さまざまな条件を持っていて、一概には働きかけをこうすべきだとは言えないが、こうした姿勢は、特別支援教育が始まる中できわめて重要な観点だと考える。

青山小学校の教師たちは、年間において、一人一回（校長も含めて）は授業を公開し、検討を受けてきた。このことはあまり指摘されないが、これからの学校改革の一つの大きな礎になるだろう。お互いに授業を核にして教師どうしが関係性をつくりあげていくこと（同僚性の構築）が学校改革の本筋であるからだ。

⑫ 名張市立つつじが丘小学校

所在地	名張市つつじが丘北3-5
交通機関等	バス 北1番町下車 徒歩5分
電話番号	0595-68-3485
FAX番号	0595-68-3729
教職員数	43名
生徒数	625名

1 学校の概要

本校は、昭和56年（1981年）つつじが丘住宅団地の開発に伴う人口の増加によって現在地に新設された。児童数は最大1386人、学級数34を数えたが、近年児童数も漸減し現在は625名となっている。現在の校区はつつじが丘団地と新しく開発が進んでいる春日丘団地の2ヶ所である。地元名張市をはじめとする周辺地域と、奈良県との県境に近いという地理的条件から京阪神方面よりの転入も多い。

2 学校、地域、児童の現状

本校の実態として、対人関係を構築する能力、つまり児童の人間関係の希薄さが挙げられる。それは、コミュニケーション能力の不足、語彙力の低下から来ていると考えられる。また、教師が教材や学習内容の認知を全面に押し出そうとする授業パターンの固執からなかなか抜け出せないでいる状況にあることも関係している。そこで、本年度の方向として、語彙力を高めれば、自分の混沌とした内面を意識することで自我が明確となり、相手とのコミュニケーションが図れ、信頼関係を強められると考えた。また、信頼に支えられた人間関係の中で学びあう授業を展開することで、意欲的・主体的な子どもが生まれる。そこで、国語科の「聞く・話す・書く」活動を通して、言語環境を整え、語彙を増やす。次に、語彙を増やすことで、コミュニケーション能力を高め、書くことを日常化し、定着させ、自己を発見さらには表現する、学び合う授業を展開していく。つまり、「聞く」「話す」は人間関係の構築を、「書く」は個人内の自己実現を図る活動と捉え、それに相互作用を組み込む授業を展開させることで、本校のテーマである主体的に学び続ける子どもを育てることに迫れると考えた。

3 アドバイスを希望する課題

本校は昨年度より、三重県教育委員会の学校経営サポート事業を受け、中京大学の杉江修治教授を研修会において招聘しつつ、授業改善の研究的実践を推進している。それは、まず主体的な子どもを創ることをねらいとし、教職員が従来の教え込み（教師主導型）の授業から、学び合う授業への質的転換を図るものである。これは、異なった考えや発想の基本的原理は変えることなく、同一次元に存在させ同時に特性を生かしつつ機能させる「統合」の理論を根拠とし、教科目標の達成と望ましい集団を支える人間関係形成を授業の中で同時に機能させるところにある。しかも、個人の認知目標獲得を縦軸に置き、個人・グループ・一斉など、様々な授業形態を横軸に置いた授業展開を構築していくことを目指す。

見方を変えて言うならば、授業の中での学習者の「学び」を「学習者の主体的な営みとしての学習活動」と捉え、「学習者同士が主体的にかかわり合いながら学習活動を創り上げていく学び合う授業」

を大事にしていくことである。その出発点は、学習者の学習への意欲と動機付けにある。そのため、「参加」「協同」「成就」をキーワードとして、授業展開を工夫していく。

4 訪問記録

第1回

【活動内容】

6月15日（木）

・公開授業、杉江先生の指導

※公開授業（4年1組、4年2組、4年3組、6年1組、6年2組、6年3組）

杉江先生からの講評と指導を受けた。

【協議内容】

◇杉江先生より公開授業を通して指導を受ける。

○学びの授業づくり

・子どもがかわるために授業はある。子どもの主体的学習をつくるのが協同学習である。

○授業計画の前に

・児童観 教師が授業を工夫すれば、すべての子どもは伸びる。

・学力観 社会を維持発展させる子どもを育てたい。

・指導観 受身ではなく主体的な学習へ。すべての子どもが活躍する学習に。

○授業づくりのキーワード

<参加>

・課題を明確にする。

・見通し（手順）を示す。

・単元計画を子どもに伝える。

・子ども同士の話し合い。

<協同>

・学びあい、高めあい、励まし合う。

・学習者全員が伸びることが大切である。

<成就>

・授業終了の5分間、単元の終わりに個々の児童の成長がわかる時間を確認し、成就観を持たせる。

【アドバイザーから】

やはり、子どもの学びをたくさん拝見できた。ぜひ、昨年度の3月の段階をベースに積み上げていくようにしてほしい。私は、必ずしもグループ学習をやってくださいというつもりはない。今求めるべき学力をどうつけるかということだ。主体的に自ら学ぶ力をどうつけるかだ。情報処理能力や子どもの育ちをしっかりと押さえた実践が必要である。学びこそ我が事である。とても大事である。協同学習からの話をするが、一人ひとりよりよい学習をするための方法論が必要である。もちろん主体的な学びの過程は必要である。4年も6年も基本的には学びをどう育てるかという指導設定はなされていた。教師の出場が極端に少なかった。しかし、枠組み

づくりが大事である。あくまでも学習活動主体である。勉強は教えてもらうものであっては、学ぶ意欲は育たない。勉強出来ないのは先生の教え方は悪いというのは間違いである。引っ張る授業は必要以上やめたほうがよい。子どもが学ぶ仕掛けづくりのため、仕込みづくりをすること。

6年生の3クラスは、ディベート風討論会だったが、机の配置は3者3様でおもしろい。ねらいによってその形はそれぞれあるのじゃないか。質問と回答のキャッチボールにおいて、時には班の5～10秒待ってから発表させることも必要である。今日は話し合いの時間に発表したい子もしていた。3回のセッションはよかった。この過程が、学級全体での思考の深まりを作っていく。個人の活躍でグループの意見が出され、それがクラス全員で高まっていくことが目標なんだということに気づかせることに意味がある。

聞いている側も結構緊張感もって聞いていた。聞く側の課題は何か。よく聞くことにより聞くことが高められる。時にはメモを取りなさいという指示も必要である。相談タイムもよかった。しかし、気のきいた子が結論をつくることもある。これはタダ乗り現象になる。こんな場合は役割ローテーションで難しい子には、他の子が支援することも大事だ。そこに、しっかりやると仲間に受入れられる信頼関係が築かれるわけである。ただ、単元が終わって読み切りにしないことだ。文学教材でその単元でそれですまってしまうはいけない。学力つけるという見通しは、単元が終わったところで読み切りにしないことである。

(講話 杉江修治)

第2回

【活動内容】

7月6日(木)

・公開授業、杉江先生の指導

※公開授業(3年1組、1年1組、1年3組、1年4組)

杉江先生からの講評と指導を受けた。

【協議内容】

◇杉江先生より公開授業を通して指導を受ける。

○全体反省会から

- ・子どもを横につなぐ働きかけを強めることが必要。そのために、グループの課題を的確に示すこと。
- ・子どもの主体的な学びには仕掛けが必要である。
- ・グループ活動では、子どもの思考に介入するのではなく、話し合いの仕方を支援していくことが必要。
- ・目の前の子どもの実態だけにとどまらず、設定を高めることで子どもが伸びていく。

○学年反省会から

- ・単元・本時のねらいを明確にする。
- ・協同のためには仕掛けが必要。
- ・説明のための事前指導は必要であり、わけの分からないことで話し合わせない。
- ・先生に向かって言うのではないということを徹底させたい。

【アドバイザーから】

大きな印象として、今日の研修会が教え方の議論ではなく、子どもの学びに注目した議論が成立していることは、この学校の研修の文化としていいのではないか。これまでは、教師の在り方の議論が大部分だった。もっと大事なのは、子どもの学びの議論だ。従来は教材の研究にとどまらず研究の方向の議論をしてもらうことだ。〇先生は、ずいぶん工夫されていて興味深い。一つは、もっと子どもを横につなぐ働きかけがあったらよかったのではないか。グループ形態を組んでも、どういう構えで子どもらに話し合いをもつのかで違いがでてくる。互いに話し合いできればいいのか、もっと厳しい連携までいけばいいのかの違いである。そして、グループとしての課題をどれだけの確に示せるかである。グループとしての仕事ははっきりしていれば、子どもははっきりやる。グループの中での相手を高めるために、今自分がここにいるのだということで、そこから学ぶ個人の責任をもっと追究してもいいのではないか。それぞれのグループが、クラス全体でどう貢献するか。グループで充実してクラスへ他の子もなるほどとさせるものをつくりだそうじゃないかと考え、最終的にそこで出した知恵をグループの責任で提示することが必要。そのためには、本時の授業の見通しや単元の見通しをしっかり持たせねばならない。グループの仕事で終わらず、クラス全体で自分らの知恵を伝えることだが、3年でそれが要求できるのかということだ。どんな驚きがみんなの中に出るか。さらに、子どもたちの主体的な学びのためにしかけにまだ工夫の余地があるし、導入時の見通しの持たせ方や展開時の協同学習の持たせ方、的確な振り返り、特にどんな振り返りをしたら手応えが感じられるのかなどである。繰り返しになるが、子どもの主体的な学びをつくるためには、教師が引っ張って順調な授業をしていたのでは、子どもらの思考は止まる。しかし、子どもの主体の授業は、生きる力を高める同時学習の授業である。教師の仕掛けの中で、子どもが主体的に学んでいくそんな工夫がまだたくさんある。

(講話 杉江修治)

第3回

【活動内容】

10月19日(木)

・公開授業、杉江先生の指導

※公開授業(1年2組、3年1組、3年2組、3年3組)

杉江先生からの講評と指導を受けた。

【協議内容】

◇杉江先生より公開授業を通して指導を受ける。

<1年2組>

○グループ活動はチャレンジだったが、いい授業だった。

○大きな目標があるのは、活動が明確になるよかった。

○本などで勉強しようとするムードができていてよかった。意図的にするのがよい。

○自分が動いて自分が変わるという仕掛けがよかった。

○横につながるクラスづくりが上手である。

◇課題「みんなにわかる説明文」とはどういうのかははっきりしなかった。条件をもっとはっきりさせると目標がわかりやすくなる。

◇「がんばって手をあげてるね」ということは将来的にどうか。自分が認められるために手をあげるのではなくて、みんなに気持ちを伝えるために手をあげているという視点で返していく方がみんなを高められる。

◇話し合いの仕方がむずかしかったのではないか。3人グループなら1番の子はこれ、2番の子はこれと分担を決めてまとめるというやり方だと全員参加ができる。

<3年1組>

○取り組みの表が明示されていてよかった。

◇アドバイスする側と出す側の二つの課題があったほうがよい。

◇話し合いの仕方に工夫がほしい。グループで交流するときには話し読みする等。

◇最初の指示が大事である。教師がいちいちグループ内の助言に回る必要がなくなる。

<3年2組>

◇「整理する」という言い方はあいまい。「表を完成させましょう」とか具体的な指示が必要。

◇グループ発表の仕方も、全体にわかっていなかった気がする。

◇グループ発表の仕方も、全体の前で発表するパターンだけでなく、自分たちのグループ以外との交流や発表するという形もある。

<3年3組>

◇子どもたちにとって「こそあど言葉」はおもしろい教材であったかどうか疑問である。

◇ひとりですることと集団ですることの意味をはっきりわからせることが必要である。

◇教師が全員に考えさせる授業では、5秒くらい待つような全員が参加する授業のしかけが大切である。

【アドバイザーから】

今年度第3回目の校内研修会への参加である。3限に3年生国語2学級、4限に全校公開の1年生国語1学級、5限に3年生国語1学級を参観し、その後教職員全員による研修会と3年生担任との懇談会を持った。これらの実践の参観と研究協議への参加を通して次のような感想を持った。

①子どもたちを横につなぎ、学習集団のもたらす意欲付けを高める努力が確実に実を結んできている。要支援の児童の学級適応のよさ、積極的に課題達成に向けた児童相互の話し合いの姿などを高い頻度で見出すことができた。

②子どもへの学習期待の高さ、いいかえれば、子どもに対する学習の要求水準を高く設定する試みはなされていた。しばしば、教師の方から子どもの学習の限界を低く設定しがちな小学校の実践では大切な観点である。校内の実践全般でこの観点がより広く認識されることが望ましい。

③実践では常識的に導入されている教師と児童の問答による授業の進め方に、しばしば非効率な面があることに言及させてもらった。当意即妙の挙手行動の背景にある児童の動機の本質を考える必要がある。仲間に向かう学習活動か、自分自身にのみ向く活動かを見極めがいろいろ。

④学習参加度をより高め、児童相互の交流をより促すグループ活用の手法について2、3ア

アイデアを紹介した。また、児童の学習活動を的確に方向づける学習課題、集団課題の示し方にもさらに工夫を重ねる必要がある。

⑤1年生の実践で見られたような、関連資料を集めて手の届くところに豊かに展示するというような、日常的な興味関心の高まりを図ることのできる学習環境づくりの試みをよい事例として、他の指導機会でもそういった実践を広げる必要があるだろう。

⑥教材研究をさらに深める必要がある。国語と関係の深い読解力（広い意味の）育成を、どの教材でも実現していくために、一步踏み込んだ教材理解をする余地がまだあると感じられた。

（記入者 杉江修治）

第4回

【活動内容】

11月16日（木）

・公開授業、杉江先生の指導

※公開授業（2年1組、2年2組、2年3組、2年4組、5年2組）

杉江先生からの講評と指導を受けた。

【協議内容】

◇杉江先生より公開授業を通して指導を受ける。

課題が自分の身近なところから出発していけば伝えたくなる。その課題が大事だと思う。話すということについては、振り返りをざっと見ても成功したと話すところで満足している子がいる。反対に、聞いてメモするということが、時間限られていたし弱かったのではないか。全体への伝え返しも少しずつできてきているが、聞いてかいつまんで大事なことを箇条書きにメモすることが難しかった。

（T1）

課題の魅力あれば調べていくといったが、まさに子どもたちは喜んで調べて自分の考えを出してきた。これをどんなふうに分たちの書くこととつなげるか友だちの発表聞いてどんなふうに変ったかということが今後の課題だ。

（T2）

写真などを貼って見せることはインパクトある。文字を書いて発表しているのが多い。細かい字は見えない。ここでもっと自分の伝えたいことをまとめて伝えられれば。

（T3）

場の設定では、今日やることで話す目線を聞き手に合わせるものがあの設定では、発表者と聞き手が視線合わせにくかったのではないか。

（T4）

他の学校の実践で、ポスターセッションの活動を5年でしていた。チャイルドフェスティバルを目標にしていくなら、効果的な発信を工夫していくことが大事だ。

【アドバイザーから】

第4回目の今回では、3時間目に5年生の研究授業を参観し、4、5時間目に2年生の授業を2クラスずつ、参観した。教科はいずれも国語である。その後、2年生の教師との研修会、

続いて全教師との研修会をもった。今回の研修会での成果と課題は次のようにまとめることができる。

- ① 新しい教科書は、幅広い意味の「読解力」を高める仕掛けを組み込んだ教材構成になっている。それらは従来の指導手続きを踏襲しようという発想では対応できない。

今回の5年生の授業は、児童主体の単元の流れを、児童の学習の心理に沿って計画した跡がみられ、「読解力」を高める上で有意義な実践となった。

本時では、児童の学習の構えを主体的にするための導入の工夫として、学習課題の明示、学習手続きの明示など、十分な時間をかけて試みていた。また、単元の流れを掲示し、見通しを持たせると同時に学びのあとづけを可能にするという試みもなされており、児童の学びを促す工夫が当初から十分になされていた。座席配置も車座という形をとり、学習活動に応じた工夫がなされていた。

「話す」「聞く」「伝え返す」という、コミュニケーション技能に関わる目標が明示され、学習後の振り返りでも同様の評価の視点が明示された。こういった首尾一貫した計画がなされていたことは大切なことである。

なお、児童の一斉形態での交流に際して、彼らの中で話し合いが進んでいく仕掛けを作り出していた。教師の介入は最小限に抑えられ、本当に必要な視点の転換などに支援を限っていた点も、子どもの広い学力を育てる上で大事なアプローチである。学級を課題解決で協同するという、課題解決志向型の集団として育て上げてきている成果を十分にうかがうことのできる実践であった。

- ② 2年生の4クラスでは、クラスによる差は見られたものの、総じて子どもの学ぶ姿に落ち着きが見られた。また、5年生と同様に、学習の見通しをさまざまな形で持たせる「仕掛け」を導入してきている。研究授業にとどまらず、簡単な形での、より多くの教科教材で同様の考えに基づく「仕掛け」を組み込むことが大切である。単元単位で予め作っておく「振り返りカード」などは、同時に単元の学びを見通す道具にもなるものであり、積極的に活用されることが望ましい。

また、各クラス共に「週間ニュース」を児童全員が書き、仲間と教師のコメントを掲載している。教師も含めた学習集団成員の信頼を増す装置として有効であるように感じた。

- ③ 年度当初から試みられてきている、児童を横につなぐ試みは成果をあげてきているという印象である。また、児童の学びをいかに主体的な構えで促すかという視点からの授業設計に心を砕く姿も強く見られる。常にどういう子どもを育てるのかという、求められる学力観を念頭に置くことを忘れず、本校の実践が重ねられるならば、学級から学校全体（教師も含む）にわたる協同的で、全員の伸びを全員の喜びとできる学校づくりが可能になると思われる。

今回は、年度当初からの教師集団の一致した努力が着実に成果をあげてきているという印象を強く持つことのできる機会であった。

(記入者 杉江修治)

第5回

【活動内容】

2月18日(木)

・公開授業、杉江先生の指導

※公開授業(5年1組、5年3組、5年4組)

杉江先生からの講評と指導を受けた。

【協議内容】

○「大造じいさんとガン」の授業を振り返って

・ 5年1組

授業の形態を班や個人や一斉で行ったが、グループや班での活動に入る前に、ほとんど個人で考える時間をとることができなかった。自分の考えをしっかりとってから、グループでの活動に入ることが大切だと反省した。

・ 5年3組

本時は、グループで一作品を選び、本の紹介を通して、椋鳩十作品の中に共通して流れている大きなテーマを話し合うことを目指した。本の紹介の場面では、一グループごとに前に出る形をとったが、ポスターセッションの形にして発表者との距離を縮めた方が効果的であった。また、前向きに聞くことのできる声かけをしていくことも必要ではなかったかと感じた。

・ 5年4組

子どもたちの発表の様子としては、意見と理由に分けて発言できていたことは、聞いている子どもたちにとっては理解しやすかったと思う。しかし、発表したグループに自分の考えを伝えるという部分が弱かったように思う。また、教師が引っ張ってしまった場面もあったので、これらのことについては、今後の指導の中で軌道修正していきたいと考えている。

【アドバイザーから】

第5回目の今回は、5年生3クラスの国語授業を各1時間ずつ参観した。各クラス共に児童の主体的な学びを促す仕掛けづくりに配慮の加えられたものであった。学習課題の提示と組み立て、内容に応じた学習形態の変化の導入、自己評価の機会を与えることによって学びの振り返りの機会を設けるなど、昨年からのさまざまな試みが一定の方向性をもってきていることをうかがえる実践であった。ただ、まだ、各所で教師の出番が多くなる傾向も見られ、児童主体の学びを保障することがめざす学力を育てるのだという、指導態度の一貫性についてはまだ課題が残っていることがうかがえた。

なお、各クラスにいるはずの要支援の児童が参観中ではほとんど目立たず、授業に参加意欲をみせており、支え合う学習集団としての学級の成長をうかがうことができた。

(記入者 杉江修治)

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

○授業の中で、流れを示したこと(掲示物、手順)で、子どもは見通しをもち、主体的に参加できた。

○少人数集団の形態を取り入れることで、児童が自分の考えを出しやすくなった。

△グループ学習から後の全体交流にうまく結びつけられず、各班の発表の羅列に終わることがあった。

△児童に見通しをもたせる場合、単元全体や年間計画といった長いスパンのものについては、児童に知らせる手だてが弱い面がある。

△日常生活の中で、お互いが支持しあえる学級の雰囲気づくりがもっと必要である。

△言語能力を高める取り組みは、さわやかタイムだけでなく、辞書を引く習慣づけなどのでこ入れが必要である。

◎「どういう子どもを育てようとしているのか」の論議からの共通理解が今後必要である。

6 アドバイザーから —成果と課題—

2006年度はつつじが丘小学校の5回の研修会に参加した。この学校が向かっている授業改善の方向は、主体的な学習意欲、学習態度の形成を促し、習得を高める筋道として適切であると思う。この方向を見失わないために、来年度も引き続き3つのポイントでの留意点を課題として、実践的研究を進めていただけたらと思う。

その1は、自ら学ぶことのできる力の大切さをすべての学習指導場面で一貫させること、言い換えれば、そのような学力を身につけさせたいのか、常にそのことを確認しながら実践を進めることである。また、そのようなめざす学力について、教師集団として共通の確認をすることである。

2つ目は、児童の主体的な学びを支える学習集団づくりの手綱を緩めないことである。教師の介入を出来るだけ減らし、学習課題の解決という児童共通の仕事に協同して取り組む機会を出来るだけ多く設定することが望まれる。そのためには課題設定などの教師の仕掛けの工夫がさらに重要となる。

3つ目は、評価、特に自己評価によって学びの結果としての自分の成長を確認させる機会をきちんと設けることで、本物の意欲づけを図ることである。振り返りカードの工夫など、教師同士の実践成果を持ち寄って常に改善していくことが求められるだろう。

(記入者 杉江修治)

⑬ 名張市立梅が丘小学校

所在地	名張市梅が丘北1-340
交通機関等	バス 梅が丘1番町下車徒歩3分
電話番号	0595-63-2160
FAX番号	0595-63-8764
教職員数	37名
生徒数	548名

1 学校の概要

本校は、平成元年に大阪のベッドタウンとして近鉄沿線に開発されてきた名張市内の住宅団地の一つとして、梅が丘地内に開校し、本年で18年目を迎える学校である。団地の発展とともに児童数も急増し、平成7年には最大1287名にも及んだが、その後は減少に転じ、現在は548名、19学級となっている。校区には住宅団地周辺の旧農村部も含まれている。児童数の減少が続き、低学年より各学年2学級規模の学校に近づいてきている。

2 学校、地域、児童の現状

本校の児童は、活動のゴールがはっきりし、自らの課題を捉えることができる意欲的に取り組める児童が多い。一方、なかまに対する心ない発言をしたり、授業や特別活動の時間において教師の話やなかまの発表を聴くことができなかつたりと、子どもどうしの心の奥底でのつながりが弱いと思われる実態がある。そこで、「聴き合い、学び合い、思いを表現できる授業の創造」を研修のテーマとして取り組む中で、授業や集会、行事などで、人の話をしっかりと聴き、落ち着いた姿で学習に取り組む様子も見られるようになってきている。

3 アドバイスを希望する課題

上記のような児童の実態がある中で、本年度も「聴き合う」「学び合う」授業づくりを中心に取り組みを継続させていきたいと考えている。そこで、聴き合い学び合うことを重視しての授業づくりに取り組まれている石井順治先生に継続してご指導いただきたいと考えている。「授業づくり」を学級経営の中心に据え、互いの意見を聴き合い、学び合い、互いに支え合える子どもを育て、地域に信頼される学校づくりを進めていきたい。

4 訪問記録

(1) 第1回

- ア 日時 平成18年5月25日(木) 9時00分～17時30分
イ 場所 名張市立梅が丘小学校
ウ 参加者 石井順治(元四日市市立常盤小学校長)
本校職員(梅が丘小学校職員)

- エ 内 容 2年生全体公開授業
1～4年生授業参観
校内研修会での指導助言

【協議内容】

- 本年度の研修に関わって・・・知識伝達型の授業を変えていこうという教師の強い意思がないと、授業は変わらないということについて、全員で再確認
- 2年生3組の全体公開授業について
 - ・言葉のキャッチボールを行っていこうとする教師の姿勢が素晴らしい。
 - ・聴き合える子を育てるには・・・教師が子ども一人ひとりのことをよく聴いていくという姿勢を示していく事が何よりも大事である。
 - ・「聴ける教師」・・・子どもと教師のつながりが生まれて、それが子どもと子どもへのつながりへと広がっていく。そうした1時間1時間の地道な積み重ねがあって安心感のある授業や学級が生まれていく。
 - ・題材「詩」にかかわって
 - 互いの意見を聴き合える中で次々と独自の気づきや読み取りを出し合うことができた。
 - ・一時間の授業の中で、勢い子どもたちの生活実態、背景と結び付けていこうとすることは、難しいし、賛成しない。
 - ・子どもたちの「詩」の楽しみを教師のねらおうとしているところへ強引に引っ張り込もうとすることには無理がある。作品の世界を十分に味わえる時間を保障していきたい。

オ アドバイザーより

- 全体公開となった2年生の授業は、石井先生からお話のあったように、子どもたちが互いの気づきや思いを出し合い、聴き合おうとする姿勢が随所に出ていて、年度の初めの提案授業としてふさわしいものとなった。
- 学校全体として考えたとき、聴き合える授業づくりが、どの学年も進められているかという点、難しいところもある。教師自らが、子どもの声をいかに幅広く受け止め、返すつないでいくか、という実践を積み重ねていくことが重要である。

(2) 第2回

- ア 日 時 平成18年10月31日(火) 9時00分～17時30分
- イ 場 所 名張市立梅が丘小学校
- ウ 参加者 石井順治(元四日市市立常盤小学校長)
本校職員(梅が丘小学校職員)
- エ 内 容 3年生全体公開授業
2～4年生授業参観
校内研修会での指導助言

【協議内容】

- 3年生1組の全体公開授業について
 - ・戦争の時代背景、状況等の把握ができていない児童もいる。工夫が必要。
 - ・課題づくりでは、子どものつぶやきに注意をし、拾い上げていきたい。
 - ・板書に気をとられると子どもの意見を聴き逃してしまうこともある。効果的な板書をど

のようにしていくか。

- ・発言できていなかった子どもも発言者の方を向いて聴くことができています。
- ・3年生の実態として想像は膨らむけれど、本文につなげて考えることが難しい。
- ・何のための音読か、ねらいをしっかりと持ってやっていきたい。

オ アドバイザーより

- 音読の場面で、子どもの意識がみんなで読みを合わすことだけになっていると、平坦な読みになってしまう。自分の読みたい読み方で読ませることが大事。
- 授業は最初の10分が大事。その日の出会いをいかによくするかで45分間の授業が決まってしまう。
- 子どものいい発言に対応できる教師の力が必要。瞬間的にできるかどうかは分かれ目。
- 子どもたちが、今、何を考えているか分からなくなる程度程度の板書があってもよいのでは。発言を全部書く必要はない。

(3) 第3回

ア 日時 平成18年11月30日(木) 8時30分～15時30分

イ 場所 名張市立梅が丘小学校

ウ 参加者 石井順治(元四日市市立常盤小学校長)
本校職員(梅が丘小学校職員)

エ 内容 1 限目公開授業
2 年生全体公開授業
うめっ子表現集会
研究協議での指導助言

【協議内容】

- 2年3組の公開授業についての研究協議会を開催
 - ・授業者の話しぶり、やわらかい、癒される、にこやかな表情が素晴らしい。
 - ・子どもの実態に即した授業。
 - ・考える時間の確保と子どもの気持ちのキャッチ。
 - ・自由に話せる時間帯はいいが、教師側から課題を投げかけると、途端に止まってしまう。教師が出ていくタイミングが非常に難しい。
 - ・本気で子どもの意見を聴くということはどういうことか。教師が我慢してしゃべらない、また必ず評価をしていかないと子どもは変わっていかない。
 - ・ペアでの話し合いが有効であった。

オ アドバイザーより

- 教育の役割は「人づくり」である。これからの教育のキーワードは「人間のつながり」であり人と人とのつながりを築いていくこと。その中でも大切なことは「聴く」ことである。同様に必要なものは、取り組もうとする「意欲」である。まずは、教師集団の研修に取り組もうとする前向きな互いの意欲が大切である。
- 2年3組上谷学級では、すべての子どもが安心して話せる雰囲気ができている。ちゃんと聴いてもらえるという思いをもたせるまでには、教師が子どもの声を「待つ」という時間の積み重ねがあったことだろう。子どもとの信頼関係が深まったであろう。待っている時

間は、教師にとってはしんどい時間であるが、この時間は無駄ではなく、思考時間となっている。

- 1限の時間では、あれもこれもと、欲張っては進められない。子どもたちに、どこで練り合わせていくか、互いの学びの中でどのように思考を深めさせていくか、焦点化しておく必要がある。
- 学び合っていくには、グループやペアで話し合う時間が必ず必要になってくる。意識的に授業に入れていきたい。
- 自由に意見を出せる雰囲気や時間は必要であるが、意見の出しっぱなしになってしまうようにしたい。どこで焦点化していくか、教師の力が試される場所である。

(4) 第4回

- ア 日 時 平成19年1月18日(木) 9時00分～17時15分
- イ 場 所 名張市立梅が丘小学校
- ウ 参加者 石井順治(元四日市市立常盤小学校長)
本校職員(梅が丘小学校職員)
- エ 内 容 4年生全体公開授業
1～6年生授業参観
校内研修会での指導助言

【協議内容】

- 4年生1組の全体公開授業について
 - ・一つ一つの言葉へのこだわりが子どもたちに浸透してきている。
 - ・思いを出せる場の雰囲気づくりが大切。どうしても読みの深い人が中心となって進めてしまうので、誰もが安心して出せる雰囲気づくりが大切。
 - ・思いを出せる仲間づくり、授業づくりが大切。
 - ・子どもの実態に合わせて教材を選ぶことのむずかしさを感じる。
 - ・やっぱり教師が子どもの声を徹底して聴くことからだと痛感。
 - ・本気で子どもの読みを聴く。子どもたちに向かう教師の姿勢が問われる。
 - ・教師の側から一方的に問うのではなく、子どもたち自らが学び合っているような展開を創造したい。
- オ アドバイザーより
 - 上谷先生の授業に挑む姿勢に学びたい。
 - やはり原点は「聴き合う」であり、どう聴き合わせていくかである。
 - 子どもたちの学びのリズムを大事にしたい。先生が出すぎないで。
 - 先生は、教室にいるすべての子を把握したい。視線の幅広さ、繊細さ、教室の隅々まで目を配る。

5 アドバイスを受けてー成果と課題ー

年間を通して、授業を中心に児童の学び合いをいかにして深めていくのかについて、実際に授業を見ていただき、教師が「聴く」ということはどういうことか、子どもたちが聴き合い、学び合うとい

うことはどういうことかを子どもの事実をもとに指導していただいた。そして、教師集団が、日常の授業や活動の中で、そのことを意識していくことで、子どもたちは、ずいぶんと変わりつつある。子どもたちの学校生活を見ていると、この研究をはじめた3年前よりとても落ち着いて授業や生活ができるようになってきた。まず、なによりも友だちの意見を聴こうとする子が増え、友だちの意見を聴いて考えを出そうとする子がずいぶん増えてきている。また、全校での集会では、どの学年の発表も大切に聴いていこうとする態度が顕著であり、みんなの前で表現していくことについて自信と誇りをもてるようになってきている。これもアドバイザーによる指導を受け、本校の教師集団が研修に対して前向きに取り組んできた成果であると思う。

今後も教職員一人ひとりが、知識伝達型の授業を変えていこうとする意識変革の姿勢を大切にしていきたい。子どもたちの思いを聴く中で、教師の出番はどこなのか、どういった展開をしていけばよいかといった課題はあるものの、日常の授業を大切にしながら、子どもたちどうしをつないでいきたい。そのためにも、お互いが授業を開き合い、お互いに高まり合えるような研修を積み重ねていきたい。

6 アドバイザーから —成果と課題—

「私は産休と育休で休暇をとっていたのですが、本年度になって復帰して、子どものすがたがまるで違って驚きました。すごく聴けるようになっていたんです。今日の音楽集会のような集中するすがたはありませんでした」

2006年11月30日同校の公開研究会が行われ、私は講師として参加した。冒頭の言葉は、その研究会を終えて帰路に着いた私を名張駅まで送ってくれた教師が車中で私に話してくれたものである。私は、この言葉に梅が丘小の3年に及ぶ取り組みの確かさが表れていると感ずうれしく思った。梅が丘小学校の授業づくりは、地域におけるつながりの薄い新興住宅地内に住む子どもが通う学校ということもあり、子どもと子どもをつなぐ学級づくりが存在する授業をという願いからスタートした。そして、子どもと子どものつながりには、相手を受け入れるところと態度の育成が欠かせないという考えから、授業における聴き合い、学び合いの構築を目指した。とかく発表を重視する授業づくりをしてきた教師には、聴く指導はそれほどたやすいことではなかったと思われる。しかし、梅が丘小の教師たちは、「聴ける子どもに」という思いを共有して互いの授業を公開し合い、考え合ういとなみを持続してきた。中でも、私が訪問する日は、すべての教室の授業が公開され、子どもたちの学び合いのすがたの検証が行われた。

そうした授業の検討の中から、聴ける子どもが生まれる背景には、子どものことばを丁寧に深く聴ける教師が存在しているという確信のようなものが生まれた。こうして、同校の教師たちの授業づくりは、教師が何をどう聴いて、そこから授業をどうデザインするかが基本になっていった。11月の公開研で、どの子どもも次々と自分の読みを語りそれを表情豊かに聴き合うという素晴らしい指定授業をした上谷教諭は、教師である自分が聴くことに徹したとき、初めて子どものことばの重みと意味を感じることができるようになったと述べていたが、それこそ、梅が丘小の3年に及ぶ研究の到達点であったように思う。

学校における研究は、地道に、日常的・持続的に、互いの授業という具体的な事実にくっついて実施するものである。それが、すべての学級で行われること、そして、互いの授業から学び合う同僚性が発揮されること、それが基本でなければならない。冒頭のような言葉が梅が丘小の教師自身から出たということは、その基本が確かに行われていたということに他ならない。

外部協力者として年に3回～5回のかかわりではあったけれど、以上のような梅が丘小の研究に参画できたことをうれしく思っている。2年続けての公開研究会に参加した教師たちによって、このような梅が丘小の取り組みの大切さが広がっていくことを切に願っている。

学校経営サポート事業 報告書

発行：平成19年3月

発行者：三重県教育委員会事務局研修分野

連絡先：研修企画室

〒514-0007 三重県津市大谷町12番地

Tel 059(226)3526

Fax 059(226)3706